№62557/23

大臣責任論自序

夫レ大臣責任ノ制ハ行政權ノ立法權及司法權ニ對スル獨立ヲ認ムル國家構成ノ緊要部節ナルカ。若シ今日ノ英國ニ於ケル如ク立法ニ對スル行政ノ獨立完全ナラス議會ノ多數ヨリ出テ、議會多數ノ意見ヲ行政ノ責任ヲ行政ノ權ヲ占ムルコトヲ得、又行政上ノ要件ハ一々議會ノ同意ヲ經ルノ後之ヲ行フニ於テハ、行政ノ意志ハ會テ議會ノ意志ニ違ナキ其ノ間責任訴訟ノ制ヲ容ル、ノ隙ナシ。又米國ニ於ケル如ク司法權ヲシテ行政權ヲ管轄セシメ裁判官ヲシテ憲法法律ニ違反スル行政上ノ命令處分ヲ無効トスルノ權アラシムルニ於テモ司法權ハ以テ大臣ノ違反ヲ制スルニ足リ責任訴訟ノ法ハ存スルモ無用ナリ。然ルニ若シ立法行政其ノ職權ヲ分チテ憲法上相侵サヾルノ

義務アリ、立法權ハ以テ行政部内ニ及ホスヲ得ス、行政權モ亦以テ法律ノ紛更ヲ試ミルコトヲ許サレサルニ於テハ、果シテ法律違反ノ命令ヲ發シ處分ヲ爲シタルトキ之ヲ矯正シテ憲法上二權ノ衡平ヲ復スルノ道ヲ設ケンコトヲ要ス、是レ乃チ大臣責任ト稱スル國法上ノ關係ノ由テ起ル所ニシテ、其ノ苟モ立法行政ノ機關ヲ分離シ行政權ヲシテ其ノ範圍内ニ在テハ獨立シナカラ憲法法律ニ違背スルコトヲ得ザラシムルノ國家ニ於テハ之カ爲ニ一定ノ規程ナカルヘカラサル所以ナリ。

是ヲ以テ大臣告訴ノ制ハ英國ニ於テ行政權ノ尙ホ盛ナリシ時代ニ其ノ端ヲ開キテヨリ之ヲ各立憲國ニ傳ヘ、爾來幾多ノ進歩改良ヲ經テ終ニ今日獨乙墺太利ノ間ニ於テ殆ト完備ノ制度ヲ見ルニ至レリ、蓋シ獨墺ノ間ニ在リテハ行政權ノ獨立稍〻中正ヲ得タルニ因ルカ。現今立憲政治ヲ行フノ國ハ、ブレマン、ハンブルグノ如キ自治市國及瑞西聯邦ヲ除クノ外皆大臣訴訟ノ事ニ關シ憲法ノ本文ニ多少綿密ナル規程ヲ設ケ、或ハ別法ヲ以テ更ニ精細ニ規定セリ。人或ハ責任訴訟ノ事ヲ以テ千八百四五十年ノ頃ニ於ケル歐洲一時ノ流行ニ歸シ、今日ハ既ニ國法上ノ古物ニ屬スルカ如ク論スル者ハ誤テリ。現ニ佛國千八百七十五年ノ憲法第十二條ニ各大臣ハ其ノ職權上ニ於テ犯シタル罪ニ對シ代議士院ヨリ告訴ヲ受ケ元老院ニ於テ裁判セラルヘシ、告訴、審問及判決ノ手續ハ別法之ヲ定ムト云ヘリ、而シテ此ノ別法ハ未タ存セストイヘ𪜈千八百七十九年既ニ本條ニ依リ當時ノ内閣大臣ヲ告訴セントシタリ。巽典ハ千八百六十八年二月廿日改正責任法ヲ發布シ、後其ノ要領ヲ憲法ニ移シ、又翌年十二月責任訴訟法ヲ發布シタリ。普魯西ハ憲法中責任ニ關スルモノ五箇條アリテ、其ノ裁判手續ニ關シ約スル所ノ別法ハ未タ成立ニ至ラサルモ千八百六十三年ノ草案ハ下院ヲ通過シタ

リ、蓋シ普魯西政府既往ノ形勢ハ以テ一般國法ノ常經ト爲シ難キ者アリ。又有名ナル墺太利ノ大臣責任法ハ千八百六十七年七月廿五日ノ發布ニ屬シ、學者ノ以テ責任法ノ摸範ト爲ス所ナリ。又責任法ノ最モ近時ニ出テタルハ希臘王國ニ於テ千八百七十六年十二月廿二日ノ發布ニ係ルモノ是レナリ。又學者ノ責任法ヲ論スルモノ、佛ノコンスタント、獨ノモール以來跡ヲ絕タス、サミユレーハ大臣責任ヲ懲戒處分ト看做ス論者ノ巨魁ニシテ其ノ世ニ重セラル、所ノ責任論ハ千八百六十九年ノ著述ニ屬シ、ベシヨルネルノ索遜責任論ハ千八百七十七年ニ出テ、ハウケノ墺國責任論ハ千八百八十年刊行スル所ナリ。此等ノ事實ヲ以テ之ヲ見ルモ大臣告訴ノ制ハ國法上過去ノ事ニ屬ストスル說ノ非ナルヲ知ル可シ。

是ヲ以テ之ヲ講究シ其ノ不可ナルヲ見テ而シテ後之ヲ斥クルハ宜シト雖未タ其ノ蘊底ヲ究メスシテ既ニ責任訴訟ノ制ノ取ルニ足サルナ說クハ固ヨリ遺憾ナキコト能ハス況ヤ學者ノ論スル所頗ル其ノ理アルニ似タルヲヤ。余輩ノ國法學ノ一部トシテ大臣責任ニ關スル各國ノ成法及學者ノ論說ヲ研究スル既ニ年アリ、又學生ノ爲ニ之ヲ講述スルコト數回稿積テ自ラ一小冊ヲ爲セリ、依テ試ニ之ヲ刊行シ論者ノ參考ニ供ヘントス、匆卒ノ事業謬誤必ス多シ識者ノ敎示ヲ辱シテ之ヲ改修スルコトヲ得ハ編者ノ幸福之ニ過キサルナリ。

明治廿三年十月九日

編者識

大臣責任論目次

第一部　責任ノ沿革

第一章　緒論　十一丁
第二章　英吉利大臣責任沿革　十一丁
第三章　合衆國大臣責任沿革　二十丁
第四章　佛蘭西大臣責任沿革　三十四丁
第五章　瑞典大臣責任沿革　四十一丁
第六章　諸威大臣責任沿革　五十四丁
第七章　獨乙大臣責任沿革　六十一丁
第八章　獨乙各邦大臣責任沿革　六十九丁
第九章　墺地利匈牙利大臣責任沿革　七十九丁

第二部　責任ノ學理

百十一丁
百二十八丁

目次

第一章　廣義ノ責任
第一節　元首ニ對スル責任　百二十八丁
第二節　輿論ニ對スル責任　百二十九丁
第三節　裁判ニ對スル責任　百三十四丁
第四節　議會ニ對スル責任　百三十五丁
第二章　政治上ノ責任　百三十九丁
第一節　逮捕條例　百四十三丁
第二節　信任投票　百四十五丁
第三節　課稅拒絕　百四十六丁
第四節　國法學者ノ論說　百四十九丁
第三章　法律上ノ責任　百六十丁
第一節　政事上責任ノ區別　百七十丁
第二節　法律上責任ノ法理　百七十一丁
第三節　ボルンハックノ新說　百七十九丁
第三部　大臣責任ノ訴訟法規　百八十四丁
第一章　責任訴訟ノ被告　百八十四丁
第二章　責任訴訟ノ事件　百九十一丁
第三章　責任訴訟ノ論罪及不論罪　二百七丁
第四章　責任訴訟ノ原告　二百十四丁
第五章　責任訴訟ノ中止　二百二十五丁
第六章　國務裁判所ノ組織　二百三十七丁
第七章　責任訴訟ノ審判　二百五十五丁
第一節　公開　二百五十六丁
第二節　辨護　二百五十七丁

目次

第三節　豫審　二百五十八丁
第四節　主判　二百五十九丁
第五節　證據　二百六十丁
第六節　訴訟入費　二百六十三丁
第七節　判決　二百六十五丁
第八章　責任訴訟ノ處罰　二百七十二丁
第九章　責任訴訟ノ上訴　二百八十一丁
第十章　責任訴訟ノ特赦　二百八十五丁
第十一章　責任訴訟ノ賠償處分　二百九十五丁
第四部　本邦責任制度ノ將來　二百九十九丁
第一章　責任制度ニ關ル現行法規及解釋　二百九十九丁

大臣責任論目次畢

大臣責任論

文學士　有賀長雄述

第一部　責任ノ沿革

第三章　緒論

現今ノ立憲國家ニ於テ國法上ノ大問題トモ稱スヘキ者三アリ、曰、大臣責任ノ事、曰、行政裁判ノ事ナリ。「憲法ハ成長ス」ト云ヘル格言ハ實ニ國憲法ニ關シテ眞ナルノミナラス、又世界ニ於ケル憲法一般ニ付テモ眞ナリ、即チ歐洲國法ノ沿革ヲ觀ルニ始メハ同題タリシ點ノ年ヲ追テ漸ク確定ニ至ルハ恰モ始メ渾沌タル團塊ノ漸ク凝結シテ定形ヲ得ルニ至ルカ如シ。例ヘハ司法權獨立ノ問題ノ如キハ五十年以内ニ於テ確定シ、之ニ次テ司法裁判ト行政裁判トヲ分離スルノ問題確定シ、今日ハ既ニ一般ノ原則ト成レリ、財政豫算ノ事ハ

廿年以内ニ於テ十ノ八九確定シ、大臣責任ノ問題ニ至リテハ既ニ確定セル部分ト未定ノ部分ト殆ト相半ハセリ。

今ヤ帝國憲法實施ノ時ニ至リ我邦ニ於テ大臣責任ノ事ヲ講究スルノ特ニ緊要ナル所以ノ者ハ他無シ、其ノ將來ニ於テ元首大權ノ保全ニ關スル所實ニ大ナルニ因ル。專制政治ノ行ハルヽヤ大臣ハ君主ノ使役スル所ニシテ其ノ過失ハ則チ君主ノ過失ナルカ爲ニ非曲アリテ輿論ノ責ムル所ト爲ルモ君主ハ黜陟ヲ自由ニスルヿヲ得ス、何トナレハ大臣ヲ沙汰スルハ君主ニ於テ其ノ過失ヲ自白スルニ等シケレハナリ、其ノ結果トシテ人民ノ怨ハ君主ノ一身ニ集マリテ、終ニ國家ノ轉覆ヲ來タシタルノ例証史冊ニ稀ナリトセス。是ヲ以テ今日ノ立憲國家ニ於テハ大臣ヲ以テ君主ノ一身上ノ臣從者ト爲スノ制ヲ止メ、之ヲ以テ國家ノ機關ト爲シテ其ノ爲ニ獨立ノ範圍ヲ畫シ、此ノ範圍ニ於テ責任ヲ以テ元首ヲ輔弼セシムルヿトセリ、蓋其ノ目的ハ民怨ノ直ニ元首ノ身ニ集マルヲ中途ニ於テ遮斷スルニ在リ、而シテ各國ニ於テハ此ノ目的ヲ達センカ爲ニ責任ノ條規ヲ確定シ、此ノ條規ニ從ヒ行政センヿヲ肯スル者ヲシテ大臣タルヲ得セシメ、之ヲ肯セサル者ハ隨意ニ退クノ自由アラシム、其ノ係ル所君權ニ在リ、豈ニ忽ニスヘケンヤ。

又一方ヨリ見レハ大臣責任ノ條規ハモヽル以來各憲法學者ノ說ニ依レバ立憲政治ノ關鍵ナリ、曰、立法行政ヲ分離シ立法ノ事ハ之ヲ人民代表ノ議會ニ問ヒ行政ノ事ハ行政官ナシテ之ヲ執行セシムトイヘヒ法律ノ存スル場合ハ之ニ準合スヘク之ニ違背スルコトヲ許サヽレハコソ立法會議ノ旨趣全キヲ得ルモノナリ、是ニ於テ少クヒ臣民ノ權利ト財產トニ關係アルモノハ議會ノ協贊ヲ以テ定ムルノ實ヲ見ルモノトス、即チ行政權ノ立法權ニ對スル關係ハ憲法ノ骨子ト謂フモ可ナリ、然

ルニ其ノ結局ヲ曖昧不定ノ裏ニ措クハ立憲ノ本旨ニ背ケリト。

歐洲ノ學者ニシテ責任ヲ論シタル者少ナカラス、プデウスハ千八百三十三年ニ「立憲君主國大臣責任論」ヲ著シ、次ニ近世國家學ノ大家ロベルト、モールハ千八百三十七年ニ「代議院ヲ有スル君主國ニ於ル大臣責任ノ法理政理及沿革」ヲ著シタリ、是レ責任ニ關スル著書ノ最モ完備セルモノナリ、又ビショッフハ千八百五十九年ニ獨乙大臣責任及國務裁判所論」ヲ著シ、ケールコーフハ千八百六十七年ニ「白耳義公法ニ於ケル大臣責任論」ヲ著シ、サミュレーハ千八百六十九年ニ「立憲君主國大臣責任之原理」ヲ著シテ獨乙ノ憲法上ノ關係ヲ論究シ、ハウケハ千八百八十年ニ「大臣責任篇」ヲ著シテ墺太利ノ責任ノ條規ヲ比較的ニ論シタリ、而シテ國法學及行政學ノ著述中ニ章節ヲ設ケテ之ヲ論シタル者ニ至リテハ殆ト枚擧ニ遑ナクブルンチュリ國家字典及ホルチエンドルフ法律字典ニ既ニ之レ有リ、シュルチエハ普魯西ニ關シテ之ヲ論シ、グナイストハ英國ニ就テ之ヲ論シ、ブルンチュリノ國法汎論中ニ加藤博士ハ之ヲ「ミニステル」ノ擔保ト譯シ、スタインノ「行政全書」ニ見エタル大臣責任ノ本義ト統系トハ既ニ余輩ノ國家學ニ於テ祖述シタル所ナリ。

此ニ注意スヘキハ大臣責任ノ類別ニ關シ諸家ノ用ヰル所ノ名稱ノ區々ナルヿ是レナリ。例ヘハ道德上ノ責任、國會上ノ責任、法律上ノ責任、政事上ノ責任、刑事上ノ責任、裁判上ノ責任ト云フカ如キ名稱アリテ、諸書ニ於テ之ヲ多少相異ナル意義ニ使用セリ、即チ道德上ノ責任ヲケールコーブハ輿論ニ對スル責任ノ義ニ用ヰ、他ノ論者ハ之ヲ君主ニ對スル責任ノ義ニ用ヰ、政事上ノ責任ヲブルンチュリ、ビショッフ等ハ大臣ノ政略上ノ過失ニ係ル責任ノ義ニ用ヰ、他ノ論者ハ之ヲ國會ノ質問ニ答辨スル責任ノ義ニ用ヰ、法律上ノ責任ニビショフ、ハウケハ憲法々律違犯ニ

係ル責任ノ義ニ用ヰ、他ノ論者ハ之ヲ普通法上ノ違犯ニ對スル責任ノ義ニ用ヰタリ。

然レ𪜈近時ニ至リ國法學上ノ用語ハ漸ク一致ニ至リ、現今ノ論説ニ於テハ先ツ責任ヲ廣意ノ責任ト狹意ノ責任トニ區別スルコト一般ニ行ハル。其ノ廣意ノ責任ト云フ中ニハ下ニ云フ狹意責任ノ外ニ於テ(一)元首ニ對スル責任、(二)輿論ニ對スル責任、(三)普通法上(又曰裁判上)ノ責任(四)國會ノ質問ニ對スル責任ヲ包含ス、而シテ狹意ノ(又曰特別ノ)責任ト云フ中ニハ(一)法律上ノ責任及(一)政治上ノ責任ヲ包含ス國法上ノ責任(狹義ノ責任ハ所謂國法上ノ責任ト其範圍ヲ同クス)トハ行政權ヲ以テ變更ス可カラサル憲法々律ノ條項ニ違背シタル場合ニ於テ法律上一定ノ手數ヲ經テ糺責スル場合ヲ云フ、而シテ法章ノ如何ナル條項ハ行政權ヲ以テ變更スベク、如何ナル者ハ變更ス可カラサルヤハ憲法ヲ竣テ始メテ定マルヿ大ルカ故ニ、此ノ類ヲ憲法違反トモ曰ヘリ。此ノ場合ハ眞ノ責任ノ範圍ニ屬スルコト少シモ異論ノ存セサル所ナリ。只タ之ニ關スル現今ノ問題ハ如何ナル裁判所ニ於テ之ヲ裁判スヘキヤ、誰ヲシテ原告タラシムヘキヤ、之ヲ犯罪ト見做スヘキヤ、如何ナル罪ニ處スヘキヤ等ニ在ルノミ。政事上ノ責任トハ一定ノ法章ニ違ハサルノ範圍内ニ於テ、國家ノ利益ヲ計ラスシテ責問スル場合ヲ云フ、此ノ場合ニ又二アリ。(イ)問題ト爲レル事件ニシテ若シ將來ニ屬スル件ハ、果シテ國家ノ利益ヲ害シタリヤ否ヤノ事實ハ未タ存セサルヿナレバ國會カ之ニ關シテ爲ス所ハ大臣ヲ以テ十分國家ノ利益ヲ重スル者ト信用スルヿヲ能ムルノ体裁ニ出ヲサルヲ得ス、所謂信任投票ヲ以テ大臣行政ノ精神ヲ協賛スルヤ否ヤヲ決スルノ場合是レナリ。此ノ場合ハ之ヲ眞ノ責任ノ一種ト爲シ之ニ對スル一定ノ權利ヲ國會ニ與フヘキヤ否ヤト云フヿ今尚ホ國法上ノ

一問題ナリ。是レ國會ノ新稅增稅及國債募集ヲ許否シ歲出豫算ヲ議定スルノ權利ニ大ニ關係ノ存スルモノナルコト世人モ既ニ知ル所ナリ。スタインハ之ヲ國法上ノ責任同樣ニ重キ物ニシ、ハウケハ之ヲ不可トシ各國ノ實地ニ於テモ甚タ異同アリ。(ロ)問題ト爲レル事件ニシテ既ニ過去ニ屬スルトハ其ノ實際ハ大臣ノ過失ヲ責ムルノ体裁ニ出ツヘシ、之ヲ失政(ミスリギルンナグ)ニ對スルノ責任ト云フ(ヘルド、ブルンチュリ、ビショッフ)。スタインノ全ク之ニ論及セサル者ハ之ヲ以テ興論ニ對スル責任ニ歸シ、君主ノ諭旨ヲ以テ退カシムレハ格別、國會ニ於テ之ヲ如何トモスルノ權利アル可カラストノ見解ヲ取ルニ依ルモノヽ如シ。然レトモ英國往昔ノ彈劾ハ多ク此ノ點ニ關スル「歷史ヲ讀ム者ノ知ル所ナリ。[illegible]以上略述スル所ニ依リ責任ノ事ハ決シテ單純ナル問題ニ非ス、種々ナ

元素錯綜シ、十分ノ思辨ヲ費スニ非サレハ分明ヲ致シ難キヲ知ルヘシ、是ヨリ進テ立憲國家ノ本義ニ基キテ責任ノ沿革、學理、規程ヲ講究セントス。

大臣責任ノ學理ヲ論スル前先ツ各國ニ於ケル沿革ノ事實ヲ調査スルノ必要アル所以ノ者ハ他無シ、凡ソ國法上ノ關係ハ各國ニ於テ憲法生活ノ實驗ヲ積ムノ際自然ニ發達シタルモノニシテ、決シテ一人一時ノ工夫ニ成レルモノニ非サルニ因ル。

第二章　英吉利大臣責任沿革

大臣責問ノ制モ立憲國家ノ自餘ノ制度ト同シク英吉利ノ實歴ニ於テ最モ早クヨリ其ノ形ヲ顯シタリ。即チ該國ニ於テハ昔ヨリ慣例ニ依リ最上官吏タル國王ノ參議員ヲシテ國會ニ對シ責任ヲ負ハシメタリ、エドワルド一世以後上院下院ヲ分離シ、立法、參政、司法ノ三職ヲ分割スルニ及テ國王ノ最上官吏ノ官權誤用ニ對シ告訴者ト爲ルノ職ハ下院ニ歸シ、エドワルド三世ノ五十一年(紀元千三百七十六年)ニ於テ「ロルド」ラチマル及「ロルド」ネビルヲ告訴シタルヲ以テ此ノ權ヲ實用シタルノ始トナシ、リツチャルド二世ノ時其ノ件數益增加ス(此ノ時ミセル、ド、ラ、ポール、サフフォルク侯及カンタバリー大僧正トーマス、フェッ、アランヲ彈劾シタリ。即チ議會全体ノ協議ヲ以テ國王ノ參與ヲシテ同題ヲ發シ下院ニ於テ原告ト成リテ上院之ヲ審議スルノ制ハ此ノ時ヨリ起レリ、之ヲ彈劾「インピーチメント」ト云フ、而シテ爾來之ヲ以テ最上裁判ノ例規トセリ。

チユダル統ノ代ニ至リ彈劾ノ制ハ一時不用ニ屬シ、常ニ王家ノ强制ヲ緩容スルニ傾キタル當時ノ國會ハ其ノ反對者ヲ撲滅セントスルヤ特ニ其ノ人ヲ指定シテ之ヲ斥クルノ法律ヲ議定スルノ便法ヲ採レリ。降テスチアルト統ノ代ト爲リ王家ニ就ク者ハ彼ノ天祐王權(ディバインライト)ノ論ヲ唱ヘテ人力ニ基ク議會ノ權力ヲ削カントシタルヨリ議會モ之ニ抗センカ爲ニ其ノ久シク用ヰサリシ彈劾ノ權ヲ再ビ用ウルヿト成リ、茲ニ數件ノ訴訟ヲ起シタル中ニ就テスツラフフォルド侯トカンタバリー大僧正ロウドトニ關スル者ヲ以テ最モ重大ナリトス。スツラフフォルド侯ハ王權家ノ巨魁タリシヲ以テ國會ハ之ヲ責ムルニ國ノ大法章ヲ覆サントシタルノ罪ヲ以テシ、國事犯トシテ之ヲ彈劾シタリ、是ノ時ニ於テ

民權黨ハ責問ニ關シ一新方策ヲ取レリ、即チ從來國事犯ト指定スル所ニ非ス、又法律ノ禁スル所ニ非サル行爲ニ關シ其ノ前後ノ關係ヨリ之ニ解釋ヲ下シテ國ノ法章ヲ犯スモノト爲シタル是レナリ、モールハ之ヲ評シテ搆造國事犯ト云ヘリ而シテ被告ハ立派ニ辯護シ下院ノ申立ハ立タサルノ形況ト爲リタルヨリ、民權家ハ方向ヲ一轉シ、新ニ逮捕條例（ヒル、ホフ、エティンヂル）ナルモノヲ可決シテ其ノ罪ヲ處斷シ、千六百四十四年五月十二日ヲ以テ斬罪ニ處シタリ。ロウドモ亦王權家ノ敵ヲ以テ下院ノ惡ム所ト成リ罪十四條ヲ數ヘテ國事犯ノ問罪ヲ起シ、又羅馬法王ヲ助クルノ罪ニ問ハレ、終ニ國會ノ權利ヲ侵シ、國王ニ對シ國會ヲ譏毀シタルノ旨ヲ以テ彈劾セラレ前ノ十四條ニ尙ホ十條ノ罪ヲ加ヘタリ、然レモ尙ホ彈劾ノ制ニ依リテハ之ヲ退ケ難カリシヲ以テ、又特法ヲ發シテ之ヲ斬ルニ至リタ時ニ千六百四十五年六月十日ナリ。

其ノ後ニ起リタル事件ニシテ重大ナルハ千六百七十八年「ロルド」ダンビーヲ被告トシテ起シタル者是レナリ、此ノ時始メテ下院ハ左ノ原則ヲ立ツルニ至リタリ、曰大臣ハ啻ニ君主ノ處分ヲシテ法律ニ合セシムルノ責任アルノミナラス又廉耻ヲ破ラス、公平ニ違ハス且ツ國益ヲ計ルノ義務アリト。又此ノ事件ハ國王ノ特赦權ニ關シテモ緊要ナリ。乃チ其ノ起因ハチヤールレス二世カ密ニ佛國ヨリ軍用金ヲ借リ入レントセシニ在リテダンビーハ始メ王ニ其ノ不可ナルヲ說キタルモ後ニ其ノ實行ヲ助ケタリ、是ニ於テ國會ハ糺彈ノ直ニ王ノ身ニ及フヲ避ケンカ爲ニ罪ヲダンビーニ歸シ、責ルニ王權ヲ濫用シ王幷ニ其ノ大臣ニ計ラズ、又議會ノ認知ヲ經スシテ外國ト交通シ、國ヲ賣ラントスルノ罪ヲ以テシタリ、又羅馬法王ヲ助ケ國ノ資財ヲ徒費シ王家ノ產ヲ移シテ私有トシタルノ罪ヲ問ヒタリ、而シテ王ハ固ヨリ意ダンビーヲ救ハン

トスルニ在ルヲ以テ議會ヲ解散シテ此ノ事件ヲ消滅セシメントシタレド、恰モ其ノ前ニ當リ上院ノ發議ニ依リ國務ニ關スル訴訟ハ議會ノ解散トヽモニ消滅スルコト無ク、次ノ議會ニ於テ之ヲ繼續スヘシト云フノ新原則ヲ立テタルカ故ニ王ノ計畫ハ畫餅ニ歸シ、且ツ新ニ選擧シタル議員ノ多數ハ王室ニ反對シタリ。勢ノ此ノ如クナルヲ見テ王ハ最後ノ一策トシテ新ニ召集シタル議會開會ノ前ニ當リ既ニ大璽ヲ捺シタル特赦狀ヲダンビーニ與ヘ且ツ他ノ理由ニ依テ永クダンビーガ國家一切ノ公務ニ任セラルヽノ資格ヲ解キタル旨ヲ宣告シ、從テ議會ハ此ノ事件ヲ既ニ經過シタル者ト看做シテ、更ニ重大ナル問題ニ從事センコトヲ希望シタリ、是ニ於テ下院ハ王ノ刑ノ宣告ニ先キ立テ爲セル特免ヲ以テ國務ニ關スル訴訟ノ場合ニ於テハ無効ナリトスル旨ヲ議決シ、且ツ議場ニ於テ其ノ有効ナル所以ヲ辯護スル者ハ英國庶民ノ權利ニ對スル國事犯ノ罪ヲ以テ論スヘキ事ヲ決議シタリ。

降テウィリヤム三世、アン及ゼヨルヂ一世ノ時ニ至リテモ屢彈劾ノ權ヲ行ヒタレド其ノ趣ハ稍一變シ、立法權ヲ以テ行政官ヲ監督セントスルノ目的ヲ失ヒテ、概ネ普通刑事上ヨリ糺問セントスルニ止マルコト、成レリ、其ノ故他無シウイリヤム三世ノ時ヨリ行政權ノ獨立ハ消滅シテ議會政治ノ實既ニ起リ、大臣ハ多數黨ノ意ヲ離レテ命令處分ヲ爲スコトヲ得ス議會ニ於テ多數ヲ占ムルノ黨ハ立法ノ全權ヲ有シタルカ故ニ立法ト行政トノ間ニ軋轢ヲ生スルノ道全ク塞リタルニ因ル。

此ノ時ニ大臣責任ヲ行ヒタル最モ著明ナル場合ハ印度ノ太守ワーレン、ヘスチングスニ對スル者ナリ、即チ千七百八十八年ニ之ヲ起シ千七百九十五年ヲ以テ落着シヘスチングスヲ責ムルニ其ノ印度ニ在ルニ當リ印度諸王ヲ虐制シ其ノ家族ヲ虐待シ賄賂ヲ受ケ國資ヲ浪費シ、印

度諸州ヲシテ殆ト滅亡ノ運ニ至ラシメタルノ罪ヲ以テセリ、其ノ國法史上ニ著明ナル所以ノ者ハ他無シ、事ノ未タ落着セサルニ當テ議員改選ノ期ニ至リタルヨリ改選ノ後モ訴訟事件ハ尚ホ繼續スルヤ如何ト云フヿ再ヒ問題トナリ、法律家ノ間ニ於テモ種々討論ノ末、終ニ之ヲ両院ノ議定ニ付シタルニ、彈劾ハ議會カ立法府トシテ之ヲ爲スノ點ヨリ見レハ次期マテ繼續セスト雖既ニ之ヲ審判ニ付シタル以上ハ一ノ司法事件ト成レルヲ以テ議員ノ解職ト共ニ消滅セスト云フニ決シタリ、而シテ審判數年ニ渉ルノ後全ク無罪ニ決シタリ。サレハ議會ノ立法事務ト裁判事務トノ區別ノ始メテ判然シタルハ此ノ時ニ在リトス、而シテ彈劾ノ議會ノ斷續ニ拘ラスシテ繼續スルヿモ此ニ於テ一定セリ。千八百〇五年水務大臣メルビルニ對シテ國資ヲ私用シタル事等ニ關シ十條ノ問罪ヲ起シタルモ僅少ノ多數ニ由テ無罪ニ決シタリ。サテ當時ニ用ヰタル彈劾ノ手續ニ至リテハアンソンノ記スル所左ノ如シ。

第一着ハ下院ニ於テ或ル議員ヨリ通常動議ノ手續ニ依リ彈劾セントスル欲スル一人ノ罪狀ヲ數ヘテ、大犯罪及過失ノ故ヲ以テ彈劾セントスル旨ヲ發議スルニ在リ。此ノ發議贊成ヲ得テ成立ツ片ハ發議者ニ於テ合衆王國貴族院ノ議場ニ到リ庶民院ノ名ニ於テ被告ヲ彈劾セリ。之ト同時ニ庶民院ニ於テハ委員ヲ設ケテ彈劾書ヲ起草セシメ、稿成レハ則チ一通ヲ貴族院ニ送リ、又一通ヲ被告ニ送レリ、而シテ被告ニ於テ之ヲ欲スル片ハ則チ答辨ヲ爲スヿヲ得可シ。

答辨ノ有無ニ拘ラス、豫審ノ爲ニ被告ニシテ若シ貴族ナル片ハ貴族院ヨリ令狀ヲ發シテ之ヲ禁錮セシメ、其ノ平民ナル片ハ警察官ニ於テ之ヲ拘引シテブラックロッドノ監守ニ付ス、而シテ庶民院ヨリ委員ヲ命シテ

原告タルノ事務ヲ取ラシメ、ウエストミンステルホールニ於テ豫審ヲ開ケリ。豫審ノ手續ハ總テ刑事ノ裁判ニ同シク、貴族院議員ニ於テ裁判者ト爲リ、被告貴族ナルトキハ宮内大臣(ロルドイスチエワルド)ヲ以テ議長ト爲シ其ノ平民ナルトキハ國璽大臣(ロルドチヤンセロル)又ハ庶民院議長ヲ以テ議長ト爲ス、

討議了ルトキハ彈劾ノ各條ニ付キ「有罪」又ハ「無罪」ヲ議員各名ニ年長ノ順ヲ追テ問フナリ、而シテ議員ハ順ニ起立シ、帽ヲ脫シ、右手ヲ胸邊ニ置キテ「本員ノ名譽ニ誓テ有罪又ハ無罪ト爲ス」旨ヲ答ヘサル可カラズ。終ニ至リ有罪無罪ノ答數ヲ算シテ其ノ多キニ決シ宮内大臣ヨリ之ヲ貴族院幷ニ被告ニ告知ス。(但シ議決ニ於テハ敢テ事實ノ問題ト擬律ノ問題トヲ區別スルヿ無ク、之ヲ合シテ問答スルナリ(ハウケニ依ル))

貴族院ノ多數ニ於テ有罪ト爲スモ、此ノ判決ヲ取ルト否トハ庶民院ノ決スル所ニ依ラサル可カラス、即チ貴族院ハ庶民院ノ之ヲ承諾スルヲ俟テ始メテ宣告スルヿヲ得ルナリ。

是ヲ以テ問題一決スルトキハ貴族院ヨリ使ヲ庶民院ニ遣シテ宣告ヲ爲サント欲スル旨ヲ通知シ、時ヲ定メテ彈劾委員ト被告トニ出廷ヲ命シ被告ニシテ尙ホ陳述セント欲スル所アレハ則チ陳述スルヿヲ得シム。討論既ニ盡キタリト認ムルトキハ庶民院議長ヨリ求刑シテ豫審ノ議長タリシ人ニ於テ宣告ヲ爲スナリ。

刑ヲ宣告シタルノ後之ヲ執行スルニ至リテハ國王ニ於テ左右スルノ權利アリ、即チ常刑ノ求刑者ハ國王ニシテ彈劾ノ求刑者ハ庶民院ナルニモ拘ラス、國王ノ特赦減刑ノ權ハ此ノ場合ニモ適用スヘク、且ツ果シテ之ヲ適用シタルノ例モ少ナカラス。只タ其ノ判告ノ前ニ於テ勅命ヲ以テ審判ヲ中止スルノ權(之ヲ「アボリシヨン」ノ權ト云フ)ハダンビーノ時既ニ之ヲ否決シタルノミ。又アンソンハ之ヲ論シテ曰、始メ彈劾

ノ制ヲ立ツルノ目的ハ立法權ヲ以テ行政大臣ノ處分ヲ監督セントスルニ在リシヤ疑フヿヲ得ス、且ツ幾分ハ此ノ目的ヲ達シ得タリ、千六百二十一年以來彈劾ノ總數五十四件ニシテ其ノ十九件ハ夫ノ「長議院」(ロングパヲイント)ノ始メ三年ニ起リタリ。然レ𪜈爾來種々ノ權利ヲ議會ニ占メ終ニ行政大臣ヲシテ議會多數ノ贊翼ヲ得サレハ何事ヲモ爲ス能ハサラシムルニ至リテ後ハ彈劾ノ制ヲ用ウヘキ機會モ起ラス、從テ其ノ價格減少セリト。

千八百四十八年「ロルド」バルマルストンヲ彈劾セントセシモ其ノ事成ラス、爾來久シク此ノ權ヲ使用セズトイヘ𪜈、必スシモ此ノ制ヲ捨テタルニ非ス、前述ノ如ク多數政治ノ爲ニ之ヲ使用スルノ豫地ヲ見サルナリ。今日ノ大臣ハ其ノ實國會多數黨ノ行政委員ニ外ナラス、少數黨ニシテ一旦多數ヲ得ルキハ必ス我カ黨員ヲ以テ大臣トスルヲ得ルヿ既ニ一定ノ慣例ト成レルカ故ニ其ノ大臣ノ違法ノ處分ヲ爲スハ必ス多數黨ノ爲ニスルモノナラサルヲ得ス是ヲ以テ彈劾ノ動議ヲ起ストモ庶國會ノ多數ハ必ス之ヲ否決スヘク又動議成立チテ有罪ニ決ストモ庶民院ハ必ス「解責」(インデムニチー)ノ宣告ヲ爲スヘキナリ。グナイスト此ノ次第ヲ評シ得テ妙ナリ、曰「今日英國ノ憂フ可キ所ハ多數ノ意ニ反シテ國法ヲ破ルニ在ルニ非スシテ寧ロ多數ノ意ヲ以テ之ヲ破ルニ在リ」ト。

前陳ノ事實ニ依リ英國彈劾ノ制ノ國法上ノ性質如何ヲ推スニ前ニ述ヘタル擴意ノ責任ト廣意ノ責任トヲ混同シ、普通法上ノ元素其ノ多キニ居リ、又國家ノ不利ヲ釀セシヲ責問シ、唯ニ刑法ニ背キ又ハ憲法法律ノ明文ニ違ヒタルヲ咎ムルノミニ止マラズ、是レ其ノ大陸諸國ニ於テ見ル可キ大臣責問ノ制ト異ナル所以ナリ。

又此ノ事ノ沿革ヲ以テ之ヲ推スニ英國ニ於テハ大臣責罪ノ事ヲ以テ

大陸諸國ニ於テノ如ク國法上一種別立ノ制度ト看做サズ全ク之ヲ以テ官吏ノ法律上ハ責任ノ緊要ナル一節ト看做スモノナリ(グナイスト英國行政法)。即チ大臣ハ一方ヨリ見レハ元首ノ機關ニシテ元首ニ代リ國憲ヲ犯サヽルノ責ニ任スベキモノナレド、又他ノ一方ヨリ言ヘハ行政長官ニシテ格段ナル行政事務ノ爲ニ責ニ任スヘキモノナリ、而シテ英國ニ於ケル大臣ノ責任ハ多ク此ノ第二ノ資格ニ着眼スルナリ。

英國ハ大臣責問ノ爲別ニ法章ヲ作ラズ、事ノ沿革ニ於テ自然ニ定マレル所、即チ慣例ヲ以テ標準トセリ、是レ又英ノ他國ニ異ナル所ニシテ他國ノ倣フ能ハサル所ナリ。

然レモ左ノ諸件ハ他國カ特ニ此ノ事ニ關シ法規ヲ定メントスルニ當リ往々摸範トスル所ト爲リシモノナリ。

(一)下院責問ヲ議決シ其ノ全院ニ於テ告發者ノ地位立ツコト。

(二)上院ヲ以テ大臣責罪ノ裁判所ト爲スコト、但シ英國ノ上院ハ始ヨリ種々ノ裁判權ヲ有スルナリ、即チ上院ハ一ニ最上控訴及破毀院タリ二ニ第十四世紀以後ハ貴族ノ重罪裁判所タリ三ニ大臣告訴ノ裁判所タルナリ、然レモ上院ノ裁判權ハ上院ノ固有スル所ニ非ス、全ク國王ノ參與トシテ此ノ權ヲ委任セラレ、法理上ハ所謂「議院ニ於ケル國王ノ權ヲ以テ之ヲ行フナリ。

(三)議院ノ改選解散ハ大臣責問ノ經行ニ影響ヲ及ボサヽルコト。

(四)成法違反ノ外、國事犯、賄賂及其ノ他ノ大罪大過ヲ彈劾ノ理由トスルコト

第三章　合衆國大臣責任沿革

英國ニ於ケル大臣責問ノ制度ノ前章略陳スル如ク不定ナルハ一ハ行政權獨立ノ範圍明確ナラサルニ因ルモノトス、而シテ次ニ亞米利加ニ至リテハ行政權ノ獨立全ク無ク、唯タ法律ヲ執行スルノミヲ以テ其ノ務メトスルカ故ニ、第一章ニ所謂政事上ノ責任ナル者ハ始ヨリアルヿヲ得ス、唯タ憲法法律ニ違ハサルノ責任、即チ法律上ノ責任ト民刑事上ノ責任トアルノミナルヿ自然ノ勢ナリ。即チ同國憲法第三章第四節ノ遂條ニ依レハ、議會ハ獨リ大統領ノミナラス、其ノ他ノ司法官行政官ニ至ルマテモ告訴責問スルヿヲ得ヘク、唯タ陸海軍人ヲ除クノミ、但シ軍人ハ特別ノ分限アリ紀律アルニ因ル、而シテ告訴ノ事件トスヘキ者ハ英國ニ倣ヒ憲法第二條ノ四頁ニ依リ國事犯、賄賂、及其ノ他ノ大罪大過トセリ。其ノ手續ニ至リテモ英國ト大同小異ニシテストーリイ米國憲法ニ委シク見エタリ、即チ一人動議ヲ起スヤ、委員ヲ置テ之ヲ調査セシメ、其ノ報告ヲ俟テ之ヲ議場ニ問ヒ、過半數ヲ以テ採納スルト否トヲ決ス。採納ニ決スルヤハ更ニ委員ヲ選テ元老院ニ出頭セシメ、前ノ報告ニ基キ彈劾セントスル旨ヲ申込ミ、且ツ其ノ條項ヲ全院ニ頒布シ、被告ヲシテ相應ノ時期内ニ出頭シテ答辨セシムルノ緒ニ着カンヿヲ請求ス。是ニ於テ元老院ハ領承ノ意ヲ表シ、委員ヲ設ケテ代議院ノ指揮ヲ受ケ彈劾書ヲ作ラシメ、稿成レハ之ヲ代議院ニ送付シテ認定ヲ經シム、而シテ後之ヲ全院ニ頒布シ、更ニ委員ヲ設ケテ彈劾ノ事務ヲ司ラシム。又同時ニ命令ヲ元老院警察ニ發シ日ヲ定メテ被告ヲ召喚セシム。彈劾書ノ條項ハ通常求刑書ノ如ク精密ナルヲ用ヰスト雖亦被告ヲシテ答辨ヲ要スルノ點ヲ知ラシムルニ足ルヘク、一旦答辨シテ無罪ニ決シタル上ハ他日再ヒ同事件ニ付キ問罪スルコトヲ禁スルノ効力

ヲ有スヘシ。但シ審問ノ中途ニ於テ新ニ條項ヲ添加スルモ障無シ。召喚ノ日又ハ其ノ前ニ於テ元老院ノ各議員ハ合衆國ノ憲法及法律ニ從ヒ公平ニ裁判セントスル旨ヲ誓ヒ、サテ當日ニ至レハ被告ヲシテ議場ニ出頭セシム。本人又ハ代人出頭セサル片ハ欠席裁判ヲ爲ス。辯護人ヲ用ウルハ素ヨリ許ス所ナリ。被告又ハ代人出頭スルヲ俟テ之ニ彈劾書一本ヲ交付シ、又相當ノ猶豫ヲ與ヘテ答辯書ヲ作ラシム。答辯書ヲ差出シタル片ハ之ヲ代議院ニ回送シテ答辯ニ對スルノ答辯書ヲ作リ、併セテ元老院ノ指定スル場處及期日ニ於テ其ノ果シテ眞ナルヲ証明セント欲スル旨ヲ請求セシム。期日ニ至レハ被告幷ニ代議院又ハ其ノ委員ニ於テ元老院ノ議場ニ出頭シ、両造トモニ必要アラハ証據人ヲ召喚スル等總ヘテ尋常ノ審判ニ異ナルヿ無シ。曾テ英國ノ制ニ倣ヒ下院ノ總員ヲ以テ証據人タラシメタルモ、後之ヲ不便トシ、五人ノ委員ヲ互選シテ出廷セシムルニ至レリ。對審ハ之ヲ公開シ刑ニ付キ討論スル片ハ傍聽ヲ許サズ、而シテ論辯ノ盡ルヲ竢テ更ニ會日ヲ定メ、元老院議長ヨリ各議員ニ命シ各條ニ付キ有罪無罪ヲ言ハシム。若シ何レノ一條ニ關シテモ全院ノ三分ノ二以上之ヲ有罪トセサル片ハ被告ハ議長ヨリ無罪ノ宣告ヲ受クヘク、若シ一條タリモ三分ノ二以上之ヲ有罪ト認ムレハ則チ有罪ニ決セリ、而シテ大統領ハ其ノ赦免減刑ノ權ヲ彈劾セラレタル官吏ニ及ホスノ權無シ、是レ英國ト異ナル一點ナリ。上院ノ判決ニ對シテハ上訴ヲ許サス。

告訴ノ事件ハ憲法違反ト刑事トヲ混ストイヘトモ其ノ處罰ニ關シテハ大ニ英國ト原則ヲ異ニスルモノアリ、他無シ、英國ニ於テハ犯罪ノ性質ニ依リ罰金ヨリ死刑ニ至ルマテモ之ヲ加フト雖米國ニ於テハ刑ヲ政事上ノ罰ニ止ムルヿ是レナリ、即チ現職ヲ免シ、且ツ將來ニ向テ公務

ニ就クノ分限ヲ剝奪スルノミ、其ノ餘ノ處罰ハ之ヲ尋常裁判所ニ移シテ判決セシム、是レ國法上甚タ當ヲ得タルノ制トス、何トナレハ議會ニ於テ行政官吏ヲ彈劾スルハ其ノ行政官吏トシテ國家ニ對スルノ義務ニ背キシノ故ニシテ、必ス國法上ノ範圍內ニ止マルヘク、普通法上ノ處分ニ至リテハ別ニ司法裁判所ノアル有レハナリ。

各州ノ彈劾ノ制モ略ホ同樣ナリトス。

若シ被告合衆國ノ大統領タル片ハ大判事ヲ以テ議長ト爲ス旨ヲ憲法ニ規定セリ、其ノ故ハ平生元老院ノ議長タル者ハ合衆國副統領ナリ而シテ副統領ハ大統領ヲ退ケタルキ直ニ之ニ代ルヘキ人ナレハ、其ノ身大統領タランヿヲ欲スルヨリ裁判ノ公平ヲ誤マルノ恐アレハナリ。

亞米利加ニ於テハ實際彈劾ヲ行ヒタルヿ極メテ少ナク、ストーリイニ依レハ建國以來四十九年ノ間ニ僅ニ四件ヲ見ルノミ(千七百九十九年ウィリヤム、ブラントノ件、千八百〇五年サムエル、チエースノ件、千八百〇三年ジョン、ピカリングノ件、千八百二十七年ゼームス、ペッブノ件是レナリ)其ノ中三件ハ無罪ニ決シタリ、近年ニ至リ敗北シタル南方諸州ノ處分ニ關シ大統領ジョンソンノ事件アリテ、千八百六十七年ヨリ八年ニ渉リ甚タ錯雜ナリシカ、其ノ大要ハジョンソンカ千八百六十七年十二月三日代理者ヲシテ國ノ危急ニ際シテハ自ラ責任ヲ取リテ非常ノ策ヲ施シ國ヲ救フヲ以テ義務ト認ムル旨ヲ明言セシメタルニ、反對者ハジョンソンノ此ノ明言ヲ以テ兵力ニ依リ我カ政略ヲ徹底セシメントスルノ意アルモノナリトシ、大統領ヲ大過失ノ罪ニ問ハントシタリ、而シテ有罪トスル者三十五人ニ對スル無罪トスル者十九人ノ表決ナリシヲ以テ、三分ノ二ニ一人ヲ缺キ、終ニ無罪ニ決シタリ、又千八百七十六年ニ軍務尙書ベルクナップノ件アリシモ是レ全ク賄賂ノ罪ニシテ政事

上ニ關係セサルモノナリ。

此ノ如ク米國責任ノ制ハ大体英國ニ依ルトイヘモ、其ノ英國ト異ナル要點ハ、第一ニ之ヲ憲法ノ成文ニ掲ケタルト、第二ニ大統領ニ特赦ノ權ヲ與ヘサルト、第三ニ普通法上ノ處罰ハ之ヲ責任訴訟事件ヨリ除キテ司法裁判ニ屬セシメタルト是レナリ、而シテ是レ皆英國ニ比スレハ一段ノ進歩トスヘキモノナリ。

サレド英國ト同樣ニ大臣責問ヲ以テ自餘行政官吏ノ懲罪ト同類ノ事ニ看做シ、未タ之ヲ以テ國法上獨立自全ナル一種ノ經營ト爲サヽルハ是レ仍ホ其ノ本旨ノ十分明確ニ至ラサルヲ証スルモノナリ。

第四章　佛蘭西大臣責任沿革

大臣彈劾ノ事ハ既ニ古ヨリ英國ニ於テ之レアリシモ、要スルニ大臣ノ職務上ノ懲戒タルニ過キス、從テ殊サラ他ノ官吏ノ懲戒ト區別スヘキ所以ノ者無シ、而シテ此ノ事ヲ以テ特ニ大臣ノミニ關シテ其ノ元首ト立法トニ對シ一種特別ノ地位ニ立テルヨリ起レル國法上特異ノ制作トスルニ至リシハ全ク佛國革命ノ結果ナリトス。其ノ然ル所以ノ者ハ他無シ、責任ハ行政ノ立法權外ニ獨立シナカラ猶ホ法律ニ遵ハサルノ義務アルヨリ起ルコトニシテ、立法行政ノ分立ハ佛國革命ノ後始メテ起リシ者ナレバナリ。

革命ノ事アルヤ、王權ノ衰フルト共ニ行政權ノ獨立ハ一旦全ク消滅シタルヲ以テ、當時ニ制定シタル責任ノ條規ハ尙ホ英國ニ於ケルト一般懲戒ノ意ニ出テタリ、即チ千七百九十一年ノ憲法ニ曰

「大臣ハ其ノ國民ノ安寧及憲法ニ對シテ犯セル過罪ニ對シ、幷ニ一個人ノ財産及自由ニ關スル一切ノ侵襲ニ對シ、及其ノ省ノ經費ニ當テタル金額ノ一切ノ浪費ニ對シテ責ニ任スヘシ」。

「國王（當時既ニ政權ハ民會ニ歸シ國王ハ斬首機ノ露ト消エントスルノタナリキ）ノ文章又ハ口述ノ命令ハ如何ナル場合ニ於テモ大臣ノ責任ヲ中止スルヲ得ス」。

千七百九十三年六月ノ憲法ニ於テハ只ニ大臣ノ責任ノミナラス、又人民代人（代議士）ノ責任ナル者ヲ規定シ、千七百九十五年八月ノ憲法ニハ「立法体カ其ノ部内ノ議員又ハ行政部ノ吏員ニ對シテ起セル告訴ヲ判決スル爲ニ」高等法院ナル者ヲ開キ、千七百九十九年十二月ノ憲法ニハ其ノ第六章ヲ以テ一切官吏ノ責任ヲ規定シ、特ニ其ノ第七十二條ヲ以テ大臣ノ責任ヲ規定シタリ、即チ孰レモ尋常懲戒ノ意ナリ。

初代ナポレヲンノ大權ヲ握ルヤ、統政權ハ突然全力ヲ占メテ立法權ハ只タ其ノ形ノミヲ存シタリ、是ニ於テ責任ノ規定ハ解消シ、千八百〇二年ノ憲法ニ於テハ殆ト憲法上ヨリ特ニ責任ト認ムヘキ者ヲ存セス、千八百〇四年五月ノ憲法ニ於テハ帝國高等法院ナル者ヲ設ケテ「行政ノ一部ヲ負擔スル大臣並ニ參事院議官ノ職務上ノ過失」ヲ裁判スルノ所トシタリ。

降テ王政復古ノ時ト爲リ始メテ立憲政体ヲ立テタルヨリ、千八百十四年ノ憲章（シャルト）ニ掲ケタル所ハ即チ今日ノ立憲責任ノ制ノ紀原ヲ爲セリ、唯タ其ノ目的ニ於テ稍今日ト異ナル所アルノミ。今日ハ政府カ獨立權ヲ以テ發スル命令ノ憲法及法律ニ違ハサルヲ保スルヲ以テ責任ノ主眼トシ、其ノ由テ起ル所ハ國家ノ事悉ク皆法律ヲ以テ規定スルノ難キヨリ政府ニ獨立ノ範圍ヲ與フルノ必要ヲ感スルニ在リトス、然ルニ佛國ノ當時ニ於テハ未タ此ノ如キ思想アラズ、只タ一方ニ於テハ王政ヲ

恢復セント欲スレト他ノ一方ニ於テハ民權ノ再ヒ破レンヿヲ恐ル、ヨリ、民權ヲ主トスル國家ニ於テ王政ヲシテ立ツ所有ラシメンカ爲ニハ責任ヲ大臣ニ止メ、國王ヲシテ無責任ノ地位ニ在ラシメサル可カラスト云フ事其ノ重ナル目的ト爲リタリ。責任ノ理由此ニ在リトスルノ論ハ當時立憲王政ヲ主張シテ功アリシベンジャミン、コンスタントノ「憲法論」ニ見エタリ。サテ十四年憲章ノ本文ニ曰、

「代議院ハ大臣ヲ告訴シテ之ヲ元老院ニ召喚スルノ權利アリ、而シテ之ヲ裁判スルノ權利ハ特ニ元老院ノ有スル所トス。大臣ハ「ツライソン」(國事犯)若クハ「コンクシヨン」(濫權罪)ニ向テノ外告訴セラル、ヿ無シ、此ノ二罪ノ性質及訴訟ノ手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム」ト

斯クテ千八百十五年四月ノ追加ヲ以テ大臣ヲシテ國民ノ康安及名譽ヲ害スルノ責ニ任セシメ、又略ホ訴訟ノ法規ヲ定メタリ。

然レトモ如何ナル罪過ヲ以テ「ツライソン」及「コンクシヨン」トスルヤニ至リテハ、種々草案ヲ反覆シタルニモ拘ラズ久シク一決セス、其ノ一決セサルニモ拘ラスシャール十世ノ諸大臣ハ此ノ條ニ依テ彈劾セラレ一人ハ死刑ニ處セラレ三人ハ終身禁獄ニ處セラレタリ、是レ佛人ニ非スンバ能セサル所ナリ。

千八百三十年七月シャールヲ放逐シルイ、フィリップヲ選立スルノ後ニ於テ制定シタル憲法ニモ大臣責任ノ事ヲ載セ、其ノ文字モ前ニ異ナラス、更ニ他ノ法律ヲ以テ罪狀ヲ確定センヿヲ約シタリ、然レトモ千八百三十二年及千八百三十四年ノ兩度ニ於テ提出シタル法案ハ終ニ公布ニ至ラスシテ止ミタリ。

此等ノ憲法ニ於テ大臣告訴ノ要點ヲ「ツライソン」ト「コンクシヨン」ノ二ト定メタルノ後ニ於テ又政府ノ法律案、議會ノ報告案等ニ於テ更ニ「プ

レバリカシヨン」ナル一罪ヲ加ヘ、凡ソ大臣ノ行爲ニシテ責問スヘキ者ハ日用及法律ノ語ニ於テ數多アルニモ拘ラス、總ヘテ此ノ三語ヲ以テ之ヲ網羅セシメタリ。

「ツライソン」國事犯ナル語ハ大臣カ國王、王后、太子、國家內外ノ安寧、憲法及憲法ニ基ク權利、王統、及國王又ハ兩院ノ憲法上ノ權力ヲ危キニ置クノ罪ヲ指シ、「コンクシヨン」濫權罪ナル語ハ大臣カ法律ニ違ヒテ金圓ヲ徵收シ國家ノ資財ヲ直接又ハ間接ニ竊取シ或ハ其ノ職權ヲ以テ私利ヲ營ミタル一切ノ罪ヲ指シ、「プレバリカシヨン」失政犯ハ以上ノ場合ノ外ニ於テ故意ヲ以テ法律ニ違背シ又ハ其ノ執行ヲ怠タリ、或ハ委任セラレタル權力ヲ誤用シ以テ國家ノ不利ヲ招キタル場合ヲ指スモノトシタリ。

降テ千八百四十八年ニ至リルイ、フリィツプヲ追放シ、ルイ、ナポレヲンヲ推シテ大統領トスルニ及テ十一月四日ノ憲法ニ於テ始メテ大臣裁判ノ事ヲ精密ニ規定シタリ。即チ高等裁判所ナル者ヲ設ケテ國民會議ヨリ大統領及諸大臣ニ對シテ起セル訴訟ヲ裁判スルノ處ト爲シ、大統領幷ニ各大臣ヲシテ其ノ政事上一切ノ行爲ニ對シテ責ニ任セシメタリ。又規定シテ曰、「凡ソ國民會議カ其ノ權利ヲ行フヲ障止セントスル大統領ノ各般ノ處分、例ヘハ同會ヲ解散スル事ノ如キハ、以テ國事犯ナリト爲シ、此ノ處分アルニ於テハ大統領ハ自然其ノ職權ヲ失ヒテ其ノ權力ハ國民會議ニ歸スヘク、且ツ公民ノ大統領ニ對スル順從ノ義務モ同時ニ消散スルモノトシタリ。國民會議ヲ解散シテ其ノ權利ヲ行フ能ハサルニ至ラシメタルトキニ限リ、裁判官ニ於テ他ノ命令ヲ竢タス、自ラ集會シテ陪審(國民會議員)ヲ召喚スルノ權アルモノトシ、其ノ他ノ場合ニ於テハ國民會議ノ命令ニ依リ其ノ指定スル所ノ市府ニ於テ開庭

スルモノト定メタリ、而シテ其ノ人員ハ破棄裁判所ノ判事中ヨリ五人（但シ無記名秘密投票ヲ以テ互選ス）及州會議員中ヨリ互選シタル者三十六名ノ陪審ヲ以テ組織シ、前ノ五人中ヨリ一人ノ議長ヲ互選シ、判決ニハ陪審ノ一分ノ二以上ノ多數ヲ必要トシタリ。是レ即チ獨乙諸國ニ於テ模範セル國務裁判所ノ制ノ始ナルヿ後ニ至リ明瞭ナルヘシ。

千八百五十一年十二月廿日ルイ、ナポレオンカ人民ニ委托セラレタルノ權力ヲ以テ制定シタル憲法第五條ニ曰、

「共和政府ノ大統領ハ佛國人民ニ對シテ責ニ任ス、而シテ彼レ常ニ人民ニ控訴スルノ權ヲ有ス」ト

而シテ其ノ第十三條ニ於テ大臣ノ從屬ヲ規定シテ曰、「大臣ハ國ノ元首即チ大統領ヲ云フノ外、何人ニモ從屬セス」ト、即チ責任ハ大統領一人之ニ當リ、各大臣ノ人民ニ對スル責任ハ之ヲ廢シタルモノナリ。

是ノ規程ハルイ、ナポレオンノ帝位ニ登ルニ及テモ尚ホ之ヲ保維シ、千八百五十三年一月十四日ノ詔ヲ以テ只タ佛帝ノミ佛國人民ニ對シ責任アリト明言シタリ、是レ立憲政体ノ本義ニ背キ大臣責任ノ由來ニ反スルノ詔トシテブルンチゴリヘルド等ノ國法學者ノ大ニ非難スル所ノモノナリ。

佛國現時ノ責任制度ハ千八百七十五年二月廿五日ト同年七月十五日ト両方ノ憲法ニ於テ之ヲ見ルヘシ。前者ノ第六條第一項ニハ曰、

「大臣ハ國會ニ對シ政府ノ一般政略ニ付キテハ連帶シテ責任ヲ有シ、各己ノ處置ニ就キテハ獨立シテ責任ヲ有ス」ト。

又後ノ憲法ノ第十二條ニハ曰

「共和政府ノ大統領ニ對シテハ代議士院ヨリ告訴ヲ起シ、元老院ニ於テ之ヲ裁判スヘシ。各大臣ハ其ノ職權上ニ於テ犯シタル罪ニ對シ

代議士院ヨリ告訴ヲ受ケ元老院ニ於テ裁判セラルヘシ。告訴、審問及判決ノ手續ハ別法ノ定ムル所ニ依ル」ト。

蓋二月ノ憲法ハ所謂政事上ノ責任ヲ規定シ、七月ノ憲法ハ所謂法律上ノ責任ヲ規定スルモノナリ。第十二條ニ所謂別法ハ未タ存セスト雖亦獨乙ニ於テノ如ク存スヘキ法律ノ存セサルヲ以テ其ノ事ノ實行シ難キノ理由ト爲サズ、却テ別法ノ未タ存セサル間ハ告訴、審判ノ手續者告發者及審判者ノ自由ニ定ムルヿヲ得ル所ナリトセリ(ルボン佛國々法論ニ依ル)。サレバ千八百七十九年ニ於テ此ノ條ニ依リ告訴ヲ起サントシタル一例ヲ言ハンニ、同年五月ノ會期ニ際シ代議士院ニ於テ內閣カ千八百七十七年ノ五月十六日及十一月廿三日ニ於テシタル處分ハ右第十二條ニ觸レ且ツ刑法第百〇五條第百十一條ニ觸ルヽ者トスル調査委員ノ報告書ヲ發表シタリ。是ニ於テ更ニ委員ヲ置キ內閣ニ對シ告訴ヲ起シ三人ノ議員ヲ選テ元老院ニ出廷セシムルノ動議ヲ起シタレド、委員ノ一人ナルブリソン氏ニ於テ証據ノ不十分ナルヲ恐ルヽ旨ヲ述ヘタルヨリ千八百七十九年三月十三日ノ議事ニ於テ百五十九人ニ對スル三百十七人ノ多數ヲ以テ此ノ動議ヲ否決シタリ。是ニ於テ更ニコラモー氏ナル議員ヨリ動議ヲ起シテ曰、虛弱ナル敵ヲ相手トシテ告訴ニ及ハンヨリハ寧ロ大臣ノ罪狀審判ノ事ヲ國民ニ委スルニ如カス、依テ內務大臣ヲシテ其ノ詳細ヲ國中ノ市町村ニ公示セシムヘシト主張シタルニ百五十四人ニ對スル二百四十人ノ多數ヲ以テ此ノ動議行ハレタリ。

是ニ於テ當時ノ內閣ハ巧ニ事ヲ處シテ此ノ事件ヲ修結セシムルヿヲ得タリ、即チ他無シ、告訴ヲ受ケタル前ノ大臣ニ於テ議會カ訴訟ヲ起スハ其ノ權內ナレト此ノ訴訟ノ事件ニ關スル一院ノ判定ヲ直接又ハ間

接ニ天下ニ公布シタルハ越權ナリ、故ニ答辨ノ義務無シトノ義ヲ申立テタルニ因リ、代議士院ハ又如何トモスルノ道無キニ至リタル是レナリ。

之ヲ要スルニ佛國現時ノ制ハ其ノ前ニ獨乙、墺太利等ニ於テ規定シタル所ニ影響セラレタル所アルヤモ知ル可カラス、而シテ特ニ佛國自發ノ制ト看做ス可キモノハ往時ノ諸憲法中ニ在リトス、今其ノ重ナルモノヲ擧クレハ左ノ如シ。

(一)大臣責任ヲ以テ官吏懲戒ノ一種トスルヿヲ止メ、之ヲ以テ元首ヲ無責任ノ地位ニ宜ク所以ノ特別ノ制作トスルニ至リタルヿハ是レ今日ノ國法上ニ於テ確定ノ一點ナリ、而シテ其ノ端緒ハ佛國ニ在リ。

(二)大臣責任ノ爲(千八百十四年ノ憲法ヲ以テ)別ニ其ノ事件、訴訟手續及罰則ヲ定ムルノ法律ヲ制定シタルコトハ是レ亦佛國ノ夙ニ實行セシ所ニシテ爾來新ニ責任ノ制ヲ設ケントスル諸國ノ往々摸倣スル所ナリ。

(三)政略ノ當否ニ對スル者即チ政事上ノ責任ト、公務上ニ於テ法章ニ觸レタル者、即チ法律上ノ責任トヲ區別スルニ至リタルモ其ノ發端ハ佛國ニ在ルニ似タリ。

第五章　瑞典大臣責任沿革

瑞典ニ於ケル責任ノ制ノ歴史上著明ナル所以ノ者ハ責任事件ノ爲ニ別ニ裁判所ヲ置クコトヲ佛蘭西ニ先キ立チ實行シタルニ因ル。

千七百年代ノ初ニゴエルツナル國王ノ顧問アリ、始メホルスタイン公使ニシテ、後瑞典ニ歸化セサルマヽチヤーレス十二世ノ顧問トナリ、大藏大臣ニ進ミ、王ノ爲ニ軍費ヲ備ヘントシテ種々人民ニ不利ナル策ヲ献シタルヨリ、王死スルト間モ無ク糺彈ノ事迄リ、當初ハ宮中裁判所ニ訴フルノ計畫ナリシモ、其ノ緩漫ヲ好マサル爲、終ニ特別委員ヲ設クコトヲ決シ、千七百十九年一月十五日ノ告訴狀ヲ以テ其ノ罪狀ヲ數ヘタル中ニ國王ノ官吏ヲシテ人民ニ對シ信ヲ失ハシメ、國王ニ貨幣ノ性合ヲ惡化スルコトヲ勸メ、國王ノ明言ニ違ヒ質入中ナル王室財産ヲ減少シ、鐵商、麥酒釀造、火酒釀造ヨリ麵麭製造ニ至ルマテノ專賣ヲ勸メ、二分ノ所得稅ヲ一割六分ニ騰シタル等ノ事ヲ以テシタリ、而シテゴエルツハ國王ノ顧問トシテ唯タ其ノ國王ノ爲ニ利トスル所ヲ述ヘタルモノナレハ犯罪ニ非スト辯論シ、此ノ辯論ハ法律上ニ於テハ無罪ト決スルニ足ルモノナリシモ、二月十一日ヲ以テ毫モ成法ニ依ル所ナクシテ死罪ヲ宣告シ、執行延引ノ請願ヲ聽サス、同月廿日ヲ以テ斧斷車裂ノ慘刑ニ處シタリ、後人之ヲ評シテ政事上ノ謀殺ト云フ。

降テ千八百〇九年六月六日ノ憲法ニ於テ大臣責任ノ訴訟ヲ憲法ノ明文ニ揭ケ、其ノ裁判ノ前日ノ如キ專斷ナキヲ保センカ爲別ニ裁判所ヲ組織スルニ至リタルハ後ニ各國ニ於テ國務裁判所ト稱スルモノヽ始ナリ。次ニ千八百十年二月十日ヲ以テ全篇十三ケ條ノ責任法ヲ制定シタリ、是レ大臣責任ノ爲ニ別法ヲ設ケタル場合ノ最モ古キモノニシテ尙ホ佛ノ此ノ方向ヲ取リタルヨリ四年前ナリキ。

蓋シ瑞典ノ成法ニ依ル片ハ國王ノ參議ハ只タ良心ヲ以テ國家ノ大法ニ準シテ國王ニ議ヲ建スベキノミ自ラ政治スルノ權利ナキモノトス、而シテ其ノ責問ヲ被ルヘキ行爲ハ左ノ諸點ニ在リトシタリ、曰國王ノ不在若クハ故障ノ時ニ當テ强力ヲ用テ國憲ヲ轉覆セシメント企テタルコト(憲法第三十九條ヨリ第四十三條ニ至ル)議會ノ召集ヲ停止シ又ハ延引シタルコト、人民ニ自ラ稅法ヲ議定スルノ權利ヲ行ハシメタルコト、議會ヲ召集セサル前ニ於テ封鍼シタル國庫ノ金圓ヲ使用シタルコト、印行ノ自由ニ關スル法律ヲ犯シタルコト、外務大臣ニ於テ宣戰講和盟約ニ關スル重要ナル件ヲ秘密ニシタルコト是レナリ(二月十日法律第一條ヨリ第三條マテ及第七條)。第一ニ擧ケタル犯罪(及國事犯幷ニ外務大臣事件ヲ祕密ニスルノ罪)ニ對シテハ名譽財產ヲ沒收シテ死刑ニ處シ、其ノ他ニ對シテハ免職ノ上永ク公務ニ就クノ能力ヲ奪フヲ以テ罰トス。若シ國務參議(總理大臣又ハ參議ニシテ責任條例ニ枚擧セサル罪ヲ犯シタル片即チ所謂政事上ノ責任ニ關シ糺問セントスル片ハ國政法第百七條ニ依リ國王ニ建議スルヿヲ得、即チ曰、

「憲法委員(議會中ニ設ク)ニ於テ參議ノ一人又ハ數人カ其ノ建言立案ノ際ニ國家一般ノ利益ヲ主眼トセス、或ハ公平、熱心、才能ヲ以テ其ノ職ヲ盡サヽルヿヲ認ムル片ハ同委員ニ於テ其ノ旨ヲ議會ニ通知スヘシ、是ニ於テ議會ハ國家ノ爲ニ必要ト見ル片ハ件ノ參議ノ職ヲ免スヘキ旨ヲ書面ヲ以テ國王ニ建議スルコトヲ得。議會ノ全會又ハ他ノ委員ニ於テモ同件ニ關スル動議ヲ起スヿヲ得ヘシト雖、憲法委員ノ意見ヲ聞カサル前ニ之ヲ決議スルヿヲ得ス」ト。

責問ノ手續ハ左ノ如シ。國政法第百〇五條ニ依リ內閣ニ於テ政府一切ノ處分ニ關スル記錄ヲ備ヘテ議會ノ憲法委員ヲシテ何時ニテモ之

ヲ檢査スルノ權利アラシム、而シテ同第百〇六條ニ依リ委員ニ於テ或ル參議ノ處分ノ違法トスヘキ者ヲ其ノ間ニ發見スルトキハ議會ノ司法委員ニ命シテ之ヲ國務裁判所ニ告訴セシム(是ノ場合ニ於テハ同裁判所ニ出席スヘキ參議四名ニ代ルニ年長評定官四名ヲ以テス)而シテ判決ハ普通國法又ハ憲法ノ箇條ニ依テ之ヲ爲スナリ。內閣ノ記錄ニシテ次年ノ議會ノ告訴スル所ト爲ラサリシ者ハ其ノ後ニ於テ告訴ノ理由ト爲スヿヲ得サラシム。

國務裁判所ハ之ヲ王國裁判所ト稱シ國政法第百〇三條ニ依リ左ノ如ク組織ス。主府ストックホルム上等裁判所々長ニ於テ判事長ト成リ、自餘ノ各裁判所長、年長參議四名(參議審判ノトキハ上文ノ別法ニ依ル)主府ノ鎭臺指令長官、主府最近海軍部ノ指令長官、年長評定官四名、及各裁判所年長評定官一名ヲ判事トス。判事ノ數ハ各事件ニ付少ナクモ十二名ニ充テンコトヲ要ス。

又同法第百〇九條ニ依リ上下院ハ各々議員十二名ヲ互選シ以テ審判部ヲ組織セシメ最高裁判所(即チ王國裁判所)ノ役員ハ果シテ十分ニ其ノ職ヲ盡シタルヤ否ヲ檢査シ其ノ中ノ誰某々々ハ確乎タル過失ノ指定スヘキ者無キモ一般ニ信用シ難キノ故ヲ以テ免職スヘシト檢定スルトキハ國王ニ之ヲ指名ス、是ニ於テ國王ハ此ノ建議ヲ容シテ指名セラレタル者ノ職ヲ免セザルヲ得ズ。

王國裁判所ノ宣告ハ終結ニシテ控訴ノ處無ク、國王ハ特赦ノ權利アリト雖本人カ再ヒ公務ニ就ク能ハサルノ禁ヲ解クヲ得ス。(瑞典責任ノ制ハベシヨルネルノ責任論ニ最モ委シク見ヘタリ上文ノ記事即チ之ニ依ル)

政府ニ於テ參議(大臣)ノ言論ヲ筆記シ之ヲ以テ責問ノ証物トスルノ制

ハ瑞典諸威ノ間ニ始メテ行フ所ナルモ他國ノ之ヲ摸範トスルモノ無シ、蓋立法行政ノ關係ニ於テ立法部ノ者ヲシテ行政部ノ內密ヲ知ラシムルハ不便多キニ因ルコトヽス、故ニ此ノ事ハ一般責任制度ノ一節ト成ラスシテ止メリ。

第六章　諸威大臣責任沿革

諸威ニ於ケル責任制度ノ著明ナル所以ノ者ハ其ノ始メテ責問スヘキ事項ヲ細密ニ撰擧シタルニ依ル。即チ千八百十四年十一月四日ノ憲法ニ於テ國王ハ處罰幷ニ訴訟ヲ受クルコト無キモノトシ、其ノ國務參議ヲシテ之ニ代テ責ニ任セシメタリ、而シテ國務參議一切ノ處分ハ必ス此ノ記錄ヲ保存スヘキモノトシタリ。國務參議ノ各員ハ會議ニ於テ公然其ノ意見ヲ陳辯シ、國王ヲシテ臨聽ノ義務アラシム。其ノ一人ニシテ若シ國王ノ裁決ノ國体ニ戻リ法律ニ違背スルヲ見、若クハ國家ニ不利ヲ來サントスルヲ知ルトキハ之ニ異議ヲ唱ヘテ其ノ旨ヲ記錄ニ載セシム、而シテ異議ヲ唱ヘサル參議ハ國王ト同意シタル者ト見做シテ其ノ事件ニ關シ責ニ任セシメ、民會ハ王國裁判所ニ向テ訴訟ヲ起スヘシ。

千八百廿八年ニ至リ七月七日ノ「參議及最上裁判所職員ノ公務上ノ過失及議會及裁判所職員ノ職務上ノ過失ニ係ル法律」ナルモノヲ以テ國務參議ノ犯スヿアラントスル一切ノ罪狀ヲ數ヘ、且之ニ對スル處分ヲ精細ニ規定シタリ。

同法第一條ニ曰「參議ノ一員ニシテ根本法及其ノ他ノ法律ニ違反シ、其ノ公務上ノ義務ニ戻リテ發議、勸告、又ハ表決ヲ以テ左ノ諸項ニ觸レタル者、其ノ罪重大ニシテ國事犯ヲ以テ問フニ非サルトキハ其ノ職ヲ免シ、仍ホ重キモノハ永ク職務ニ就クコトヲ得サラシム。

(一)新敎ヲ以テ國敎トスル憲法第二條ノ變更

(二)本國ノ自由、獨立、國境不可分、若ハ獨立ニ反對スル計畫

(三)外國トノ關係ニ就キ內國又ハ國王ノ權利ヲ侵襲スル事

(四)民會ノ承認ヲ必要トス事件ニ就キ其ノ承認ヲ經スシテ處置スル事

(五)民會ノ決議ニ歸スルニ根本法ニ依リ擔保シタルノ効力ヲ以テセサル事

(六)民會ヨリ國王ノ裁可ヲ奏請スル爲ニ出提シタル法律ノ決議案ヲ國王ニ致サヽル事

(七)民會カ閲覽ヲ請求スルノ權利アル筆記、公文、說明ノ閲覽ヲ拒否スル事

(八)平時ニ於ケル軍隊ノ布置、召集、艦隊ノ定泊津港、水夫ヲ軍艦ニ充ツル事、及後備軍及線隊ニ屬セサル他ノ軍隊ノ使用ニ關スル根本法第廿五條ノ規程ヲ犯ス事

(九)根本法第廿六條ニ規定シタル國ノ狀態ニ關スル意見幷ニ報告、說明ヲ戒規ニ從ヒ提出セサル事

(十)根本法ニ背キ內國ノ人員ニ對シ兵力ヲ使用スル事

第二條ニ曰「參議ノ一員ニシテ根本法及其ノ他ノ法律ニ違反シ其ノ公務上ノ義務ニ戻リテ發議、勸告又ハ表決ヲ以テ左ノ諸項ニ觸レタル者ハ五百金以上二千金以下ノ罰金ニ處シ其ノ重キモノハ第一條ノ罰ニ處スヘシ。

(一)國庫ノ收入又ハ國有財產及專賣權ヲ不當ニ支出シ及管理スル事

(二)國防又ハ其ノ他ノ公共事件ニ指定シタル資財ヲ必要アルニモ拘ラス其ノ目的ノ爲ニ使用セサル事

(三)法律命令ノ起草、公布、執行ニ付キ必要ノ處分ヲ爲サヽル事

(四)各人ノ國王又ハ民會又ハ官廳ニ請願スルノ權利ヲ遮止スル事

(五)合法ノ出板、特ニ印刷自由ノ使用ヲ妨止スル事

(六)法律ノ規定スル所ニ違ヒテ或ル一人ニ國家ノ公務ヲ負ハシムル事

(七)根本法ニ定メタル制限ノ外ニ於テ罪人ヲ赦免シ及其ノ第廿條ニヨリ國王ノ赦免ヲ請願スルト服罪スルトノ間ヲ撰擇スルノ權ヲ否シテ罪人ニ與ヘサル事

(八)不當ノ刑事告訴ニ依テ以テ或ル一人カ選擧權ヲ使行シ若ハ民會ノ議員ト成ルノ權ヲ障止スル事

(九)根本法第十五條及第三十八條ニ規程シタル協會ニ於テ內國政府ノ意見ヲ聽クヲ怠ル事

(十)國家ノ歲計報告ヲ根本法第二十五條ノ規程ニ從ヒ檢査ノ爲ニ提出セサル事

(十一)根本法第十三條ノ規程ニ依テ爲ス所ノ訓令ニ於テ根本法ニ違反スル事

第三條ニ曰「法律ニ定メタル場合ノ外ニ於テ又ハ法律ニ定メタル手續ニ違ヒ公務、自由、財産、又ハ收得ノ本源ヲ奪ハレ若ハ他處又ハ他國ニ逐放セラレタル者アル片、參議ノ一員ニシテ其ノ公務上ノ義務ヲ怠リ、若クハ其ノ發議、勸告、表決ニ依リ此ノ事ヲ起シ、又ハ其ノ起ルヲ助ケタル者ハ第二條ノ罰ヲ受クヘシ。此ノ次第ニ因リ生命ヲ失フニ至リタル旨アル片ハ關係ノ參議モ亦其ノ生命ヲ失フヘシ」。

第四條ニ曰「參議ノ一員ニシテ民會ノ召集ニ就キ根本法第三十九條及第四十一條及王國條例第六條ニ依リ負フ所ノ義務ヲ怠リタル者其ノ罪國事犯ニ該當セサル場合ハ其ノ職ヲ免セラレ若ハ永ク官職ニ就ク ノ資格ヲ奪ハルヘシ」。

第五條ニ曰「參議ノ一員故意ヲ以テ公文ヲ秘隱ニシ、又ハ其ノ擔任ノ事件ニ就キ說明ヲ爲サス、又ハ態サト詐僞ノ事實ヲ示シ、又ハ詐僞ノ公文ヲ示シ、以テ或ル一人ノ權利ヲ侵シ、又ハ公務若ハ公務ヲ監督スルノ權ヲ奪ヒ又ハ不當ニ公務ヲ負ハシメ、又ハ國家ノ不利ヲ釀シタル片ハ法律ニ依リ詐僞ニ坐シテ更ニ重刑ニ處セラレサル場合ニ於テハ其ノ公務ヲ奪ハレ又ハ永ク公務ニ就クノ資格ヲ失ハシメラルヘシ。

第六條ニ曰「參議ノ一員ニシテ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ明言シタル場合ニ於テ根本法又ハ王國條例ニ規定シタル公務上ノ義務ヲ怠リ、又ハ之ニ背キ爲ニ法律ニ依リ更ニ重刑ニ坐セサル場合ニ於テハ五百金以上二千金以下ノ罰金ニ處シ事情ニヨリ其ノ職ヲ免セラルヘシ」。

依レ之觀レ是諸威ニ於テハ法律ノ成條ニ於テ大臣ヲ責問スヘキ場合ヲ遂一枚擧セシコトヲ勉メタルモノナリ、而シテ立憲政治ノ關係ハ常ニ活動シテ變化窮リナキモノナレバ永久不動ノ法律ヲ以テ責問ノ場合ヲ確定スルハ難ク必ス時運ト俱ニ多少ノ異動ヲ要ストイヘ𪜈、是ノ時ヨ

リ永久ニ枚舉シ得ヘキモノハ之ヲ枚舉スル事一ノ慣例ト爲レリ。

第七章　獨乙大臣責任沿革

君王ノ顧問及臣家ヲ憲法違反ノ爲ニ責問スルハ獨乙往時ノ國法ニ於テモ既ニ有リタルコトナリ、然レモ君王ノ命令ヲ以テ解責セントスル片ハ即チ國法ハ之ヲ如何トモスル能ハサリキ。然レモ上代ニ於テハ抵抗ノ權下ニ在リテ君主ノ解責ニ對スル條項ノ欠典ヲ補ヒ又其ノ後ニ至リテハ帝國裁判所ニ於テ各邦ノ憲法ヲ保護スルコト猶ホ其ノ各人ノ既特權ヲ保護スル如クナリキ。立憲責任ノ制ト密接關係アル君主無責任ノ原則ノ如キモ當時ニ在テ十分ニ行ハレズ、帝國ノ元首ハ各邦ノ元首ニ對スル告訴ヲ裁決スルノ權アリテ、自ラ責問ヲ受クルコトモ免レサリキ。

又各邦ノ歷史ニ就テ之ヲ見ルニ、往時ヨリ最上官吏ノ責任ニ就キ寥々規程ヲ存シタルモノ無キニ非ズ、例ヘハ普魯西千五百六十六年一月ノ

發令ニ「此ノ事總理部ヨリ發スルヲ以テ、若シ之カ爲ニ國ニ損害不利ヲ來タスコトアラハ總理ハ其ノ責ニ任スヘシ」ト云ヘルノ類ナリ。又願問ニ於テ君王ノ發意命令ニ從ヒ處分シタル場合ニ在テスラモ之ヲ責問シ處罰シタル例モ無キニ非ス、例ヘハ索遜ニ於テ總理クレルヲ彈劾シ瓦典堡ニ於テ千七百三十七年二月十二日ヲ以テ先主ノ財政ノ爲ニ無道ヲ行ヒタルシユースヲ斷リタルノ類是レナリ。

ツァハリヤハ此等ノ事實ヲ引テ以テ獨乙ニ於ケル大臣責任ノ制ノ本源ナリトシタリ、然レモヘルドハ之ニ反對シ、大臣責任ハ近時ニ於ケル立憲政体ノ產物ナリト言ヘリ。ハウケ、ホルチェンドルフハ之ヲ折衷シテ曰、現今ノ責任制度ハ立憲ノ時ト俱ニ起レルモノナレド恰モ專制時ノ慣例ニ於テ其ノ端緒ヲ見ルモノナリト言ヘリ。

獨乙各邦現在ノ憲法ハ始メ維納會議ニ於テ議決シタル所ニ基クモノニシテ各邦ヨリ提出シタル草案ニ於テ請願ヲ以テ最上官吏ヲ責問スルヲ以テ民會ノ權利トスルコトヲ認定シタルハ是レ立憲政体ニ於ケル責任制度ノ發端ナリ。是ニ於テ各邦ノ政府ハ其ノ維納會議ノ決議ニ基キ制定スル所ノ根本法ニ於テ最上官吏ノ責任ニ關スル條項ヲ立テ更ニ特別法ヲ以テ之ヲ實施スルノ規矩ヲ備ヘントシタリ、即チ諸邦ニ於テ千八百四十三年前ノ制定ニ係ル責任法ハ此ノ次第ニ出ツルモノナリ。同年ニ至リ民權的運動ノ盛ニ起ルニ會シ、現行ノ法制ヲ改正シ、又ハ新法ヲ起草スルノ擧ハ各邦ニ起リタリ。此等ノ改正及新法ハ皆多少當時ニ盛ナリシ、民權的ノ形勢ヲ帶ヒ、爾來形勢ノ變スルト俱ニ多少ノ修正ヲ加ヘタリ、即チ千八百四十八年國民議會ニ於テ帝國大臣ノ責任ニ關シ草案ヲ提出シ別ニ委員ヲ置テ報告セシメタル者ハ即チ近時制定ノ責任法ノ模範ト成リタルモノナレハ、茲ニ其ノ大要ヲ擧ケ

ントス。

凡ソ帝國主政ノ發令ハ其ノ大臣ノ副署ヲ竢テ効力ヲ有シ、其ノ事件ノ當該大臣ニ於テ副署ヲ爲スヘシ。

凡ソ大臣ハ其ノ副署スル發令ノ事項ニ對シ責ニ任ス。

凡ソ大臣ノ處置又ハ責守ヲ怠リタルモノヽ爲ニ獨乙聯邦ノ安全幸福ヲ害スルニ至リタル場合ニ於テハ之ニ對シ訴訟ヲ起スコトヲ得。

前規ニ依リ訟訴ヲ起シ得可キ場合ヲ擧セハ左ノ如シ

(一)大臣謀反若クハ國事犯ヲ犯ストキ。

(二)獨乙ノ幸福安全ニ害アルコトヲ知リ若クハ正當ノ注意ヲ施セハ之ヲ和ルヲ得可キ場合ニ於テ訓令若ハ命令ヲ發シタルコト。

(三)法律ニ違背シ又ハ獨乙ノ利益ニ反對スル政主ノ命令ヲ執行シタル事

(四)中央政府ニ於テ執行ノ任ニ在ル國民議會ノ決議ノ公布又ハ執行ヲ怠リタル事。若シ決議ニ對シ重大ナル異議ノ存スルトキハ國務省ハ領收ノ日ヨリ一週間内ニ之ヲ國民議會ニ提出スヘシ而シテ國民議會ノ之ニ就キ爲セル決議ハ必ス執行セサルヲ得サルモノトス。

(五)執行ノ例規ニ依リ決議ヲシテ無効ナラシメタル事。

(六)故意ヲ以テ獨乙臣民ノ憲法上ノ權利ヲ侵シタル事。

(七)國民議會ノ權利ヲ減削廢除スルノ方向ニ出ツル措置アル事。

(八)贈物若ハ其ノ他ノ利益ヲ受ケテ職權ヲ使行シ若クハ其ノ使行ヲ怠リタル事。

(九)自己ノ利益ノ爲ニ國權ヲ私用シ若クハ之ヲ使用セント脅嚇シ、又ハ職權外ニ於テ金圓ヲ徵收シ、又ハ之ヲ公共事業ニ使用シタル事。

(十)其ノ管理ニ屬スル金圓ヲ法律ニ違ヒ費用シ、其ノ他官金ニ對シテ不正ノ所爲アル事。

大臣タル人一己ノ資格ヲ以テスル罪犯ハ管轄刑事裁判所ニ於テ尋常ノ手續ヲ以テ處斷ス。民事上ノ損害ニ對スル告訴ハ通常民事裁判所ニ於テ受理ス。大臣ヲ告訴スル動議ハ國民議會ニ於テ文章ヲ以テ之ヲ爲シ、其ノ根據トスル事實及告訴ノ理由トスル義務違反ヲ精密ニ記載シ、議員廿五以上ノ連署ヲ要ス。

議長ハ動議ノ日ヨリ三日以内ニ於テ之ヲ議事日程ニ上スヘシ。

初回ノ討議ハ國民議會ニ於テ直ニ之ヲ討議スヘキヤ將タ之ヲ以テ各部會ノ豫議ニ附スヘキヤノ問題ニ限ル可シ。豫議ニ附スルニ決スルトキハ各部會ニ於テ相當ニ討議ヲ盡スノ末、審査委員ヲ互選スヘシ。告訴ノ動議ニ連署シタル議員ハ審査委員ト成ルヲ得ス、然レトモ委員會ニ出席シテ更ニ細密ナル報道ヲ爲スコトヲ得ヘシ。

委員會ハ事實ノ審査ニ關シ豫審判事ト同一ノ權ヲ有ス。委員會ハ宣誓シタル証據人及鑑定人ヲ出廷セシメ又ハ其ノ召喚ヲ裁判所ニ依賴スルコトヲ得。

大臣ハ告訴ノ動議ニ就キ報道ヲ受ケタルトキ自己ノ發意ニ因リ又ハ其ノ照會ニ應シ同會ニ出席シテ辨明ヲ爲スコトヲ得、又ハ辨明書ヲ作リ之ニ關係書類ヲ添ヘテ差出スコトヲ得。

犯罪ノ性質ニ從ヒ豫審ノ法規ニ依リ拘留ヲ命スルコトヲ得ヘキ場合ハ委員會モ亦之ヲ命スルコトヲ得。

委員會ノ豫議ヲ了ルトキハ議會ニ對シ其ノ報告ヲ爲シ、告訴ノ成立ニ議決スルトキハ同時ニ告訴狀ノ草案ヲ國民議會ニ提出スベシ。國民議會ニ於テ此ノ事件ヲ討議スルトキハ大臣ハ自ラ出席シテ說明ヲ爲スコト

ヲ得。

國民議會ニ於テ告訴ノ成立不成立ヲ決スルハ多數決ニ依ル。果シテ成立ニ決スルトキハ國民議會ヨリ三名ノ議員ヲ選擧シ裁判所ノ口頭審問ニ於テ訴訟ヲ追行スルノ任ニ當ラシム。

告訴成立シタルトキハ國民議會ハ一時被告大臣ノ職務ヲ中止シ、又ハ其ノ拘留ヲ命スルコトヲ得。國民議會ハ其ノ審議ヲ被告大臣ノ共犯者ニ及ホシ、之ニ對シ訴訟ヲ起シテ大臣ト俱ニ之ヲ訴追スルコトヲ得。

告訴成立シタルトキハ告訴狀並ニ國民議會カ之ヲシテ成立セシメタル所以ノ理由ヲ付シメタル決議案並ニ同會ニ提出シタル關係書類ヲ速ニ裁判所長ニ提出スヘシ。

告訴成立ノ後裁判所ニ於ケル對審ノ終ラサル前ハ議員廿五名ノ連署ヲ以テ告訴中止ノ動議ヲ國民議會ニ提出シ常例ノ討議ヲ以テ其ノ中止ヲ議決スルコトヲ得。

國民議會ヨリ大臣及共犯者ニ對シ起セル告訴ノ審問判決ハ獨乙裁判所ニ於テ之ヲ爲シ同裁判所ノ設立ニ至ルマテハ伯林ノライン州控訴院ニ於テ陪審裁判ヲ以テ之ヲ爲ス。

陪審ノ組織ニ關シテハ細密ナル規程アリトイヘ𪜈略ス、其ノ要ハ獨乙中ノ各最上裁判所ヲシテ性質、品行、知識、陪審ノ職ヲ盡スニ適シ年齡三十歲以上ナル者ヲ四名ツヽ出サシムルニ在リ。

裁判ニ付キ別ニ規程ノ存セサル場合ハ總ヘテライン普魯西治罪法ノ規程ヲ適用ス。

審問ハ口頭ニシテ之ヲ公開ス。

陪審ノ主坐ハ豫メ討論セスシテ問題ヲ發シ陪審官ヲシテ應荅セシム。

擬律ニ於テハ普通獨乙刑法ヲ適用シ、宣告ニハ判決ノ理由ヲ付ス。被

告有罪ニ決スルトキハ判事ハ其ノ過犯ニ對スルノ刑ヲ宣告シ、又轉職ヲ附加シ若ハ免職及或ル公務ニ就ク資格ノ喪失ヲ宣告スルコト得。有罪ニ決シタル所以ノ行爲若クハ怠懈ニシテ刑法ニ正條ナキモノタルトキハ判事ハ相當ト認ムル所ニ從ヒ刑罰ヲ定ムヘシ、中就分限剝奪(官職又ハ公權ノ一部ヲ奪フコト)又ハ免職ヲ課スルコトヲ得。

判決ハ裁判所長ヨリ之ヲ獨乙國務省ニ通スヘシ。刑ノ宣告ヲ受ケタル者ハ獨乙國ノ法律ヲ以テスルニ非サレハ特赦スルコトヲ得ス。(但シ委員報告ハ多クノ場合ニ於テハ大臣ハ君主ノ命令ヲ行ヒタルノ故ニ責問セラルヽモノナレハ君主ノ之ヲ赦免スルニ任スルトキハ責任ノ制度ハ空ニ屬スヿナリトノ主意ヲ取レリ。

茲ニ上述ノ經歷ニ依リ維納會議以上及國民議會以後ニ於テ各邦ノ制定修正シタル大臣責任ノ法規ハ其ノ重ナルモノヲ次章ニ枚擧ス。

第八章　獨乙各邦大臣責任沿革

○ヘスセン(公國)

ヘスセンハ千八百二十年十二月十七日憲法第百〇八條ニ曰、

「公國ノ國務大臣及上官ノ命令ニ依リ處分シタルニ非サル場合ニ於テ他ノ一切ノ官吏ハ各々其ノ職權內ニ於テ憲法ヲ格守スルノ責任ヲ有ス。

大臣及最上官廳ノ責任ニ關スル法律ハ憲法ノ一部分ヲ成ス」

而シテ千八百廿一年七月五日ヲ以テ「大臣及最上官司責任法」ヲ制定シ千八百廿四年一月八日ノ法律ヲ以テ之ヲ補修シタリ。モール責任論ノ卷末ニ評論スル所ニ依ルニヘスセンニ於テハ最上控訴院(即チ我カ大審院ノ如キモノヲ以テ國務裁判所トシ公開セサル總評定官ノ合議ヲ以テ判決シ、治罪ノ手續ハ普通治罪法ニ依ルコト、セリ、蓋シ兩法律ノ正條ハ今之

ヲ知ルニ由シナク、且モールニ依ルニ一般大臣責任制度ノ發達ニ影響ヲ及ホシタル所少ナキモノナレハ今略ス。同國ニ於テハ千八百三十三年四年及五年ノ間ニ於テ議會ト政府トノ間ニ憲法ノ解釋ニ付キ爭訟起リ終ニ內務大臣兼司法大臣ハス・ゼンプルグヲ告訴シタルモ一定ノ成蹟ヲ見スシテ止ミタリ、(モール責任論ニ告訴ノ要點ヲ記述セリ)。

○瓦典堡(ウルテンブルク)

瓦典堡ノ責任制度モ亦最モ古キモノヽ一ナリ、即チ千八百十九年九月廿九日ノ憲法第四章(官廳)及第十章(國務裁判所)ニ左ノ規程アリ、

(第五十一條)國家ノ行政ニ關シ國王ヨリ出ツル所ノ處分ハ各省大臣又ハ長官ニ於テ之ニ副署シ其ノ條項ニ對シ責ニ任スヘシ。

(第五十二條)前條ノ外大臣又ハ長官ハ其ノ自ラ處分シ又ハ其ノ委托セラル、所ノ職權內ニ於テ執行シ處分スルノ義務アルモノニ付キ責ニ任スヘシ。

自餘ノ官吏及官司モ前條ノ例ニ依リ其ノ職權內ニ於テ責ニ任スヘシ即チ此等ノ官吏及官司ハ正當ノ職權ニ在ル者ヨリ正當ノ形式ヲ以テ發スル所ノ命令ヲ遵奉スルノ責ニ任スヘシ。

若シ已ニ對シ命令ヲ發スル者其ノ正當ノ職權ヲ以テスルニ非サルヤヲ疑フトキハ上級官司ニ伺出ヘシ、又上官ノ命令ニ異議アルトキハ適當ノ手續ヲ以テ遲滯ヲ來タサヽルニ注意シテ之ヲ發令者ニ申出テ尙ホ前ノ命令ヲ改メサルトキハ則チ之ヲ執行スヘシ。

(第百九十五條)裁判上ヨリ憲法ヲ保護スル爲一ノ國務裁判所ヲ設ク。同裁判所ハ憲法ヲ轉覆セントスルノ處爲、幷ニ憲法ノ格段ナル條項ニ違反セルノ場合ヲ裁判ス。

(第百九十六條)國務裁判所ハ高等裁判所ノ所長中ヨリ勅任スル裁判長

一人及判事十二人ヲ以テ組織ス、其ノ半數ハ高等裁判所ノ判事中ヨリ勅任シ、両院ノ協議會ニ於テ他ノ半數及代理者三名ヲ互選ス。

議會選出ノ判事中少ナクモ二名ハ法律學者タルヘク、此ノ二名ハ勅許ヲ得テ之ヲ國王ノ官吏中ヨリ選擧スルコトヲ得ヘシ。自餘ノ判事ハ皆國會議員タルノ資格ヲ具ヘンコトヲ要ス。

書記ハ之ヲ高等裁判所ノ書記中ニ取ル。

(第百九十七條)總テノ判事ハ國務裁判所判事トシテ其ノ職務ヲ行フノ義務アリ而シテ自餘ノ司法官吏ニ等シク裁判ノ宣告ニ依ルニ非サレハ此ノ裁判所ノ判事ノ地位ヲ奪ハルヽコトナシ。然レモ議會選出ノ判事國家ノ官職ニ補任セラレタル片ハ國務裁判所判事ノ地位ヲ失フモノトス、然レモ議會ヨリ再ヒ選擧セラルヽコトヲ妨ケス。

勅選ノ判事其ノ裁判官ノ本職ヲ失フ片ハ從テ國務裁判所ヲ退クモノトス。

(第百九十八條)國務裁判所ハ裁判長ノ召集ニ依リ開廷ス、而シテ司法大臣ノ副署セル勅命ヲ受ケ、又ハ議會ノ一院ヨリ事件ヲ示シテ其ノ議長ヲ經テ請求ヲ受ケタル片ハ直ニ開廷セサルヲ得ス。

事件終結スル片ハ自然ニ閉廷ス、裁判長ハ判決ノ執行ヲ擔任シ、之カ爲ニ必要ナル場合ニ於テハ再ヒ裁判ヲ開クヘキモノトス。

(第百九十九條)第百九十五條ノ處爲ニ對スル告訴ハ政府ヨリ議會及委員會ノ各段ナル議員ニ對シ之ヲ起シ、又ハ議會ヨリ大臣及行政各部ノ長官ニ對シ幷ニ議會ノ格段ナル議員及高等役員ニ對シ之ヲ起スコトヲ得。大臣及行政各部ノ長官ノ外ナル官吏ハ此ノ裁判所ニ告訴セラルヽ、ナシ、但第五十三條ノ場合ハ此ノ限リニ非ス。

告訴及辯護ハ之ヲ公開ス。裁判筆記ハ表決及議決ト共ニ之ヲ印行

ス。

(第二百條)審問官ヲ使用スルノ必要アルトキハ之ヲ重罪裁判所ノ評定官中ヨリ取ルヘシ。審問ニハ國務裁判所ノ勅任判事及議會選出判事各一名ノ陪席ヲ要ス。

(第二百〇一條)各一事件ニ就キ二名ノ報告員ヲ定ム其ノ一人ハ勅任判事ニシテ他ノ一人ハ議員判事タルヘシ。

(第二百〇二條)凡ソ決議ニハ同數ノ勅任判事及議員判事ノ出席ヲ要ス。若シ員數ニ不均ヲ來タシ直ニ一人ヲ選任シ又ハ代理者ヲ補充シテ以テ之ヲ等均ニ爲スコト能ハサル塲合ハ多數ノ一方ヨリ就職ノ順ニ於テ其ノ最モ後ナル者ヲシテ退カシム然レトモ判事ノ總數ハ常ニ十人ヲ下タルコトヲ得ス。

裁判長事故アルトキハ上席勅任判事之ヲ代理ス。

裁判所長ハ表決ノ權ヲ有セス、可否同數ナルトキハ被告ニ利アルノ一方ニ決ス。

(第二百〇三條)國務裁判所ノ處罰ハ、逐放、及罰金、免職及分限剝奪、議會議員被選權ノ一時又ハ永久停止ニ止マルモノトス。

國務裁判所ニ於テ其ノ職權ニ屬スル至重ノ處罰ヲ宣告シ尙ホ其ノ餘ノ處罰ヲ要セサルコトヲ明言セサル塲合ニ於テハ普通裁判所ハ職權上ヨリ被告ニ對シ更ニ訴追スルコトヲ得。

(第二百〇四條)國務裁判所ノ判決ニ對シテハ控訴ヲ許サス、然レトモ上告及前狀回復ヲ許ス。

(第二百〇五條)國王ハ何等ノ塲合ニ於テモ審判ヲ中止スルコトヲ得ス、又其ノ特赦權ヲ以テ國務裁判所ヨリ免職ノ宣告ヲ受ケタル官吏ヲ舊職ニ復シ又ハ之ヲ司法若ハ行政ノ官職ニ補任スルコトヲ得ス、但

シ裁判所ノ判決ニ於テ再任ニ就キ被罰者ニ利アルノ明言ヲ存スル場合ハ此ノ限ニ非ス。

ベシヨルネルニ依ルニ瓦典堡國務裁判所創立以來之ヲ開廷シタル場合ハ唯タ一回アルノミ即チ瓦典堡ノ三王聯合ナル者ニ加入シタル事ニ付キ大臣ウエヒテルヲ告訴シテ無罪ニ決シタル場合是レナリ。モールハ千八百二十九年ヲ以テ瓦典堡大臣告訴制度ニ關シ細密ナル一書ヲ著シタリ。

○サクセン、マイニンゲン

サクセン、マイニンゲン(侯國)ハ千八百二十九年九月二十三日ノ根本法第百二條ヨリ第百四條マテヲ以テ大臣責任法ヲ規定シタリ。

○サクセンアルデンブルグ

サクセン、アルデンブルグ(侯國)ハ千八百三十一年四月廿九日ノ根本法第三十六條及第三十七條ヲ以テ大臣責任ヲ規定ス、以上二國ハ別ニ見ルヘキナシ。

○索遜王國

索遜王國モ亦四十八年ノ動乱前ヨリ責任規程ヲ有シタルノ一國ニシテ千八百三十一年九月四日憲法第四十一條ヨリ第四十三條ニ至ル及第百四十條ヨリ第百五十一條ニ至ル間ニ本則ヲ掲ケ千八百三十八年二月三日ノ法律ヲ以テ國務裁判所ニ於ケル訴訟手續ヲ規定シタリ、是レ大臣告訴ノ審判手續キニ關シ特別ノ法律ヲ發シタルノ嚆矢ナリ。

(憲法第百四十條)議會ハ國王ノ諸省又ハ他ノ官衙ニ於テ爲サレタル憲法違反ニ就キ共同シテ國王ニ對シ請願ヲ爲スコトヲ得。

國王ハ直ニ此ノ請願ヲ裁定スヘク、若シ疑義ノ存スル場合ハ事件ノ性質ニ依リ最上政務官若ハ最上司法官ヲシテ之ヲ審議セシムヘシ。

最上政務官ノ審議ニ付スル場合ニ於テハ其ノ意見ヲ國王ニ上奏シテ裁定ヲ請ハシメ、之ヲ最上司法官ノ審議ニ付スル場合ニ於テハ直ニ其ノ司法官之ヲ判決スヘシ。兩ノ場合ニ於ケル結果ハ之ヲ議會ニ報導ス。

(第百四十一條)議會ハ特ニ諸省ノ長官カ憲法違反ノ過犯アリタル片正式ヲ以テ之カ訴訟ヲ提起スルノ權ヲ有ス。

議會ニ於テ此ノ如キ訴訟ヲ提起スルノ義務アルヲ見ル片ハ告訴ノ要點ヲ精確ニ指定シ各院ニ於テ特別委員ヲ設ケ之ヲ審査スヘシ。此ノ告訴ニ關シ兩院ノ決議合同スルトキハ書面ヲ以テ之ヲ第百四十二條ノ國務裁判所ニ提出スヘシ。

(第百四十二條)裁判上ヨリ憲法ヲ保護スル爲ニ一ノ國務裁判所ヲ設置ス。該廳ハ憲法ヲ轉覆シ又ハ其ノ格段ナル一點ヲ破壞セントスル各省長官ノ行爲ニ對シ判決ヲ爲ス。

右ノ外第八十三條及第百五十三條ノ規程ニ就キ上訴ヲ受理ス。

(第百四十三條)國務裁判所ハ上等裁判所ノ長官中ヨリ國王ノ勅任スル裁判所長一人、及判事十二人ヲ以テ組織ス、判事ノ半數ハ上等裁判所ノ判事中ヨリ之ヲ勅任シ、又議會ノ各一院ニ於テ其ノ議員中ヨリ判事三名及代理者二名ヲ互選ス。議會選出ノ判事中少ナクモ二人ハ法律學者タルヘク、或ハ國王ノ勅許ヲ經テ之ヲ官吏中ヨリ選擧スルコトヲ得。

以下各條ハ瓦典堡ト大同小異ナレハ之ヲ略ス、而シテ第百五十三條ニ至リ議會ト政府トノ間ニ起レル憲法上ノ爭議ヲ裁定スルノ權ヲ國務裁判所ニ屬セシメタリ、曰

憲法ノ格段ナル點ノ解釋ニ就キ疑義ヲ生シ議會及政府ノ同意ヲ以

テ之ヲ決定シ難キ場合ハ議會幷ニ政府ニ於テ之ヲ國務裁判所ノ裁決ニ付スルコトヲ得。

此ノ事件ノ爲ニ双方ヨリ書面ヲ以テ其ノ意見ヲ國務裁判所ニ提出シ、又互ニ他ノ一方ニ送付シ、第二ノ書面ヲ以テ答辨ヲ提出シ及互ニ他ノ一方ニ送付スヘシ。表決ニ於テ可否同數ナル片ハ裁判長ノ決スル所ニ依ル。

國務裁判所ノ爲セル判決ハ之ヲ國法ノ有効ナル解釋ト看做シ遵由ノ義務アルモノトス。

又國務裁判所ハ議會ノ議員ノ職務上ノ過犯ヲ審判スルノ權ヲ有シタルモ千八百七十四年十月十二日ノ法律ヲ以テ憲法第八十三條ヲ廢シタルト共ニ此ノ權ハ消滅シタリ。

是ヲ以テ千八百三十八年二月三日ノ國務裁判所訴訟法ハ全篇五十八條ヲ四章ニ分チ第一章及第二章ニ於テ大臣裁判手續ヲ規定シ、第三章ハ議員裁判手續ヲ規定シテ今ヤ即チ廢止ニ屬シ第四章ニ於テ憲法爭議ノ裁決手續ヲ規定シタリ、其ノ第一章第二章ノ條項ハ後ニ各國大臣訴訟手續キヲ比較講究スルノ部ニ讓リ此ニ略ス。

○ブロンシワイヒ(ブランスウィク)

ブロンシワイヒ(侯國)ハ千八百三十二年十月十二日新國法第百〇八條ヨリ第百十二條ニ至ル間ニ於テ大臣告訴ノ規程アリ。

○巴威里(王國)

巴威里ハ千八百四十八年ノ動乱ニ際シ大臣責任法ヲ制定シタル邦ノ隨一ナリ、即チ千八百十八年五月二十六日憲法第十章ノ第四條乃至第六條(及附則第九章第十六條)ニ大綱ヲ掲ケ、千八百四十八年六月四日ヲ以テ大臣責任ニ關スル法律ヲ制定シ、千八百五十年三月三十日國務裁

判所及其ノ裁判手續ニ關スル法律ヲ制定シタリ、左ノ如シ。

(憲法第四條)執政及諸官吏ハ憲法ヲ恪守スルノ責任アリ。

(第五條)國會ハ總体(両院)ノ發議ニ因リ執政及其ノ他ノ官吏ノ國憲ニ違背セシコトヲ國王ニ訴願スルノ權アリ國王ハ其ノ訴願ノ採用ス可キヤ速ニ之ヲ採用シ若シ疑議ヲ生スルトキハ其ノ事件ノ性質ニ從ヒ之ヲ樞密院又ハ高等法院ニ下附シテ審査決定セシム。

(第六條)高等官吏故意ヲ以テ憲法ヲ犯セシカ爲ニ國會ニ於テ職務上之ニ對シ公然公訴ヲ爲サヽルヲ得サルトキハ其ノ告訴ノ理由ヲ詳細ニ掲示シ両院ニ於テ各々特別ノ委員ヲシテ之ヲ調査セシムベシ。若シ該告訴ニ付両院ノ議決一致シタルトキハ両院ヨリ成規上ノ法式ニ循ヒ必要ノ書類ヲ添ヘテ告訴狀ヲ國王ニ奏呈ス可シ。

(法律第一條)各省長官ハ樞密顧問ノ一名ヲ以テ之ニ任シ終身俸給三千「フロリン」ヲ給ス其ノ從來ノ公務上ノ關係ヨリ更ニ多額ヲ受クル場合ハ此ノ限ニ在ラズ。何人モ大臣タルコトヲ承諾スルノ義務ナシ。

(第二條)國王ノ指名スル樞密顧問又ハ他ノ長官ヲシテ一時某省ノ事務ヲ兼行セシムルハ左ノ場合ニ限ル。

(一)專任大臣事故アリテ其ノ公務ヲ行フコト能ハサルトキ。

(二)大臣ニ欠員ヲ生シ直ニ之ヲ補任スルコト能ハサルトキ。

(第三條)各大臣ハ何時タリトモ其ノ職ヲ辞スルコトヲ得。大臣辞職ノ理由トスル所若シ國王ニ於テ重大ナル國務ニ關シ大臣ノ意見ヲ採納スル能ハストスルニ出ツルトキハ憲法附則第九章第廿四條ニ拘ラズ之ヲ拒絶ス可カラサルモノトス。

此ノ理由ニ因リ辞職ヲ聽サレタル大臣並ニ國王ノ立意ニ因リ職ヲ止メラレタル大臣ハ終身俸給額ヲ減セラルヽコトナシ。

(第四條)國王ハ政令ヲ發スル毎ニ其ノ事務所管ノ大臣若クハ臨時代理者ヲシテ副署セシム。

本條ノ副署ナキ政令ハ之ヲ執行スルコトヲ得ス。

(第五條)大臣ノ副署ヲ經スシテ發シタル國王ノ政令ヲ執行シタル官吏ハ職權濫用ノ罪ヲ以テ論ス。

(第六條)各大臣及臨時一省ノ統理ニ當リタル者ハ其ノ副署シタル國王ノ裁可及其ノ記名ヲ以テ職權內ニ於テ發シタル命令ノ條項ニ對シ十分ノ責ニ任スヘシ。

(第七條)各省長官其ノ命セラルヽ所ノ事務ノ法律ニ背キ又ハ國益ニ害アルヲ認ムル場合ニ於テハ之ヲ拒辭シ理由書ヲ附シテ副署ヲ拒絕スルコトヲ得ヘク、又內閣ニ於テ其ノ理由ヲ陳述シ筆記ヲ國王ニ提出スルコトヲ得ベシ。

(第八條)現任大臣、退職大臣又ハ一省ノ臨時長官ハ國王又ハ議會ニ對シ其ノ處爲ノ爲ニ辨明ヲ要スル場合ニ於テ公務上ノ都合ヲ口實トシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス。

(第九條)大臣又ハ其ノ代理者ノ行爲又ハ不行爲ニ因リ國法ニ違背シタル者ハ議會ニ對シ責ニ任スヘク、議會ノ告訴ニ依リ過犯ノ輕重ト義務違反ノ結果トニ準シ左ノ罰ニ處セラルヘシ。

(一)單ニ免職シ憲法附則第九章第十九條ノ退職給ハ尙ホ之ヲ給ス、

(二)免職シ退職給ヲ止ム、

(三)分限剝奪、破毀、刑罰、

(第十條)議會ノ兩院ニ於テ第九條ノ事由アリトシ、其ノ義務トシテ大臣又ハ大臣代理者ニ對シ正式ノ訴訟ヲ提起スルノ義務アルヲ認ムルトキハ、憲法第十章第六條第一項及第二項ニ規定シタル手續ヲ經タル

後國王ニ於テ被告ノ職務ヲ一時停止シ、此ノ事件ノ爲ニ特ニ國務裁判所ヲ召集シテ速ニ之ヲ判決セシムヘシ。

此ノ場合ニ於テハ憲法附則第九章第十六條ヲ適用セス。

(第十一條)國務裁判所ノ對審ハ口頭ニシテ之ヲ公開ス。

起訴及出廷ハ議會ノ両院ニ於テ多數決ヲ以テ選出シタル議會代理員ヲシテ之ヲ爲サシム。

告訴ニ關スル事實上ノ問題ハ陪審官ノ決スル所ニ依リ、法律上ノ問題ハ法律學者ノ決スル所ニ依ル。

其ノ他國務裁判所ノ組織及訴訟手續ニ係ル細則ハ別ニ法律ノ規定スル所ニ依ル。

(第十二條)第九條ノ處罰ニ關シテハ國王ハ特赦ノ權ヲ使行スルヲ得ス。

有罪ノ宣告ヲ受ケタル者ノ地位ヲ復スルハ必ス両院ノ同意ヲ要ス。

(第十三條)國務裁判所ニ於ケル審判ハ左ノ二事ヲ妨ケス。

(一)同一事件ニ付普通裁判所ノ職權内ニ於テ普通刑事上又ハ公務上ノ重輕犯罪ヲ審判スル事。

(二)民事裁判所ニ於テ損害要償ノ訴追ヲ爲ス事。

(第十四條)此ノ法律ハ官報ニ公布ノ日ヨリ効力ヲ有シ憲法ヲ補充スル國ノ根本法ト看做サレ、之ヲ改正スルハ憲法第十章第七條ノ規程ニ依ルヲ要スルモノトス。

(以上ステヨルク獨乙憲法集ニ載セタル本條ニ就キ翻譯ス)

又千八百五十年三月卅日國務裁判所訴訟法ハベシュルネル責任論ニ之ヲ載セタリ然レモ後ニ各國ニ於ケル訴訟手續ヲ比較スルノ部ニ讓リテ此ニ略ス。

○婆典(バーデン)

婆典公國現行ノ憲法ハ千八百十八年九月二十二日ノ制定ニ係ルモノニシテ其ノ第七條第二項ニ「公國ノ國務大臣及一切ノ官吏ハ嚴密ニ憲法ヲ格守スルノ責任ヲ有ス」トアリテ其ノ第六十七條ニ至リ大臣告訴ノ事ヲ規定シタリ、後千八百二十年十月五日ヲ以テ大臣責任法ヲ制定シタルハ主トシテ維納決議ノ綱領ニ依リタリト知ルヘシ、然ルニ千八百四十八年ノ動乱ヲ經テ氣運一轉シ、前法ノ改ムヘキヲ認メタルニ因リ千八百六十八年二月廿日ヲ以テ「新責任法」ヲ發布シ、翌年ノ十二月十一日ヲ以テ責任事件ノ訴訟法ヲ制定シタリ。ステヨルクニ載スル所ノ婆典憲法ニ於テハ右六十八年ノ責任法中大臣ニ關スル條規ハ之ヲ憲法中ニ移シ、憲法ノ舊第六十七條ニ代フルニ第六十七條ノ(イ)ヨリ(ト)マテヲ以テシタリ、即チ左ノ如シ。

(第六十七條(イ)下院ハ故意ヲ以テ又ハ怠解ニ因ル行爲又ハ不行爲ニ依リ憲法又ハ公認セラレタル憲法上ノ權利ヲ侵犯シ又ハ國家ノ安寧幸福ヲ重大ノ危難ニ陷レタル事ニ對シ正式ニ從ヒ大臣及最上官廳ノ吏員ヲ告訴スルノ權ヲ有ス。

前項ノ決議ヲ爲スハ(憲法)第六十四條及第七十四條ニ憲法改正ニ關シ規定シタル多數決ヲ要シ(出席員三分ノ二)之ヲ中止スルハ通常多數決ヲ以テ足レリトス。

下院ノ告訴權ハ告訴ノ前タルト其ノ後タルトヲ問ハス、被告其ノ職ヲ去ルノ爲ニ中止スルコトナシ。

有罪ニ判決スル片ハ同時ニ被告ノ官職ヲ免スル旨ヲ宣告スヘシ。

有罪判決ノ結果ハ議會ノ請求又ハ同意ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ解除スルコトヲ得ス。

國務裁判所ハ損害要償ノ事件ヲ審判セス。

(第六十七條「ロ」)前上ノ告訴ニ對スル審判ハ上院ヲ以テ國務裁判所トシ、最上裁判所長(即チ大審院長)及判事八名ヲ以テ之ヲ審判ス、八名ノ判事ハ抽籤ヲ以テ合議裁判所(即チ地方裁判所)判事中ヨリ之ヲ取リ上院ニ附屬セシム。被告及被告代言人ハ忌避ノ權ヲ有ス。

上院議長ニ於テ裁判長ト成リ最上裁判所長ハ必要ノ場合ニ於テ之ヲ代理ス。

國務裁判所ノ組織及其ノ訴訟手續ノ細則ハ別ニ普通ノ(即チ憲法附屬ニ非サル)法律ヲ以テ之ヲ定ム。

(第六十七條「ハ」)ハ大臣又ハ最上官廳ノ一員、第六十七條「イ」ノ侵犯ニ附隨シ又ハ此ノ侵犯ナキモ其ノ職權上ニ於テ國家ニ對スル罪若ハ普通法上ノ罪ヲ犯シタリトスル場合ニ於テ下院ハ犯罪者ヲ普通裁判所ノ裁判ニ付センコトヲ國務裁判所ニ要求スルノ權ヲ有ス。

此ノ要求ハ第六十七條「イ」ニ規定シタル多數決ヲ以テ之ヲ議決シ、本訴アルトキハ之ヲ本訴ニ附帶シ本訴ナキトキハ單ニ此ノ要求ヲ國務裁判所ニ提出スヘシ。

(第六十七條「ニ」)開會期中ニ於テ下院ノ決議シタル告訴ハ議會ノ停會又ハ閉會ノ後モ委員ニ命シテ訴追セシメ、此ノ事件ニ關シテハ上院ハ停會又ハ閉會セルモノト看做ス。

議會解散ノ場合モ亦前項ノ例ニ依ル、然レトモ終審及宣告ハ憲法第四十四條ニ規定シタル日數(即チ三ケ月以內ニ於テ改選ニ至ルマテ)ノ間之ヲ延期ス。

(第六十七條「ホ」)新議員召集ノ時ニ至リ國務裁判所從前ノ告訴ニ對シ未タ判決ヲ爲サヽル場合ニ於テハ新ニ國務裁判所ヲ組織シ、下院ハ新ニ出廷委員ヲ選任スヘシ。

更ニ解散ニ至ルトキハ下院選任ノ委員ハ引續キ出庭ノ權ヲ有シ、國務

裁判所ノ組織ハ之ヲ改メス。

(第六十七條「ヘ」)議會ニ於テ犯罪ノ處爲ヲ認知シタル時ヨリ滿三年ヲ經過スル片ハ告訴ノ權ハ消滅ス、但シ下院ニ於テ此ノ事件ニ就キ告訴ノ動議ヲ爲スノ權ヲ保有セントスル旨ヲ特ニ議決シタル場合ハ此ノ限ニ非ラス。

下院ノ多數ニ於テ此ノ處爲ヲ正當ト爲シタル場合ニ在テハ告訴ヲ爲スコトヲ得ス。

(第六十七條「ト」)公家ノ命令及處分ニシテ國ノ統治及行政ニ係ルモノハ之ニ協贊シタル最上官廳ノ人員ニ於テ其ノ原本ニ記名スヘク、大臣一名ノ副署ヲ以テ公布シタルモノノ外ハ執行ノ効力ナキモノトス。」

(以上)

千八百六十九年十二月十一日ノ制定ニ係ル責任事件訴訟法ハ後ニ各國比較講究ノ部ニ讓リ此ニ略ス。

○普魯西

普魯西ハ千八百五十年一月卅一日ノ憲法第四十三條ヨリ第四十五條マテ及第四十九條、第六十條、第六十一條ニ左ノ規程アリ(井上氏譯ノ學國憲法ニ依ル)

第四十三條　國王ノ身體ハ侵スヘカラサル者トス、

第四十四條　國王ノ諸執政ハ、責ニ任スヘキ者トス、○國王ノ政府ヨリ出ル一切ノ文書ハ、必ス其ノ責任ニ當ル所ノ一ノ執政之ニ副署シ、始メテ施行スヘキ力アリ、

第四十五條　行政權ハ、國王一人ニ屬ス、○國王ハ、諸執政ヲ命シ、及之ヲ免ス、○國王ハ、法章ノ頒布ヲ命シ、而シテ其ノ施行ノ爲ニ要用ナル條則ヲ發ス、

第四十九條　國王ハ、恩赦輕減ヲ與フルノ權ヲ有ス、○然レ𪜈執政其ノ

職事ヲ以テ罪ヲ得タル者ノ爲メニハ、其ノ罪ヲ論告シタル議院ヨリ申奏スルニ依ルニ非レハ、恩赦輕減ノ權ヲ施スヿヲ得ス○國王ハ特法ニ依ルニ非スシテ、方ニ行ヘル法司ノ追究ヲ停ムルヿヲ得ス、

第六十條　諸執政並ニ執政ノ代理タル諸官ハ両院ニ參列ノ權ヲ有シ、而シテ其ノ發言ヲ願フヿアルゴトニ、議院ハ必ス之ヲ聞クヘシ○各議院ハ、諸執政ノ出頭ヲ請求スルヿヲ得、

諸執政ハ、其ノ議員タル時ヲ除クノ外投票ノ權ヲ有セス、

第六十一條　各議院ハ諸執政ノ犯ニ建國法、及贓賄、及謀反ノ罪ヲ論告スルヿヲ得、大法院、其ノ事ヲ裁決スヘシ、別法ヲ以テ、諸執政ノ責任事件、其ノ紀治處分及刑律ヲ定ムヘシ、

千八百六十三年ニ至リ下院ニ於テ大臣責任法制定ノ議起リ、草案ヲ可決シタリ、然レ𪜈上院ヲ通過セサリキ。有名ナル刑法學者ホルチェンドルフハ同年ノ刑法雜誌ニ此ノ草案ノ批評ヲ載セ、併セテ新草案ヲ掲ケタリ。

憲法ノ約スル所ノ別法未タ制定ニ至ラサルノ今日ニ於テ實際大臣ヲ告訴スルコトヲ得ヘキヤ否ハ今日ノ問題ナリ、コッヒュ氏ノ普通國法註解ニハ此ノ權アリト言ヘリ、而シテ現時ニ大名アル國法學者ハ無シト言ヘリ、佛人ハ同國ノ同樣ノ事情ニ關シ無論此ノ權アリト言フコト前述ノ如シ、要スルニ是レ一ノ政治問題ニシテ時勢ニ依リ決スヘク鐵血宰相政務ヲ總理セル年間ノ形情ハ必スシモ永久ノ形情ナルヲ望ミ難キコト固ヨリ論ナシ。

且普魯西ニ於テハ未タ法律ニ依リ國務裁判所ト認メタルモノ無キモ、用語ニ於テ既ニ斯ク稱スルモノアリ、即チ千八百五十三年四月廿五日ノ法ニ依リ國事犯及國王ニ對スル不敬ノ罪ノ爲ニ伯林ニ設クル所ノ

裁判所(第二次)是レナリ而シテ其訴訟手續ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定メタリ。

六十三年責任法草案ノ大要ハベシヨルネル責任論第四十八節ニ之ヲ載セタリ、今略ス。

○舊ハノーブル

ハノーブルハ今ハ普魯西ニ合併シタルモ昔ハ嚴然タル一立憲王國ニシテ責任ノ制亦備ハレリ即チ千八百三十三年七月廿六日根本法第百五十二條及千八百四十年六月ノ憲法第六十八條ニ於テハ大臣ハ單ニ國王ニ對シテノミ責任アル旨ヲ規定シタリ○千八百四十八年八月五日ノ法律ヲ以テ責任及國會ノ告訴權ニ關スル原理ヲ回復シタリ○其ノ後千八百五十五年六月ノ追加條例ヲ以テ前顯法律ノ嚴格ナル諸點ヲ緩メタリ

○サクセン、ワイマル、アイセンナフ

サクセン、ワイマル、アイセンナフ(公國)ハ千八百五十年十月十五日改定根本法第四十七條ヨリ第五十九條ニ至ルマテニ大臣責任ノ要領ヲ規定シ千八百五十年十月二十二日ヲ以テ全篇廿六條ノ法律ヲ發シ「大臣ニ對スル告訴及其ノ訴訟手續」ヲ規定シタリ、正條ハステオルク憲法集第二百八十八頁以下ニ載セタルモ今略ス、其ノ訴訟手續ハ尙ホ引用スル所アルヘシ。

○オルデンブルク

オルデンブルク(公國)ハ千八百五十二年十一月二十二日ノ根本法第二百條ヨリ第二百九條マテヲ以テ大臣責任ノ綱領ヲ規定シ同法附則ノ第三ヲ以テ國務裁判所ノ組織及訴訟手續ヲ規定シタリ。(ステオルク憲法集第三百二十三頁以下)

○ザクセンコフルグ、ゴタ

サクセンコブルグ、ゴタ(侯國)ハ千八百五十二年五月三日ノ根本法第百三十二條及第百六十二條ヨリ第百七十七條ニ至ルマテヲ以テ大臣責任ノ大綱ヲ規定ス。

○ロイス若統

ロイス若統(公國)ハ千八百五十二年四月十四日改正根本法第百〇六條ヨリ第百十六條ニ至ル間ニ大臣責任ノ規定アリ。

○シウワルツブルク、ゾンデルスハウセン

シウワルツブルク、ゾンデルスハウセン(侯國)ハ千八百四十九年十二月十二日ノ憲法第四十九條、第六十九條乃至第七十二條、第百二十七條ニ於テ大臣責任ヲ規定セリ。

○シワルツブルグ、ルードルスタット

シワルツブルク、ルードルスタット(侯國)ハ千八百五十四年三月廿一日ノ根本法第五條ヨリ第八條マテノ間ニ大臣責任ヲ規定ス。

○リヒテンスタイン

リヒテンスタイン(公國)ハ千八百六十二年九月廿六日憲法第二十九條及第四十條ニ大臣責任ノ事アリ。

○アンハルト、ベルンブルグ

アンハルト、ベルンブルグ(公國)千八百五十年二月廿八日憲法第八十條及第八十五條ニ大臣責任ノ事アリ。

○ワルデック、ピールモント

ワルデック、ピールモント(侯國)ハ千八百五十年六月四日大臣責任法ヲ發シ千八百五十二年九月十七日ノ憲法第四條、第五條、第八條、第十二條第六十六條、第七十二條ニ再ヒ大臣ノ責任ヲ規定シ千八百五十七年五

月八日ヲ以テ再ヒ大臣責任法ヲ定ム。

第九章　墺地利匈牙利大臣責任沿革

墺地利ニ於テハ千八百四十八年三月十七日ノ決議ヲ以テ大臣會議ヲ設クルコ決シタル片既コ大臣ヲシテ同月十五日ノ勅命ヲ執行スルノ責ニ任セシメ、翌月二十五日ヲ以テ憲法ヲ發布スルニ當リ左ノ規程ヲ含蓄セシメタリ、曰

「帝ノ命令ハ責任大臣ノ連署アルヲ俟テ其ノ効力ヲ有スルモノトス（第八條）」……「帝ハ赦免減刑ノ權ヲ有ストイヘモ大臣カ罪ヲ犯シタルノ場合ニ於テハ國會ノ両院ヲ以テ帝ノ此ノ權ヲ用フルニ干渉スルノ權利アルモノトス（第十三條）」……「大臣ハ其ノ司行權内ニ於ケル一切ノ行爲及動議ニ對シ其ノ責ニ任スヘシ（第三十二條）」……「責任ノ要件幷ニ其ノ原告者タルヘキ者及審判者タルヘキ者ノ如何ハ別ニ法律ノ規定スル所ニ依ル（第三十三條）」

墺地利匈牙利大臣責任沿革

千八百四十九年クレムシエル國會ニ於テ議定シタル憲法案ハ終ニ効力ヲ得サリシト雖政治上ニ重大ナル影響アリタルモノニシテ此ノ中ニモ大臣責任ノ要件ヲ密ニ劃明シタリ、左ノ如シ、

第六十二條「大臣ハ其ノ職務ニ關シテ責ニ任スベシ」○第六十六條「皇族幷ニ出生ニ因テ墺國ノ臣民タルニ非サル者ハ大臣ト成ルヲ得ズ」○第六十八條「帝ハ大臣ノ責任ヲ赦免スルヲ得ス」○第六十九條「大臣ハ議會ノ決議ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ裁問スルヲ得ス、而シテ何等ノ事件ニ關シテ責問セラルヘキヤヲ言ヘハ職權ノ濫用就中憲法違反、國事叛、賄賂等是レナリ○第七十條「帝國最上裁判所ハ大臣ヲ判決スヘク、帝ハ原告ト爲リタル國會ノ請求ニ依ルニ非サレハ之ヲ赦免スルヲ得ス。

千八百四十九年三月四日ノ憲法ニ於テモ大臣ノ責任ヲ公認シテ其ノ第十八條ニ帝ノ勅令ハ責任大臣ノ連署ヲ要スルコト、爲シ又第八十四條ヲ以テ行政權ハ全ク帝ニ屬シ責任大臣及之ニ隷屬スル官吏ヲ經テ此ノ權ヲ行フモノトシ、又第九十一條ヲ以テ大臣ノ責任、其ノ裁判ノ手續、及處罰ノ種類ハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定メンヿヲ決シタリ、然ルニ千八百五十一年ニ至リ帝ハ右ノ憲法ヲ以テ大臣責任ニ關スル精細ノ規程ヲ缺クモノト爲シ、大臣部ハ帝ノ顧問ニシテ又其ノ最上行政機關タル上ハ唯タ帝ニ對シテノミ責任ヲ有スヘキ者ナリトシテ國會及其ノ他ノ權力ニ對シ責任アリトスルノ義ヲ廢止セント試ミタリ。則チ同年八月廿日ノ閣令ヲ以テ左ノ原則ヲ立テタリ。

(一)大臣部ハ帝ノ命令裁決ヲ實行シ、且ツ帝ニ對シ純然タル忠誠ヲ誓フノ義務アリ。

(二)大臣部ハ上顯ノ地位ニ立テ一切ノ法律命令行政規則等ニ關シ、其ノ

自ラ之ヲ必要又ハ適當ト認メタルト、帝ヨリ之ヲ命セラレタルトヲ論セス、必ス十分ノ討議ヲ盡シ、帝ヨリ之ニ下ス所ノ審定ヲ精密ニ執行スルノ義務アリ。

(三)大臣部(即チ内閣)及其ノ支部(即チ各省)ニ於ケル各大臣ハ行政ニ於テ現行ノ法律及勅令ヲ遵奉スルヿニ關シ帝ニ向テ其ノ責ニ任スヘシ。各大臣ハ其ノ從來委任セラル、所ノ行政ノ一部ヲ統括スルノ權ヲ繼續スヘシト雖帝ハ此ノ權ニ關シ更ニ精細ナル規程ヲ發スヘシ。

(四)向後大臣ノ連署ハ法律及勅令ノ公布ニ止マルヘク、必ス「至尊ノ勅定ヲ奉シテ大臣會議議長宣ス」ノ數字ヲ附シ、總理大臣及當局大臣之ニ連署スヘシ。此ノ連署ノ目的ハ必要ノ形式ヲ守リ且帝ノ勅定ヲ精密ニ記載スル由ヲ保証スルニ在リトス。

(五)向後ハ法律勅令ノ公布ニ於テ從來ノ「朕ノ大臣會議ノ提出ニ依リ」ナル上諭文ニ代フルニ「朕ノ大臣會議ノ聽承ヲ經テ」ナル字ヲ以テスヘシ。

然ルニ反對ノ勢力太タ強キカ爲ニ數月ヲ出テスシテ千八百五十一年十二月卅一日ニ至リ勅令ヲ以テ千八百四十九年三月四日ノ憲法全体ヲ以テ墺地利帝國ノ國体ニ適セスト認ムル旨ヲ公言シ且其ノ條項ノ間ニ矛盾アルカ爲ニ實行シ難ケレハ法律トシテノ効力ヲ有セサル者トスル旨ヲ宣告セサルヲ得サルニ至レリ。

次ニ千八百六十一年ヲ以テ新主義ノ憲法ヲ發布スルニ及テハ大臣ノ責任ニ付キ更ニ條項ヲ設ケサリシカ、始メテ國會ヲ開クニ當リ此ノ事直ニ問題ト爲リ、終ニ千八百六十二年五月一日ノ會議ニ際シ帝ヨリ勅使ヲ議場ニ派シテ政府ヲシテ大臣責任ニ關スル憲法附屬ノ法律ヲ立案セシメント約セサルヲ得サルノ勢ト爲レリ、而シテ國會ハ帝ノ此ノ

通知ヲ承諾シタリ。

サテ躊躇數年ノ後千八百六十七年六月ニ至リ始メテ政府ヨリ大臣責任ノ案ヲ下院ニ提出シタリ是ニ於テ下院ハ議員三十六名ヲ以テ所謂憲法委員ナル者ヲ組織シ、十五條ヨリ成レル提出案ノ審査報告ヲ爲サシメタルニ同委員ハ之ヲ不完全ナル者ト爲シ更ニ自ラ三十一條ヨリ爲レル修正案ヲ作テ議場ニ報告シタリ、而シテ此ノ修正案ヲ以テ議題トスルニ決定シテ之ヲ全院ノ會議ニ附シタルニ二三ノ修正ヲ經テ終ニ法律ト爲リタリ。

議定奏上ノ案ハ千八百六十七年七月二十五日ニ至リ裁可ヲ經テ同年同月廿八日ノ公布ヲ以テ効力ヲ得タリ。

此ノ法律ハ現今大臣責任法中ノ稍完全ナルモノト認メラルヽ所ナレハ左ニ其ノ逐條ヲ譯出スヘシ(墺國法令全書ニ依ル)。

(第一條)凡ソ皇帝ノ統治處分ハ一ノ責任大臣ノ副署ヲ墺テ其ノ効力ヲ得ルモノトス。

(第二條)大臣會議(即チ內閣)ノ各員ハ故意又ハ現然タル怠解ヨリシテ其ノ職權上ノ行爲又ハ不行爲ニ因リ國會ニ於テ代表スル所ノ王國及諸州ノ憲法又ハ其ノ州令若ハ其ノ他ノ法律ニ違背シタルノ責ニ任ス。

(第三條)大臣責任ノ概自左ノ如シ

(イ)最上行政官カ其ノ在職ノ時ニ於テ爲シタル處分、特ニ其ノ發議ニ依リ發シ又ハ其ノ副署ヲ以テ發布シ又ハ大臣ノ副署ナシニ執行シタル勅令

(ロ)其ノ職權內ニ於テ自ラ發シタル訓令又ハ命令

(ハ)他ノ大臣ノ現然タル職務違反ヲ故意ニ補助シタル事

(第四條)凡ソ獨立シテ一省ヲ統理スルノ任ニ在ル官吏ハ責任ニ關シ之

ヲ大臣同樣ニ取扱フ。

(第五條)普通刑法ノ禁スル行爲及不行爲ニ關シ大臣ヲ訴追スルハ通例普通裁判所ノ管轄ニ屬ス(第八條)。

(第六條)各大臣ハ普通裁判所ニ於テ其ノ國務裁判所カ違法ナリト判決シタル公務執行ニ因リ國家又ハ一私人ニ被ラシメタル所ノ損害ニ對シ要償セラル、コトアルヘシ。

此ノ訴訟ハ損害ノ因ラ起リシ所ノ處爲ニ對シ告訴ヲ起シラ判決ニ至ラサル前ニ之ヲ起スコトヲ得ス

(第七條)起訴ノ權ハ兩院ノ各一方ニ屬ス。

告訴ノ動議ハ書面ヲ以テ爲ス可ク上院ニ於テハ少クモ二十人ノ連署ヲ要シ下院ニ於テハ少クトモ四十人ノ連署ヲ要ス。

動議ニハ其ノ基ク處ノ事實並告訴ノ事由トスル所ノ義務違反ノ廉ヲ精密ニ記載スヘシ。

(第八條)議會ノ各一院ハ又普通刑法ニ觸レタル大臣ノ處爲トイヘトモ其ノ大臣タルノ公務ニ關係アルモノニ就テハ之ヲ告訴ノ事件ト爲スコトヲ得。

此ノ場合ハ此ノ處爲ニ對シ國務裁判所ノミ職權ヲ有シ(第十六條)若同シ事件ニ付キ普通裁判所ニ於テ既ニ審判ニ着手シタル片ハ其ノ審判ハ國務裁判所ニ移ルモノトス。

(第九條)上院又ハ下院ノ議長ハ其ノ院ヘ告訴ノ動議書ヲ提出シタル者アル片ハ八日以內ニ於テ之ヲ議事日程ニ上ホシ當日ニ至レハ先ツ直ニ之ヲ全院ノ諸題ト爲スヘキヤ將タ委員ヲ撰定シテ報告ヲ爲サシムヘキヤヲ限リ議定ス。

(第十條)委員ヲ選定シタル片ハ其ノ委員ハ告訴シテ成立セシムル所

以ノ事實ヲ確定スルノ目的ヲ以テ或ハ證據人鑑定人ヲ召喚シ又ハ關係大臣ノ出頭ヲ促シテ質問ニ應セシメ或ハ答辯書ヲ作ラシメ或ハ辯護ニ必要ナル書類ヲ差出サシムルヿヲ務ムヘシ。

(第十一條) 委員ノ報告書ニ付キ議事ヲ開クトキハ被告大臣ニ於テ出席シテ辯解ヲ爲スコトヲ得。

告訴ノ成立ヲ議決スルニハ出席員三分ノ二ノ多數ヲ必要トス。

(但シ政府ノ草案ニ於テモ下院ノ議員四十名以上告訴ノ動議ニ連署シ且其ノ成立ノ議決ニハ出席員ノ少クモ三分ノ二ノ同意ヲ必要トシタリ)。

(第十二條)議會ニ於テ大臣ヲ被告ノ地位ニ置クコトヲ議決シタルトキハ其ノ大臣ハ公務ヲ中止スルヲ要ス。

告訴ノ議決ハ上奏ノ手續キヲ經テ之ヲ皇帝ニ上言ス。

(第十三條)告訴ヲ議決シタル一院ノ議長ハ議決ヲ國務裁判所長ニ通知シテ該裁判所ヲ組織スル判事ヲ直ニ維納ニ召集センコトヲ促スヘシ。

(第十四條)告訴ヲ爲シタル議會ノ一院ハ國務裁判所ニ於テ公判ヲ開クノ前ニ三分ノ二ノ多數ヲ以テ告訴中止ヲ議決スルコトヲ得。

(第十五條)告訴ヲ起シタル一院ハ國務裁判所ニ於テ告訴ヲ代表スル爲ニ三人ノ議員ヲ選定スヘシ。

(第十六條)告訴ノ審問判決ハ國務裁判所ニ於テ之ヲ爲ス。

國務裁判所ハ左ノ如ク之ヲ組織ス議會ノ両院ハ各々帝國臣民中ヨリ獨立ニシテ法律ニ通シタル者十二名ヲ選擧シテ六年間國務裁判所ノ判事タラシム、其ノ臣民ハ両院ノ議員タルヿヲ得ス、當選人ノ中ヨリ裁判長一名ヲ互選ス。

(第十七條)両院ノ一方ヨリ國務裁判所ニ向テ大臣ニ對スル告訴ヲ爲シタル片ハ國務裁判所ハ其ノ判事中ヨリ審議ノ爲ニ豫審判事一名ヲ互選ス而シテ豫審判事ハ普通刑事ニ於テ豫審判事ニ屬スル一切ノ職權ヲ有ス。

豫審判事ハ證據人及鑑定人ヲ召換シテ宣誓セシメ又ハ國務裁判所ヲシテ之ヲ召換セシム、官吏ニシテ此ノ召換ニ應スル者ハ職務上秘密ノ義務ナシ。

豫審ハ長クモ六ケ月内ニ之ヲ終結スヘシ。

(第十八條)豫審判事ニ於テ豫審ヲ終リタルト認ムル片ハ國務裁判所長ハ公判ノ日ヲ定メテ之ヲ廣告シ幷ニ之ヲ原被ニ通知ス。

被告ハ各一名以上ノ辯護人ヲ使用スルノ權ヲ有ス。

(第十九條)被告(數人ナレハ共同シテ)幷ニ原告代表人ハ理由ヲ示サスシテ國務裁判所判事六名ヲ忌避スルノ權ヲ有ス、然レ𪜈殘留ノ人員中ニテ議會両院ノ選出ニ係ル人員ハ均一ナルヲ要ス。

被告ニ於テ此ノ權ヲ使行セス又ハ之ヲ十分ニ使行セサル片ハ抽籤シテ判事ノ減ヲ或シ十二名ヲ殘スヘシ而シテ此ノ中各一院ノ選出セル判事ノ數ハ均一ナルヲ要ス。

裁判長ハ之ヲ忌避スルコトヲ得ルモ之ヲ廢スルヲ得ス、其ノ忌避セラレタル片ハ擔當人員中ヨリ裁判長ヲ互撰ス。

(第二十條)國務裁判所ノ對審ハ之ヲ公開シ口頭ニテ之ヲ爲ス。

常ニ少ナクモ十名ノ判事出席スルニ非サレハ裁判ハ効力ヲ有セズ

判事ハ其ノ自由ノ確信ニ依ルヘク證據ニ關シ各樣ノ成文規程ニ拘束セラルヽコトナシ。

裁判長ハ各時表決ニ加ハルヘシ。

表決ハ秘密ニシ投球ヲ以テ之ヲ行フ。

(第二十一條)判決書ニハ理由ヲ附スヘク、被告ノ有罪又ハ無罪ヲ宣告スヘシ。有罪ニ決スルハ三分ノ二以上ノ多數ヲ要シ、其ノ判決書ニ証據十分ナリトスル事實ヲ指示シテ其ノ罪犯タル所以ヲ疏明スヘシ。

(第二十二條)此ノ法律ニ於テ特例ヲ設ケタル場合ヲ除キ國務裁判所ニ於テモ一般治罪法ノ規程ニ據ルヘキモノトス。

(第二十三條)有罪ノ宣告ヲ受ケタル法律上ノ結果ハ常ニ犯罪人ヲ帝室參政(即チ大臣)ノ地位ヨリ遠クルニ在ルヘク、事情ノ重キニ從ヒ或ハ犯罪者ノ官職ヲ解キ、或ハ一時其ノ政事ニ關與スル權利(公權)ヲ失ハシムルコトアルヘシ。

被告ニシテ若シ普通刑法ノ禁スル所ノ行罪不行罪ヲ併セ犯シタルトキハ國務裁判所ハ前項處罰ノ外更ニ普通刑事上ノ處罰ヲ加フヘシ。

(第廿四條)國務裁判所ハ損害賠償ノ額幷ニ之ヲ受クヘキ人ヲ確定シ得ヘキ場合ニ於テハ犯罪者ノ賠償ノ義務ヲ判決スヘシ。

之ヲ確定シ難キ場合ハ唯タ賠償ノ義務ヲ宣告シ額ノ判定ヲ普通裁判ニ移スヘシ。

(第二十五條)國務裁判所ノ判決ニ對シテハ上訴ヲ許サス。

(第二十六條)受理スヘキモノト認メタル告訴ノ決議ニ對スル審判ハ議會ノ停會又ハ閉會ノ爲ニ之ヲ停止セス、其ノ衆議院ノ解散ニ於ケルモ亦同シ。

(第二十七條)國務裁判所ニ於ケル大臣ノ訴追ハ違法ノ處爲アリシ時ニ際シ又ハ之ニ次ク開會期中ニ於テ起シ議會カ會計決算書ニ依リ始メテ違法ノ處爲アルヲ知ルニ至リタル場合ハ此ノ決算書ヲ以ヲ檢査スル開會期中ニ於テ起スニ非サレハ之ヲ受理セス。

(第廿八條)起訴ノ期滿免除ハ普通民法ノ規程ニ準ス。

大臣告訴ノ審判ハ期滿免除ヲ中斷ス。

(第二十九條)皇帝ハ起訴シタル議會ノ一院ノ動議アル場合ニ於テノ外有罪ノ宣告ヲ受ケタル大臣ノ爲ニ特赦ノ權ヲ行フコトナシ。

(第三十條)裁判ノ結了ニ至ルマテハ被告ニ於テ辭職スルコトヲ得ス。

大臣ノ既ニ辭職シ或ハ全ク官ヲ退キタルノ事實ハ之ニ對シテ國務裁判所ニ告訴スルコトヲ妨ケス。

(第卅一條)此ノ法律ハ公布ノ日ヨリ効力ヲ有ス。

(以上)

以上數章ニ錄スル所ノ外尚ホ希臘王國ニ於テ千八百七十六年十二月廿二日ヲ以テ發シタル大臣責任法六章六十一條アリテ甚タ完備スト稱スレド紙數ニ限リアルヲ以テ今略ス要スルニ皆一得一失アリ且各國憲法ノ如何ニ依リ必ス異ナラサルヲ得ス讀者既ニ大臣責任ノ制度ニ係ル各國事實ノ通觀ヲ得タレハ次ニ進テ其ノ理義ヲ講明セントス。

第二部　責任ノ學理

第一章　廣義ノ責任

前部ノ發端ニ於テ概シテ大臣ノ責任ト云フ中ニ廣義ト狹義トノ別アリテ、其ノ廣義責任中ニハ後ニ云フ狹義責任ノ外更ニ左ノ四アルヲ述ヘタリ

(一)元首ニ對スル責任
(二)輿論ニ對スル責任
(三)裁判ニ對スル責任
(四)議會ニ對スル責任

而シテ時ニ狹義ノ責任ト稱スルモノハ左ノ二ナルヲ述ヘタリ

(一)國法上ノ責任
(二)政事上ノ責任

サテ以上第一部ニ於テ記述シタル各國ノ事實ニ就テ之ヲ見ルニ、現時一般ノ形勢ハ重キヲ狹義ノ責任ニ置キ、大臣責任ヲ廣義ニ云ヘハ元首ニ對スルモノ、輿論ニ對スルモノ、普通法律ニ對スルモノ、議會ノ質問ニ對スルモノニモ及フトイヘ𪜈此等ニ關シテハ別ニ成文例規ヲ設クルモノ漸ク少ナキニ至レルヲ知ルヘシ。本章ニ於テハ先ツ右四種責任ノ法理ヲ述ヘ次ノ二章ニ於テ狹義責任ノ法理ニ及ハントス。

第一節　元首ニ對スル責任

大臣トイヘ𪜈國家ノ官吏ニシテ元首ノ任命ニ依リ其ノ地位ヲ得ルモノナレハ元首ニ對シテ責任ヲ有スルコト勿論ナリ、唯其ノ所謂責任ハ一方ニ於テ憲法保護ノ爲ニスル國法上ノ關係ヨリ來タル責任ト相同シカラス又他ノ一方ニ於テハ元首ニ對スル社會上ノ關係ヨリ來タル元首ニ對スル責任

責任ト相同シカラサルノミ、故ニ此ノ三者ヲ區別スルコト緊要ナリ。

往昔ニ於ケル元首ト大臣トノ關係ハ多ク社會上ノ元素ヲ包含シタリ、即チ本邦ノ如キモ上古ハ大伴氏、物部氏、蘇我氏ノ如ク社會等序ノ上ニ於テモ天皇ニ次クヘキ大氏ノ氏長ニ於テ大臣大連ト爲リ、降テハ外戚タル藤氏ノ長者常ニ大臣ト爲リタリ、此ノ時ニ當リテ種々門閥上ノ關係ノ公務上ニ混入セシハ言ヲ俟タス。又門閥ニ依ラス主トシテ人才ヲ擇ムノ今日ニ於テモ上世ニ於テ慣例トナレル交際上ノ關係ハ尚ホ存スヘク、純然タル禮節ノ上ヨリ大臣ノ元首ニ對シ盡スヘキ所ノモノ猶ホ多カラントス、然レモ此等ハ立憲政治ニ關シテ謂フ責任制度ノ外ナリトス。

交際上ノ關係ヲ離レ元首モ大臣モ共ニ國家ノ機關ナリトシテ之ヲ論スルモ大臣ハ元首カ專權ヲ以テ任命シテ此ノ名譽ノ地位ニ置キ以テ大權ノ一部ヲ委任スル所ナルカ故ニ道德上ヨリ此ノ信任ヲ空ウセス全力ヲ盡シテ之ニ應スルノ責アリ。是ヲ以テ若シ元首ノ信用ヲ失フ片ハ元首ニ於テ其ノ職ヲ免スルノ權利アル亦爭フ可カサル所ナリ

（ハウケ責任論）

之ニ反シテ大臣ニ於テハ我カ獨立ヲ完ウセンカ爲ニ職ヲ罷メラルルモ生計ヲ失フ無キノ保證ヲ有セサル可カラス。若シ職ヲ罷メラルヽト共ニ生計ヲ失フノ恐アリトセンカ赤心國家ノ利ナリト信スル所アルモ其ノ元首ノ意ニ違フ片ハ則チ强テ主張スルヿヲ得ス、從テ獨立ノ意見ヲ以テ元首ヲ輔弼スルヿヲ得サルベシ。是ヲ以テ巴威里ニ於テハ一旦大臣タリシ者ニ三千「フロリン」ノ終身給ヲ與フルノ制アリ（責任法第一條）瑛地利ニ於テハ千八百六十八年六月二十二日ノ法律ヲ以テ職ヲ退キタル大臣ニシテ年ニ四千「グルデン」以上ノ恩給ヲ受クル者ヲ

除キ自ラ辞シタルト免セラレタルトヲ論セス又在職期ノ長短ニ依ラス四千「グルデン」我カ二千圓余ヲ給スルノ制ヲ立テタリ。

蓋シ大臣ハ元首ヨリ憲法又ハ法律ニ違背セル命令ニ署名ヲ命セラレタルヿ之ヲ拒絶スルノ權利アル「既ニ各國責任法ノ認ムル所ナリ。

我輩曾テ之ヲ博士スタインニ問テ曰、大臣ニシテ其ノ國家ニ不實ナル「判然形跡ニ顯ハル、場合ニハ輿論ノ容レサル所ト爲リテ君主ヨリ其ノ職ヲ免セラル、コト勿論ナルガ、若シ其ノ形跡ニ顯ハレス、形跡上ハ却テ國家ニ忠勤ヲ唱ヘナカラ內心ニ自家ノ利益ノミヲ計リ、亦心國家ノ爲ニ必要ト認ムル所アルモ之ヲ言ヘハ不利ノ一身ニ及ハントスルヲ見テハ則チ言ハス、利アレハ即チ之ヲ言ヒ、以テ世人ノ歡心ヲ得ント計ル者アラハ之ヲ如何スルヤ、則チ語ヲ變ヘテ言ヘハ積極ノ不忠ハ無キモ消極ノ不忠アラハ之ヲ如何スルヤト。先生答テ曰、此ノ如キハ人ノ內心ニ關スル道德上ノ沙汰ナレハ政治ノ機關ヲ以テ之ヲ制スルノ道無ク只タ自己ノ良心ヲシテ其ノ本心ヲ咎責セシムルノ外ニ敢テ處分ノ路無シ。且ツ夫レ大臣カ進テ事ヲ執ルヘキ所ナルニ姑息シテ進マサルハ不忠義ナリト云フモ是レ果シテ如何ノ標準カ有ル、人各、其ノ見ル所ヲ異ニシ、甲ノ必要トスル所モ乙ヨリ之ヲ見レハ必要ニ非ス、人間日常ノ事ニ於テ既ニ然リ、況ンヤ國家ノ事ニ於テヲヤ、凡ソ人タル者ハ多少ノ偏就ヲ免レス、教育經驗ノ異ナルニ從テ習性ヲ異ニシ從テ意見ヲ異コセリ、故ニ一人二人ノ意見ヲ以テ不義ト正義トヲ判定セシムルハ未タ公平ナリトセス、是レ古ノ羅馬ニ行ハレタル檢察ノ制及曾テ日本ニ行ハレシ彈正ノ制ノ弊害アル所以ナリ。故ニ形跡ノ法文ニ照シテ論ス可キ者無キ場合ハ之ヲ本人ノ良心ニ任シ、國家ノ或ル機關ヲシテ處斷セシムルニ如カス、而シテ國家ノ中、一人ノ意見ニシテ大臣ノ

進退ヲ決スルモ不公平ナラサル場合ハ只タ一アルノミ、即チ國家全体ヲ一身ニ代表スル君主ノ意見ヲ以テスル場合是レナリ。但シ國中一般ノ輿論ニ於テ不忠ヲ大臣ニ歸スルモ一ノ有力ナル影響アレト、此ノ時ニ於テ此ノ輿論ニ從ヒ大臣ヲ退クル者モ到底君主ナルヘシ云云。

第二節　輿論ニ對スル責任

就中印行ノ自由充分ナル國家ニ於テハ天下ノ新聞カ大臣ニ關シテ論スル所モ自ラ一大勢力ナレハ法律上ニ於テ之ニ對スル責任ノ條規無シト雖モ亦之ヲ輕忽ニスルハ眞ノ政治家タルノ技倆ニ非サルナリ(ブルンチユリー)。スタイン曰、輿論ハ衆論ト相同シカラス衆人利益ヲ異ニスル者ハ各其ノ意見ヲ異ニスルヿ自然ノ勢ナリ、然レモ分立ハ弱シ、故ニ利益ノ相合スル所ヲ以テ團結シテ其ノ意見ヲ國家ニ立テントスル者是レ黨派ナリ黨派各其ノ主義ヲ異ニス之ヲ衆論ト云フ、未タ輿論ニ非ラス、從テ國家ノ機關ヲ動カスノ力無シ、然ルニ或ル事件ニ關シテハ平生主義ヲ異ニシ氷炭相容レサルノ黨派ニ至ルマテ悉ク一致シテ主張スル所アリ、是レ輿論ナリ、輿論ハ專制國ニ於テ更ニ効力無シト雖モ立憲國ニ於テハ、例ヘハ外交政略ノ如キニ關シテ天下ノ輿論一決スルトキハ大ニ効力アリテ或ハ國會ノ決議ト爲リ或ハ天皇ノ諭示ト成リ以テ大臣ノ進退ニ關係スヘシト。サレハ輿論ハ直ニ輿論トシテ大臣ヲ責問セスト雖、責問ノ機關ヲ動カスノ勢力ト成ルモノト知ルヘキナリ。

第三節　裁判上ニ對スルノ責任

概シテ裁判ニ對スル責任ト云フハ國法上ノ責任ニ對シテ云フモノニシテ尚ホ之ヲ密ニ區分セハ左ノ諸種アルヘシ。

(一)行政裁判上ノ責任

裁判上ニ對スルノ責任

(二)司法裁判上ノ責任

(イ)民事上ノ責任

(ロ)刑事上ノ責任

(一)行政裁判モ大臣ニ對シ之ヲ起スコトアリトイヘ𪜈其ノ狹義ニテ云フ大臣責任ノ告訴ト異ナル所ハ大臣責任ノ告訴ハ國家大体ノ編制ニ背キタル事ニ關スルト行政ノ國家自餘ノ機關ニ對スル正當ノ關係ニハ背カストイヘ𪜈尚ホ格段ナル行政事務ニ係ル法規ニ背キテ一個人ノ權利ヲ害シタルトニ在リ。行政裁判ノ制ハ國ニ依リ大差アリトイヘ𪜈要スルニ之カ爲別ニ裁判所ヲ置キ各省ノ處分ニ因リ權利ヲ害セラレタリトスル者ハ大臣ヲ被告トシテ訴訟ヲ起シ以テ其ノ處分ノ取消ヲ請求シ或ハ其ノ處分ヲ違法ナリトスルノ判決ヲ誤テ損害要償ノ訴ヲ更ニ普通裁判所ニ對シテ起スコトヲ許スモノナレハ是レ亦裁判所ヲシテ行政權ヲ監督セシムルノ一路タルコト明白ナリ。

(二)司法裁判上ノ責任　(イ)或ル國ニ於テハ行政上ノ違法處分ノ爲ニ別ニ裁判所ヲ設ケス普通裁判所ヲシテ之ヲ審理セシム。又假令行政裁判ノ設ケアルモ大臣ノ職權上ニ於ケル違法ノ處爲ハ必スシモ行政裁判ニ屬セス、其ノ民事上ノ關係ニ於テスルモノハ尚ホ民事裁判ニ屬セシム、例ヘハ各省大臣カ一個人一會社ト物品買入又ハ利益保護ノ契約ヲ爲シテ後其ノ條例ニ違反シタル等ノ場合是レナリ、此等ヲ民事上ノ責任トス。

(ロ)次ニ職權ヲ以テ普通刑法ヲ犯シタル場合アリ、例ヘハ職務執行ノ際刑法第百七十一條第百七十四條、第二百七十五條、第二百七十六條、第二百八十四條、第二百八十九條ノ罪ヲ自ラ犯シ又ハ下級官吏ニ命シテ犯サシメタル等ノ場合是レナリ。

刑事上ノ責任ノ場合ノ最モ多キハ賄賂及職權濫用ノ罪即チ職權ヲ以テ私利ヲ營ミタルノ罪是レナリ。此ノ罪ハ元來普通刑法ニ屬スヘキモノニシテ國家ノ編成ニ背キタル罪ト同列ニ置クヘキモノニ非ス、故ニ學者ハ之ヲ以テ大臣責任ノ事件トセサラントスルモノ多シ、然レ𪜈各國現行ノ大臣責任ノ制度ハ尚ホ贓賄ト濫權トヲ以テ國務裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルコト前部ニ載スル所ニ就テ之ヲ見ルヘシ。

又或ル學者ハ却テ之ヲ國務裁判所ノ管轄ニ屬セシムルヲ可トセリ其ノ論旨ノ重ナル者二アリ、曰凡ソ大臣カ官名ヲ以テ爲ス所ノ事ハ悉ク先ツ國務ノタメニ爲ス所ト看做シテ之ヲ審判シ、果シテ反對ノ証據ノ生スルヲ俟テ始メテ之ヲ普通裁判ノ範圍ニ移スヘシト、曰普通裁判ノ法廷ハ公開スルノ原則ナレト此ノ如キ事件ヲ輕々シク公示スルハ國家ノ爲ニ不利ナル者アリト云フ是レナリ。

第四節　議會ニ對スル責任

茲ニ議會ニ對スル責任ト云フハ議會ノ議事ニ列シ、質議ニ答フルノ責任ナリ。多クノ國家ノ憲法ニ於テハ立法會議ニ許スニ大臣ニ出席ヲ請求シ且ツ其ノ質問ニ答ヘンヿヲ請求スルノ權利ヲ以テセリ、我カ帝國憲法ノ如キ又此ノ制ヲ取レリ。此ノ制アル國家ニ於テハ則チ其ノ請求ニ應シテ或ハ議場ニ出席シテ議事ヲ聽聞シ、或ハ自ラ議事ニ加ハリ、或ハ質疑ニ答ヘ、或ハ其ノ決議ノ体裁ヲ以テ爲ス所ノ建議ヲ受理スルノ責任アリ。

サミュレイノ論ニ依レハ（責任論第五頁）是レ大臣タル者ノ甚タ重大ナル義務ノ一ナリ、曰「大臣ノ議會ニ對スル地位ノ特殊ノ旨趣ヨリ之ヲ推スニ、此ノ義務ノ國家生活ノ爲ニ最大關係アル所以ノ者ハ立君代議政体ニ於テ政府ト議會トカ相共ニ其ノ重大ナル國家ノ事業ヲ全ウスルコトヲ得

ルハ唯タ絶ヘス相接シ、相互ノ間會テ有機的ニ影響ヲ及ホシ又影響ヲ受クルコトヲ止メサルニ因レハナリ、然レ𪜈其ノ此ノ如キ旨趣アリ特價アルコトヲ得ルハ法律上ノ責任（上文ノ所謂國法上責任ノ義ナリ）ノ制ノ先ツ備ハレルニ因レリ」ト

大臣出院ニ關シテ一言ス可キハ他無シ議會ニ出頭シテ議事ニ加ハルニ當テモ尙ホ其ノ大臣タルノ資格ヲ備フル者ニシテ議員ニハ非サルカ故ニ尋常議員ニ適用スル所ノ規律懲戒ヲ以テ之ニ加フルヿヲ得サル是レナリ、故ニ若シ議長ニ於テ其ノ演舌ヲ不用ト認ムル等ノヿアラハ只タ議事整頓ノ爲ニ中止ヲ望ム旨ヲ請求スルノ權利アルノミ敢テ之ヲ禁スルノ權無シ。獨乙議會ニ於テ議長ヒスマルクノ演舌ヲ中止セントスルモヒスマルクハ曾テ其ノ意ニ從ハサルナリ。質問ニ關シテハ其ノ十分ノ重要ヲ見サル者及特ニ大臣ヲ煩スノ目的ヲ以テスル者ヲ防カンカ爲ニ書面ヲ以テ爲サシムルヲ各國ノ常例トス。墺國ニ於テハ上院ニ在テハ少ナクモ十人下院ニ在テハ少ナクモ十五人ノ連署ヲ以テ先ツ質問主意書ヲ議長ニ提出スルヿトセリ、然レ𪜈返答ノ期日ニ關シ制限無キカ故ニ近頃之ヲ一定セントスルノ動議ヲ爲ス者アリ。我カ帝國議院法第四十八條ヲ以テ質問ニ三十人以上ノ贊成者アルヲ要ストスルハ獨乙帝國議會ノ法ニ倣フモノナリ、蓋シ獨乙ニ於テ國會ヨリ聯邦議會ニ對シ質問ヲ爲スヿハ總理大臣ニ於テ次ノ會日ニ自ラ出席シ若クハ代理ヲ出席セシメテ果シテ答辨ヲ爲スヤ否ヤ及其ノ答辨ヲ爲スニ於テハ何月何日ヲ以テ之ヲ爲サントスル旨ヲ通達セシム、而シテ答辨ノ日至ルヿハ發問者ニ質問ノ條々ヲ尙詳細ニ陳辨スルヿヲ許セリ、我カ邦ニ於テモ議院法第四十九條ニ國務大臣ハ互ニ答辨ヲ爲シ、又ハ答辨スヘキ期日ヲ定メ若答辨ヲ爲サヽルヿハ其ノ理由

ヲ明示ヘスシトアルカラハ、故無ク遲滯セハ議會ニ於テ催促ノ權利アルヿ勿論ナリ。大臣ニ於テ若シ請求ニ應シテ出席セス或ハ十分ノ理由無クシテ質問ニ答ヘサル片ハ、其ノ後ノ處分如何ト云フニ、此ノ場合ニ於テ元首ニ對シ上奏ヲ爲スノ權ヲ議會ニ與フルモ諸國ニ見エタルノ規程ナリ。又或ル憲法ニ於テハ上奏ヲ爲シテ其ノ効無キヲ見タル上ニ非サレハ大臣告訴ノ手續ニ及フヿヲ得サルノ制ヲ取レリコブルグタゴ千八百五十二年一月ノ根本法第百六十九條ノ規程是レナリ。日本帝國憲法第五十條ニ國務大臣ノ答辨ヲ得又ハ答辨ヲ得サルトキハ質問ノ事件ニ付議員ハ建議ノ動議ヲ爲スヿヲ得トアリテ建議若クハ上奏ト言ハサルヲ見レハ先ツ政府ニ建議シ、其ノ採納セラレサルヲ見テ後始メテ上奏スルヲ順トスルモノヽ如シ。

第二章　政事上ノ責任

本章ニ於テハ狹義責任、即チ眞ニ國法上ニ於テ行政權ノ他ノ諸權ニ對スル關係ヨリ起ル大臣責任ノ第一種タル政事上ノ責任ヲ述ヘントス、是レ責任制度ノ歷史上ニ於テハ最モ舊古ニ屬スルモノナリ。

蓋政府ハ國家ノ編制上政府ニ屬スルノ義務ヲ盡スヘシト云フコト、是レ元來責任制度ノ由テ起ル所ナリ、然ルニ此ノ義務ノ一部ハ憲法法律ノ正條ニ顯ハレタルカ故ニ其ノ正條ニ依リ義務違反ヲ糺正スヘシトイヘ𪜈其ノ他ノ關係ニ至リテハ未タ法章ニ登ラス、或ハ全ク法章ニ登シ難キ性質ノモノナルガ故ニ各國多少憲法法律ノ正條ニ依ラスシテ政府ヲ率制シ以テ其ノ義務ニ違フ無カラシメンコトヲ要ス、是レ法律上ノ責任ノ外別ニ政事上ノ責任ト稱スル關係ノ存スル所以ナリ。故ニ此ノ種ノ責任ハ政府ノ義務職分ニ對スル成文ノ憲法法律ノ未タ備

ハラサル時代ニ於テ最モ盛ニ行ハレ成文國法ノ進歩ト共ニ減少スルモノナリ。サレト近時ニ至リテモ其ノ未タ全ク跡ヲ國法上ヨリ絶タサル所以ノ者ハ行政部ノ職分内ノ或ル點ノ到底之ヲ成文法規ト爲スコト難キニ因ル。政府ニシテ若シ全ク法律ノ執行ノミヲ司リ、法律ノ規程ノミニ準シテ運動スヘキモノナランニハ法律上ノ責任ノ外ニ責任アルヘキ理ナシトイヘ𪜈、凡ソ今日ノ立憲國家ニシテ多少獨立シテ施策スルノ權ヲ行政部ニ與ヘサルナキカ故ニ此ニ政事上ノ責任ナルモノヲ生ス。然レ𪜈此ノ權ニ關スル責任ニ就テハ各國一定ノ法規アルヿ無ク一時ノ形勢ニ任スル所多シ。

政事上ノ責任ニ關シテハ大抵各國ニ於テ議會ヲ以テ大臣ノ義務違反ヲ糺彈スルノ處トセリ、而シテ古來諸國ノ議會カ確乎タル過犯ナキ場合ニ於テ大臣ノ義務違反ヲ糺彈スル爲用ヰタルノ制ニ三アリ、曰(一)逮捕條例、(二)信任投票(三)課税拒絶是レナリ、左ニ之ヲ別論ス。

第一節　逮捕條例

逮捕條例「ビル、オブ、エッテインデル」トハ議會カ大臣ノ處爲ヲ以テ國家ニ有害ナリシトスルモ、確乎タル事實ヲ指シテ處罰ノ根據ト爲ス能ハサル場合ニ於テ既往ニ溯ルノ法律ヲ制定シ以テ之ヲ罪過ニ陷ルヽヲ謂フ、是レ責任制度ノ本源タル英國ニ於テ始メテ行ハレタル所ニシテ、千六百四十四年五月スツラフフォルトヲ斬罪ニ處シタル場合ヲ以テ其ノ最モ著シキモノトス。此ノ制度タル何レノ點ニ於テモ公正ニ背キ、法治國家ノ精神ニ戻ルカ故ニ他ノ各國ハ啻ニ之ヲ摸倣セサルノミナラス、米國ノ如キハ現ニ憲法第一章第九條ニ於テ永ク此ノ制度ヲ立テサルヘキヲ擔保シタリ。法律ハ既往ニ溯ラス、所謂後擬律ハ之ヲ制定スルヲ得スト云フコト今日ハ各國ノ刑法上ノ原則ト爲レルヲ以テ、逮

捕條例ノ制度ハ發達セス、唯タ一ノ汚點ヲ英國ノ舊史ニ止メタルノミ、是レ正シク國法ハ自然ニ發達シ漸ク完美ニ赴ノ一例ナリトス。

第二節　信任投票

信任投票トハ國會カ大凡ソ一般ノ政略ヲ以テ國家ノ目的ニ違ヒ政府ノ義務ニ背クモノナリト認ムルトキハ其ノ一大臣又ハ全內閣ニ信用ヲ置カサル旨ヲ議決スルヲ云フ。大体ノ失政ヲ事由トシテ彈劾スルノ慣例ハ英國ニ於テ始メテ行ハレタリト雖、議院政治ノ行ハル、ニ至リテ以來、大臣ハ常ニ議會多數ノ選出スル所ナルニ因リ、其ノ政治主義ハ即チ議會多數ノ政治主義ニ外ナラス、從テ政事上ノ責任ハ近時英國ニ行ハレサルコト既ニ沿革ノ部ニ於テ之ヲ述ヘタリ。

佛國ニ於テハ千八百七十五年二月廿五日ノ憲法第六條ノ一項ニ曰「大臣ハ議會ニ對シ政府ノ一般政略ニ付キテハ連帶シテ責任ヲ有シ、各己ノ處置ニ付キテハ獨立シテ責任ヲ有ス」トアリテ、政治上ノ責任ハ現ニ憲法ノ認ムル所ナリ、而シテ二種ノ區別アリ、即チ大体ノ政略ニ付キ連帶シテ責ニ任スル者及各省大臣ノ職權內ニ於テ獨立シテ責ニ任スルモノ是レナリ。ルボン氏ノ佛國々法論ニ依ルニ、政事上ノ責任ハ何等ノ事項ニ限ルト云フコト無ク凡ソ大統領ノ處置ニシテ大臣ノ副署シタル者並ニ大臣ノ職權ヲ以テ處シタル各般ノ事件ニ付テ行ハル、而シテ國會ノ兩院合同シテ之ヲ行ヒ、兩院ニ於テ各大臣又ハ其ノ一人ニ對シ信任ヲ置カサル旨ヲ表示スルトキハ大臣ハ其ノ職ヲ退カサルヲ得ス。其ノ之ヲ表示スルノ法ハ種々アリ、或ハ政府ヨリ格段ナル法律案ヲ國家行政ノ爲ニ必須缺ク可カラサルモノトシテ提出シタルノ末、議會ト大臣トノ間ニ爭議起リ議會ニ於テ終ニ信任ヲ票決ニ付スルニ至ルコトアリ、又ハ大臣ノ處置ニ付キ議院ヨリ質義ヲ爲シタルノ末、其ノ

答辨ニ滿足セサルヨリ同シク信任ヲ表決ニ付スルニ至ルコト最モ多シ。理論ニ於テハ此ノ事ニ關スル兩院ノ効力同等ナリトイヘ𪜈實際ニ於テハ一般選擧ヲ以テ成リ從テ一般人民ノ意志ト直接ノ關係ヲ有セリトスル下院ノ信任表決ニ重キヲ置クコト上院ニ比シテ遙ニ大ナリ故ニ俗ニ下院ノ大臣ヲ作リ若ハ毀スノ權「フェール、エデフェール、ド、ミニステル」ト言ヘリ。蓋シ議會カ大臣ノ政事上ノ責任ニ就テ有スル所ノ權利ハ法律上ノ擔保アルニ非ズ、共和國大統領ニ於テ議會多數ノ援助ヲ失ヒタル大臣ヲ免職スヘキ法律上ノ義務ナシ、然レ𪜈議會ノ意志ニシテ確定セル上ハ此ノ結果ヲ促スノ方便ヲ十分ニ有シ、就レ中解散ヲ以テ之ヲ試ミテ國家ノ輿論モ同點ニ傾クコトヲ証シタル場合ニ於テハ必ス職ヲ免セサルヲ得サルノ勢ナリ。其ノ方便ノ最モ有効ナルモノハ指斥セラレタル大臣ノ提出案ヲ悉ク排斥シ、及其ノ要求スル所ノ歳出ヲ悉ク拒絶スル是レナリ。

此ノ如キ信任投票ノ制ニ於テ目的トスル所ノ者ハ他無シ、政府ヲシテ人民多數ノ意志ニ從ヒ政務ヲ行ハシムルニ在リ、是レ主權人民ニ在ルノ主義ヲ以テ組織シタル國家ニ於テハ憲法ニ明文ノ有ルト否トニ拘ラス必ス起ル所ノ結果ナリ、然レ𪜈眞ノ國家主義ニ於テハ、之ヲ以テ國家正當ノ組織トセス、今其ノ然ル所以テ述フルノ前ニ政事上責任ノ第三ノ方便タル租稅拒絶ノ事ヲ述ヘントス。

第三節　課稅拒絶

課稅拒絶又ハ單ニ拒稅權ト言フハ議會カ豫算若ハ稅法ヲ討議スルニ當リ之ヲ否決シ以テ行政ノ爲ニ必要ナル經費ヲ給需スルノ途ヲ塞クヲ云フ、是レ亦間接ニ議會ノ多數ノ意志ヲ以テ政府ヲ壓服スルノ方便ナリ。然レ𪜈此ノ方便ハ當初ハ完全ニ行ハレタレト今日ト成リテハ

憲法上會計ニ關スル條項ノ如何ニ依リ或ハ行ハレ或ハ行フ能ハサルノ國アルコトヲ知ラサル可カラス。

佛國革命ノ亂ニ際シテハ「國家年々ノ歲入及一切ノ歲出ハ當年ノ議會ニ於テ自在ニ承諾シ若ハ拒絕スルノ權利アル所ナリト云フ」ヲ以テ會計ノ原則トシ之ヲ以テ立憲政体ノ無上ノ關鍵トシタリ、而シテ獨乙モ亦理論上ニ於テハ此ノ原則ヲ取リタリ。此ノ原則ニシテ果シテ完全ニ行ハレンニハ、議會ハ何時ニテモ全ク行政ノ活動ヲ停止スルノ權力アリ、然レ𪜈此ノ如キ權力ヲ議會ニ屬セシムルノ正否如何ハ姑ク措テ論セサルモ實際ニ於テ之ヲ完全ニスルハ國家ノ爲頗ル危險ナルヲ以テ各國ノ慣例法律ハ必ス多少ノ制限ヲ設ケタリ、即チ我カ憲法第六十七條及第六十八條ノ類ナリ、然レ𪜈其ノ條項ハ各國異同アリ、左ニ其ノ大要ヲ擧ケントス。

佛國ニ於テハ議會ノ拒稅權今ニ至リ最モ完全ナリ、即チ憲法ノ正條ヨリ推セハ議會ハ每年豫算ノ全部ヲ否決スルノ權ヲ有ス、然レ𪜈實際ニ於テハ豫算ヲ(一)經常豫算(二)臨時支辨豫算(三)特別支辨豫算(四)附屬豫算ノ四ニ分チ、通常一定ノ歲入(即チ官有財產、政府專賣及租稅ヲ以テ通常一定ノ費途ニ當ツルモノハ否決スルコトナシ。グナイスト曰「法律上定マリタル制策ノ爲ニ必要ナル支給ヲ拒絕シタルハ佛國ニ於テトイヘ𪜈未タ曾テ有ラサル所ナリ」ト。

有名ナル白耳義憲法モ亦原則ヲ佛國ニ取リテ法律ニ基クノ租稅トイヘ𪜈年々議會ノ協贊ヲ經サレバ徵收ス可カラスト爲セリ、然ルニ他ノ諸國ハ少ナクモ歲入ノ一部ハ年々ノ議決ヲ要セストセリ左ノ如シ。

ブラウンシュワイヒ憲法第百七十三條豪族會議ハ國家ノ目的ヲ達スル爲ニ必要ナル費額ヲ承認スルノ權利義務ヲ有ス但シ官有地收入ノ剩

餘及其他ノ官有財產ヲ以テ支辨スルコト能ハサルトキニ限ル。殊ニ豪族會議ハ憲法上ヨリ生シタ義務ニ依リ國庫ニ就テ要求スルヲ得ヘキ支出ヲ拒ムコトヲ得ス。

オルデンブルヒ憲法第百八十七條議院ノ承認ヲ受ルニ非サレハ諸稅ノ賦課徵收スルヲ得ス又有効ニ國債及負債ヲ興スヲ得ス。議院ハ聯邦ノ義務及國ノ憲法ニ適スル政務ヲ執行シ殊ニ聯邦ノ法律及ヒ國ノ法律又ハ私法上ノ義務ヨリ生スル支出ノ爲ニ必要ナル現行諸稅ノ徵收ヲ拒ムコトヲ得ス。

アルデンブルヒ憲法第二百三條議會ハ政府ト協同シテ政務上ノ諸費目ヲ議決ス歲入出豫算(通常四ケ年ヲ以テ一會計年度トス)ヲ確定スルニハ政府ト議會トノ協同ヲ要ス此ノ協同ヲ經タル金額ハ之ニ對スル事項及目的ノ消滅セサル間議會ノ承認ナクシテ永ク之ヲ減少スルコトヲ得ス又政府ノ承認ナクシテ永ク之ヲ減少スルコトヲ得ス。

索遜憲法第九十七條ニ曰「議會ハ經常及臨時ノ國用ニ必要ナル金額ノ徵收ヲ議定スルノ義務アリトス之カ爲ニ議會ハ經費ノ必要便宜及多寡ヲ審査シ且ツ此ニ關シ政府ニ對シテ異議ヲ起シ並ニ費額ノ承認支辨ノ方法其ノ他一定ノ人員及物件ニ租稅ヲ賦課スル原則及割合ト其ノ期限及徵收ノ方法トヲ議定スルノ權利ヲ有ス。第百三條ニ曰議會ハ審査ヲ終ヘタル後歲計豫算案ニ關ル意見ヲ國王ニ呈出スヘシ若シ其ノ意見政府ノ要求定額ヲ減少シタルニ係ルトキハ詳細ノ理由ヲ附シ且國家ノ目的ヲ誤ルコト無クシテ節減シ得ヘキ事物及方法ヲ示明スヘシ。第百三條ニ曰、第百條ニ依リ議會ヨリ呈出スル意見及理由ハ政府ニ於テ更ニ熟慮ヲ悉シ國ノ安寧福利ヲ破ラサルトキハ之ヲ參酌セサルヘカラス。政府其ノ意見ヲ採可セサル場合ニ於テ議會ハ政府ノ

報答ニ關シテ再議ヲ開ク議會尙原案ノ承認ヲ拒ムトキハ國王ハ一時ノ費用ニシテ既ニ其ノ目的ヲ達シタルモノヲ除キ國用支辨ノ爲議會閉塲後勅令ヲ發シ更ニ一年間前年ノ租稅ヲ賦課徵收セシム其ノ勅令中ニハ本條ニ基キテ特ニ課稅スル旨ヲ記載スヘシ但シ其ノ勅令ヲ以テ前年ノ租稅ヲ課スルハ一年間ニ止マルニ依リ國王ハ其ノ一年間ノ經過六ケ月前ニ臨時議會ヲ召集スヘシ其ノ他本條ニ關係スル原案ノ否決ハ各院ニ於テ列席議員三分ノ二以上同意スルニ非サレハ効力ナキモノトス。

ハノーフル憲法第九十一條第三項ニ曰、聯邦法又ハ國法又ハ私法ニ基キ政府ノ義務ニ屬スル歲出ハ國會ニ於テ否決スヘカラズ。

サクセン、マイニンケン憲法第八十一條三項聯邦法律上ノ義務履行ニ必要ナル費額ハ之ヲ拒ムコトヲ得ス。

英吉利豫算討議ノ制ハ憲法ノ明分アルニ非ストイヘモ亦最モ善ク國家ノ理勢ニ合ヘル事國法學者ノ常ニ論スル所ナリ歲入ノ七分ノ六ハ年々討議セスシテ法律ニ依リ固定資本ニ繰込ミ歲出ノ三分ノ一ハ此ノ資本ヨリ支出セリ。歲入ノ多分ハ所謂固定資本トシテ年々異動ナク、又其ノ多分ハ法律ニ依リ年々一定ノ費途アリ而シテ殘額ハ所謂「仕方委員」ナル者ニ於テ年々費途ヲ議定セリ。

蓋シ國家カ其ノ憲法法律ニ依テ定マレル事業ノ爲メニ民事上被ル所ノ義務ノ爲ニ要スル費用ハ議會ニ於テ之ヲ拒絕スルノ權ナシト云フノ論ニ至リテハ國法學者中全ク異議ナキ所ナリ。スタイン曰租稅ハ國家存立ノ爲ニ缺ク可カラザル所ニシテ之ヲ缺ケハ國家ノ活動中止シ從テ方法ノ權モ中止スル者ナレバ、大体ヨリ言ヘバ議會ニ於テ租稅ヲ拒絕スルハ議會カ自ラ立法ノ權ヲ擲棄スルト同樣ナリ即チ、自家擅

着ノ所爲ナリ。拒絕ハ國家活動ノ中止ヲ求ムル者ナリトセンカ國家ノ機關ノ一部ニ過キサル議會ニ於テ其ノ全部ヲ變更スルノ權利ナキヤ知ルベキナリト。

佛蘭西白耳義ニ於ケル豫算ト其ノ他ノ諸國ニ於ケル豫算トノ間ニ國法上大ナル區別アルハ他ナシ此ノ二國ニ於テ議會ノ豫算ヲ可否スルハ獨リ豫算表面ノ支出收入ヲ可否スルノミニ非スシテ、又現內閣カ此ノ支出ヲ爲スヲ可否スルモノナルコト是レナリ、故ニ法律ニ基クノ支出トイヘドモ、此ノ第二ノ點ヨリシテ之ヲ否決スルコトヲ得ルナリ。サテ獨乙ニ於テハ如何ト云フニ、千八百四十五年聯合議會ニ於テ憲法ヲ議シタルトキ下院ノ多數及上院ノ少數ハ佛、白ノ主義ヲ寫サントシタリ、而シテ下院ノ少數ト上院ノ多數及政府トハ獨リ支出ノミニ關シテ佛白ニ倣ヒ歲入即チ租稅徵收ニ關シテハ之ニ倣ハサラントシタリ。同年四月六日所謂基本法ナル者ヲ以テ議會ノ豫算ニ關ル權利ヲ確定シ、議會ハ課稅否決ノ權ヲ有セス稅法ニ變更ナキ間ハ年々之ヲ徵收スルモ歲出豫算ニ關シテハ年々法律トシテ之レヲ確定シ議會ニ於テ其ノ法律ヲ可決シ若ハ否決スルノ全權ヲ有スルモノトシタリ、是レ今日ノ普國憲法本源ナリ、而シテ其ノ支出案ヲ否決スルハ支出ヲ支出トシテ之ヲ否決スルノ義ニ非ス、又國家ヲシテ此ノ否決ノ爲ニ其ノ爲スヘキノ支出ヲ爲スノ義務ヲ免レシムルノ義ニ非ス全ク現內閣ヲシテ此ノ支出ヲ爲サヽラシムヘシトノ義ナルコト當時ノ議事筆記ニ照シテ明ナリ。サテ憲法ノ旨趣ハ此ノ如クナリトシテ其ノ實際ハ如何ト云フニ普魯西議會ノ如キハ爾來政府ノ豫算案ヲ否決シ以テ現內閣ヲ退ケントシタルコト既ニ數回ニ及ヘリ、而シテ佛、白ノ間ニ於テ此ノ如キアラハ其ノ結果ハ議會解散若ハ大臣交迭ノ一ニ出テザルヲ得サルヘシ

トイヘモ普魯西ニ於テハ未タ豫算否決ノ爲ニ内閣ノ交迭ヲ來タシタルコト無シ。其ノ故如何ト云フニ豫算成立セサルモ政府ハ常ニ自由ニ支出ヲナシ後ニ至リ解責ヲ請求シ、此ノ解責ノ案ニシテ尚ホ議會ノ拒絶スル所ト爲ルモ之ニ對シ大臣ヲ處分スルノ法律ハ未タ存セサレハナリ。始メ政府ノ豫算ニ依ラスシテ支出ヲ爲スコトヲ禁シタルノ精神ハ此ノ禁ヲ犯シタルモノアルトキ大臣責任法ニ依リ處分セントスルニ在リタリ然ルニ此ノ責任法ノ未タ裁可セラレザルカ爲ニ今日ハ普魯西議會ノ豫算上ヨリ政府ヲ掣肘スルノ權ハ無効ニ屬スルナリ。是ヲ以テ今日豫算全体ヲ否決シ又ハ之ヲ議定セサル實際ノ旨趣ハ現政府ニ對スル政治上ノ示威（ポリチカル、デモンストレーション）タルニ過キス、而シテ之カ爲ニ各款項ヲ修正スルノ權ヲ放棄スルニ至ルカ故ニ却テ甚タ不利ナルモノアルナリ。當時歐洲ニ於テ最モ勢力ヲ有シ特ニ獨乙ニ於テハ既ニ一定ノ學説ト爲レル者ハ英吉利ノ制度ヲ以テ其ノ基本トスルナリ。即チ前述ノ如ク同國ニ於テハ議會ノ勢力最モ强大ナルニ拘ラス歳入中七分ノ六ハ毎年法律ノ効力ニ依リ之ヲ固定資本ニ拂込ミ年々議院ノ決議ヲ假ラスシテ收入スルヿヲ得ルモノト爲シ又歳出中三分ノ一ハ固定資本ノ中ヲ以テ支出シ、議會ノ議決ニ關係セサルモノトス、而シテ議院ノ議決ハ他ノ歳出歳入ノ部分ニシテ自由ニ伸縮增減ヲ許スルモノニ限レリ此ノ英國ノ固定資本ノ方法ト佛國ノ論者モ單ニ國債償却ノ一部分ニ付テノミ之ヲ採用センコトヲ企テタリ、又ミラボー氏モ曾テ國民議會ニ於テ固定資本ノ有益ナルコトヲ主張シテ曰公債ノ償還ニ充ツル租税ノ賦課期ヲ制限スルハ毎年國民ヲシテ倒産セシムルノ權ヲ議會ニ附與シタルニ均シト而シテ獨乙ノ學士輩ハ凡ソ立國ノ生存ヲ保ツニ必要ナル需要ハ總テ皆國債ノ償却ト均シク議會ノ自由ナル存廢ノ決議

ニ任ス可カラサルコトヲ論決セリ。

由是觀之課稅拒絕若ハ豫算否決ヲ以テ大臣政事上ノ責任ヲ有効ニスルハ理論實際ニ於テ漸ク既往ノ事ニ屬セントスルナリ。

第四節　國法學者ノ論說

○モールノ論旨

モールハ千八百三十七年ニ著シタル責任論ノ第百五十頁以下ニ於テ權利ト利益トノ區別ヲ論シ利益ハ一國ニ關スルト一人ニ係ルトヲ問ハズ其ノ有益ヲ分チ大小ヲ計ルノ標準ナリ衝突ノ場合ニ於テ裁斷スル所以ノ者ナリ其ノ之ニ對スル人々ノ見解ハ全ク相反スルコトサヘ有ルモノナレハ以テ責任ノ理由ト爲スヲ得スト言ヘリ而シテ其ノ正當ノ理由トスヘキモノヲ憲法違反ニ限レリ。ボデウスモ同論ナリ。

○ビショップノ論旨

千八百五十九年ニ至リビショップノ著セル責任論ニ於テハ既ニシテ政事上ノ責任ノ制度ハ立憲政体ニ反スル所以ニ就キ精密ナル論說ヲ載セ之ヲ國法ノ域外ニ排除スヘキ所以ノ者ハ主トシテ左ノ二ノ理由ニ因ルト言ヘリ曰裁判スヘキ地位ニ在ル者ノ一已ノ意見ニ任スルコト多キニ過キ公明正大ヲ旨トスル者トイヘモ猶ホ我カ心中ニ信取スル所ヲ離レテ一定ノ標準ヲ得サルニ苦ムヘキコト曰議會多數ノ意見ヲ以テ行政ヲ牽肘シ君主政体ニ於ケル立憲ノ制度ニ相違スルコト是レナリ。就レ中獨乙憲法ハ國民會議ノ時ヨリ政事上ノ責任ヲ認メス代フルニ質問上奏ノ制ヲ以テスルニ一定セリ。

○ブルンチユリノ論旨

ブルンチユリノ論ハ千八百六十年代ニ於テ最モ勢力アリシモノニシテ國家字典幷ニ加藤博士國法汎論ノ原書ニ見エタリ而シテ其ノ本

旨ハ政事上ノ責任ヲ以テ英國ノ特有ニ屬シ國法一般ノモノニ隨テ他國ノ得テ摸擬ス可カラサル所ナリトスルニ在リ、曰、大臣若シ兩院多數ノ望ヲ失フ片ハ國家ノ爲ニ甚タ重害ナリ、何トナレハ形勢此ノ如クナルニ至ル片ハ兩院大臣ノ處分ニ付キ之ヲ協贊スルヿヲ欲セサルカ故ニ假令其ノ方策中公衆ノ爲ニ仁善ナルモノアルモ或ハ障閡セラレテ遂ニ行フ能ハサルニ至レバナリ、故ニ大臣兩院ノ嫌惡ヲ受ケテ遂ニ鎖ス可カラルニ至ル片ハ己ムヲ得ス其ノ職ヲ免スルノ外他術アル無シ、然レ𪜈此ノ事決シテ國法ノ規律タルヿハ非ス、既ニ各國ニ於テ兩院少數ノ左袒ヲ得タル大臣、多數ノ嫌惡ヲモ顧ミス、猶ホ多年ノ間自若トシテ、其ノ職ニ止マリシ例少カラス、英國ニテハ往昔ヨリ國會命令ノ法行ハレテ、國會ノ威權盛强ナルヿ、實ニ驚クニ堪ヘタリ、蓋シ若シ他ノ立憲各國ニ於テ、國會ノ威權、此ノ如ク盛强ニ過ル片ハ殆ト治安ニ害アルヿ必然ナリト雖、英國ニ於テハ此ノ法却テ治安ニ益アリ、故ニ大臣若シ國會ノ爲ニ一敗ヲ取ルヿアレバ、動モスレハ其ノ職ヲ辭スルニ至ルヿ、從來ノ風習トナレリ、然ルニ此ノ國ニ於テスラ、古來二三ノ大臣ハ大イニ下院ノ嫌惡ヲ受ケテ、尙ホ且ツ數年間能ク政柄ヲ握リタリキ例ヘハ賢相ピットノ如キ是レナリ、蓋シ若シ大抵各國ニテ大臣一敗ヲ取ル每ニ、輒チ其ノ職ヲ辭スルノ風習アル片ハ國家ノ爲ニ甚タ不利ナル可シト雖、英國ニ於テハ却テ不利ナラザルハ何ソヤ、英國ニテハ君主及兩院ノ信ヲ兼ネ得タル人傑少カラス、且此ノ國ニテハ國家ノ礎石トナリテ强盛ノ威權ヲ備フル者ハ貴族富人及識者ニシテ貴族ハ父祖ノ品行ヲ墜サンヲ恐レ、富人ハ自己ノ利ヲ失ハンヲ恐レ識者ハ其ノ道ニ背カンヿヲ恐ルヽカ爲ニ、輕舉暴動ヲナシテ、敢テ政府ニ抗拒セント欲スルノ意アラザレバナリ、然ルニ大抵ノ羅馬人種各國、及日耳曼人種各國ノ如キ

ハ未タ英國ノ如ク眞ノ靜寧ヲ得ル能ハスシテ、殊ニ平民ノ權甚タ强大ニ過クルヲ以テ、縱令大臣一旦兩院多數ノ嫉惡ヲ受ルヿアレモ、敢テ之ヲ顧ミス、自若トシテ其ノ職ニ止マルヲ緊要トス夫ノビスマルクノ如キモ數年間普通下院ノ不信用ヲ被リナガラ依然其ノ職ヲ持スルニ非ザリセハ普國ニシテ千八百六十六年ノ實跡ヲ見ルニ至ラシメス、獨乙國家ノ維新事業ハ成ラスシテ止ムベカリシナリト」

○ハウケノ說

國家ノ事業ヲ正當ニ理會セハ獨リ法規ニ違ハサルヲ以テ國家隆盛ノ要件トスヘキノミナラズ又政府ヲシテ國家ノ幸安ニ對シテモ十分ノ注意ヲ施サシメサル可カラズ。是ヲ以テ政府ノ處分ハ常ニ二重ノ判斷ヲ受クヘキモノトス即チ一方ニ於テハ其ノ善ク法律ニ合スルヤ否ノ判斷ヲ受ケ他ノ一方ニ於テ善ク其ノ目的ニ合ヒテ功利アルヤ否ニ付キ判斷ヲ受クヘキモノナリ。サレハ同一ノ處分ニシテ相反對スル二樣ノ判斷ヲ受クルヿ無シトセズ、例ヘハ合法ナルト否トニ關シテハ更ニ非難スヘキナキモ國家ノ點ヨリ見レハ大ニ非難スヘキモノ或ハ有ラン。是ヲ以テ政府ニ對シテ國家ノ利益ヲ保護スルノ爲ニモ憲法上一定セル擔保ノ策ヲ立テント欲スルハ本來正當ナルノ要求ナリトス。夫レ然リ然リトイヘモ、此ノ目的ヲ達センカ爲ニモ大臣訴訟ヲ以テ正當ノ手段トスルヤ否ヤニ至テハ是レ一ノ問題ナリ。

然リ而シテ凡ソ法律ニ依ルノ裁判ハ一人一已ノ意見ノ外ニ一定不動ノ標準ノ客觀(オブジェクチーフ)ニ即チ心意ヲ離レテ確乎タル事物ノ間ニ存センヿヲ要スルヲ思ヒ、一ノ處分ノ果シテ功利アルヤ否ハ唯タ心意中ニ存スル所謂主觀(サブジェクチーフ)ノ推測ニ依リ判決スルノ外ナキヲ思ヒ、又處分ノ違法ナルト否トハ既ニ完結セル目前ノ事實ニ付キ判斷スヘシトイヘモ一ノ政略ノ國家ニ利アルト否ト

ハ不可定知ノ將來ニ於テ始メテ其ノ失跡ヲ見ル可キモノナルヲ思ヘハ大臣訴訟ノ事件ヲ敢行シテ其ノ失政ニ及ホスハ良策ニ非ス、若シ此ニ出ツル片ハ則チ大臣責任ノ制ハ合法行政ノ憲法上ノ擔保策タルヨリ轉シテ黨派政治ノ機具ト爲ルヘシ（中略）

斯ク言フトイヘモ余輩ハ決シテ國家ノ利益ヲ以テ輕卒若ハ不能者ノ爲ニ犧牲ト爲シテ更ニ顧ルニ足ラスト言フモノニ非ス、此ノ點ニ付キ一ノ輕少ナラサル擔保ハ既ニ大臣ノ國君ニ對スル位地ニ存スルナリ。即チ議會ニ對スル責任ノ制（議會カ大臣ニ質問シ其ノ答辯セス或ハ答辨ニ服セサルニ於テ國君ニ上奏シテ大臣ノ交失ヲ促スヲ云フ）ヲ利用シテ十分ノ効力アラシムルヲ以テ失政ニ對シ反對ヲ起ス正當ノ塗ナリトスベク國家生活ニシテ果シテ全ク紊亂セルニ非サルヨリハ必ス實効アラン其ノ果シテ紊乱セルニ當テハ假令告訴スルモ亦其ノ功ヲ見サルヘキナリ」ト（十六頁）

○ボルハックノ說

ボルンハックハ大臣ニ政事上ノ責任アルヿヲ全ク拒絕スル論者ノ一ナリ、即チ曰「是ヲ以テ大臣ハ唯タ國王政務ノ法律ニ合ヘルト否トニ關シテノミ責ニ任セシムヘク、其ノ當否如何ニ關シテハ責ニ任セシメ難シ」ト蓋シ前後ノ文意ヨリ之ヲ推スニ大臣カ違法處分ニ對シ、責ニ任スヘキ所以ノ者ハ他ナシ、違法處分ハ假令國君ノ意ニ出ツルモ憲法上國君ノ國君タル所以ニ出ツルモノニ非ス法理上ヨリ言ヘハ一已人ノ資格ヲ以テ命スル所ナリ、而シテ大臣ハ國君ノ國君トシテノ命令ノミヲ行フノ義務アリテ其ノ一已人トシテノ責ヲ行フコトヲ得ス、然ルニ之ニ副署シテ天下ニ行フニ至テハ全ク大臣ノ職權外ナレハ自ラ其ノ責ニ任セサル可カラサルニ因ル然ラスシテ憲法法律ニ違背セサルモノニ

至リテハ如何ニ國利民福ニ反對スルカ如ク見ユトモ法理上全ク國君ノ國君タル所以ヨリ出ツルモノナレハ其ノ命ニ從フハ大臣ノ義務ナリ、故ニ責問ス可カラスト云フニ在リ、又曰「所謂政事上ノ責任ナル者ハ國會政治ノ原則ニ合フト雖、國王ノ君主政治（普國政体ヲ指ス）ニハ反對セリ、何トナレハ凡ソ法律ニ合ヘル君主ノ政治處分ハ大臣ニ於テ憲法上ヨリ之ニ副署シテ執行スルノ義務アル所ナレハナリ、蓋シ大臣ニ於テ其ノ處分ノ國家ニ不利ナルヲ思ヘハ之ヲ君主ニ奏上シ、納レラレサレハ辭表ヲ奉呈スルコトヲ得可シ、然レトモ其ノ辭職ニシテ公益ニ害アリト認ムルトキハ國王ニ於テ之ヲ拒絶スルノ權アリ（普通州法第十篇第二章第九十五條ニモ其ノ明文アリ）。大臣辭表ヲ呈スルトキハ國君ハ之ヲ聽屈ケサルヲ得スト、ノ論ハ世間普通ニ行ハルヽモ是レ亦議會政治ノ餘波ニシテ君主ヲ以テ大臣任免ノ機械トスルモノニ外ナラス。

且夫レ政事上ノ責任ナルモノハ行政ノ主點ヲ以テ君主ノ權外ニ移シ之ヲ議會ニ屬セシメントスルモノナルヿ議會政治ノ行ハルヽ諸國ノ實例ニ照シテ見ルヘシ。政略ノ利否ニ關シテハ甚タ種々ナル意見ヲ立ツルヿヲ得ヘキヲ以テ若シ其ノ不利ナルニ付キ訴訟スルノ權ヲ議會ニ與フルニ於テハ行政全体ノ方向ヲシテ常ニ議會ノ意見ニ合セシメサルヲ得サルヘシ。然ルトキハ國ヲ支配スルモノハ君主ニ非スシテ議會タルニ至ラン。是ヲ以テ普國憲法ノ第六十一條ニ於テハ大臣ニ政治上ノ責任ヲ認メス、只タ憲法違反、賄賂及國事犯ニ對シテノミ（即チ違法ノ政務ニ對シテノミ）其ノ責ニ任セシムルモノナリ」。

第三章　法律上ノ責任

第一節　政治上責任トノ區別

法律上ノ責任ノ政治上ノ責任ト異ナル所ハ政治上ノ責任ハ漫ニ國家ノ利益ヲ害シタリト云フニ止マリ、一定ノ標準ナキニ反シ、法律上ノ責任ハ一人一已ノ意見ヲ離レ、何人ニモ普通ナル外部ノ標準ニ照シテ過犯ノ事實及其ノ輕重ヲ判定シ得ヘキニ因ル。

實際ニ於テハ二種責任ノ何レニ屬スルヤヲ認定シ難キ場合モアラン、特ニ法律上ニ屬セシメントスル中ニ就テモ例ヘハ憲法違反ノ如キ、其ノ果シテ違反ナルヤ否ヤニ關シテ一定ノ標準ナク判事ノ一已ノ意見ニ依ルノ外ナキモノアラン、然レトモ大体ニ於テハ憲法法律ノ明文ノアル有ルヲ以テ私見ヲ離レ正條ニ照シテ判斷スルコトヲ得ヘシ。

又各國ノ責任制度ヲ見ルニ憲法違反ノ外ニ於テ例ヘハ濫權贓賄ト云フカ如キ刑名ヲ掲ケタリ、而シテ大臣責任ヲ以テ單ニ憲法法律ノ擔保ト做ス上ヨリハ此等ヲ以テ責問ノ事由トスヘキヤ否ハ別ノ問題ニ屬ストイヘトモ、到底事實ノ存スルニ於テハ之ヲ以テ裁判ノ事件ト爲シ得ヘキコト言ヲ俟タス、即チ官權ヲ以テ私利ヲ營ミタルト否トノ如キハ事實ノ問題ニシテ漠然國利ヲ害シタリト云フト同日ノ論ニ非ス。且濫權、贓賄、國事犯ハ既ニ一般刑法ノ禁スル所ナレハ大臣ノ之ヲ犯ス場合ニ限リ別法ニ依ルヲ要セザルニ似タレド、又一方ヨリ見レハ大臣ノ之ヲ犯スハ自餘官吏ノ之ヲ犯スト相異ナル所以ノ者アリ、即チ大臣ハ上官ノ監督ヲ受ケス獨立シテ一國政權ノ使行ヲ司ルモノナレバ、監督ニ依ラス、唯タ本分トシテ此等ノ所犯ヲ避クヘキ地位ニ在ルモノナリ、故ニ諸國ニ於テ之ヲ別種ノ犯罪トスルハ多少理由アルコトトス。

第二節　法律上責任ノ法理

凡ソ責問ノ次第ハ何ノ故ニ責問スルヤニ依リ必ス相異ナルヘキモノトス、即チ民事上ノ責問ハ刑事上ノ責問ト手續ヲ異ニシ、刑事上ノ責問ハ懲戒上ノ責問ト手續ヲ異ニスルガ如シ。故ニ法律ノ正條ニ照シテ大臣ヲ責問スルノ制ヲ立ツルニ於テ第一ニ起ル所ノ問題ハ其ノ責問スヘキ所以ノ者ヲ究定スルニ在リ。

大体ヨリ論スレハ大臣ヲ責問スルハ行政權ヲ以テ憲法々律ヲ破ルコトヲ防止センカ爲ニ其ノ之ヲ破リタル者ヲ處分スルモノナリ、夫レ然リ、然リトイヘ𪜈此ノ所爲ヲ以テ國家ニ對スルノ罪惡ト看做スカ、職務執行上ノ過失ト看做スカ、又ハ罪惡トモ過失トモ看做サスシテ其ノ所爲ノタメニ破ラレタル權利關係（憲法法律ニ依リ定マレル國家ノ關係）ヲ補修スルニ止マルカハ是レ一ノ問題ナリトス。

此ノ點ニ就キ各國ノ成法及學理ハ概シテ三種ニ分レタリ、左ノ如シ。

（一）大臣訴訟ヲ中裁事件ト看做スノ制
（二）大臣訴訟ヲ懲戒事件ト看做スノ制
（三）大臣訴訟ヲ刑法事件ト看做スノ制

左ニ之ヲ別論セン

（一）中裁事件トハ憲法法律ノ解釋上ヨリ議會ノ見解又ハ大臣ノ見解ノ正否ヲ判斷スルニ止マリテ、誤解ニ基ク所爲ノ處分ニ及ハサルモノヲ云フ。各國中此ノ制ヲ取ルモノ左ノ如シ。

ブロンシワイヒ州令第百十條二項ニ曰「此ノ判決ハ被告ニ於テ果シテ目下ノ事件ニ適應スル國法ノ規程ニ違反シタルノ罪アリヤ否ノ問題ニ止マリ、此ノ違反ニ附隨スル普通處犯アルトキハ其ノ處犯及之ヨリ生スル賠償ノ義務ハ之ヲ普通裁判所ノ管轄ニ移ス」ト又索遜王國憲法第百五十三ハ前ニモ譯出シタルカ、茲ニ再記センニ曰「憲法ハ

格段ナル點ノ解釋ニ就キ疑義ヲ生シ議會及政府ノ同意ヲ以テ之ヲ決定シ難キ場合ハ議會幷ニ政府ニ於テ之ヲ國務裁判所ノ裁決ニ付スルコトヲ得。此ノ事件ノ爲ニ双方ヨリ書面ヲ以テ其ノ意見ヲ國務裁判所ニ提出シ、又互ニ他ノ一方ニ送付シ、第二ノ書面ヲ以テ答辨ヲ提出シ及互ニ他ノ一方ニ送致スヘシ。表決ニ於テ可否同數ナルトキハ裁判長ノ決スル所ニ依ル。國務裁判所ノ爲セル判決ハ之ヲ有効ノ解釋ト看做シ遵由ノ義務アルモノトス。

又大体ニ於テ此ノ制ヲ採リ多少他ノ制ヲ混入シタルモノヲオルデンブルグ(根本法、第二百〇五條及第二百〇九條)アルテンブルグ(第二百六十六條)及コブルグ、ゴタ(第百十五條、第百七十二條)トス。

蓋シ大臣訴訟ヲ裁判センニハ先ツ其ノ所爲ノ憲法法律ニ違反スルト否トヲ判定セサルヲ得ス、而シテ其ノ判決ハ將來ニ向テ憲法解釋ノ効力ヲ有スルノミナラス、上顯ノ諸國ニ於テハ同シ裁判所ヲシテ政府ト議會トノ憲法解釋上ノ爭議ヲ審議セシムルノ處トセリ。然レモ單ニ解釋上ノ判斷ヲ爲スノミニテハ大臣責任ノ目的ヲ達スルニ足ラスト云フコト一般ノ論ニシテ索遜、ブロウンシワイヒニ於テスラモ純然タル中裁ニ止メスシテ免職宣告ノ權ヲ國務裁判所ニ屬セシメ、且尚ホ罰スヘキノ罪跡アレハ之ヲ普通裁判所ニ移スコトヽセリ。其ノ足ラストスル所以ノ者ハ意義明白ニシテ解釋上疑ヲ存セサル條項ニ違反シタル場合、及解釋上ノ疑ヲ先ツ決セスシテ故意ニ爲シタル憲法違反ヲ制スルノ効力ナキニ因ル。凡ソ法章ノ國家人民ニ重要ナルモノ憲法ノ如キハアラス、然ルヲ故意ニ之ヲ犯スヲ以テ咎ムヘキノ處爲トセサルハ公平ニ非サルコト明白ナリ。

(二)大臣訴訟ヲ懲戒裁判ノ一種ト看做シ、其ノ審判ノ手續ハ官吏懲戒ス

手續ニ倣フヘシトノ說ヲ創メテ唱ヘタルハサミユレイナリ、而シテ近時ノ大家ニテハサルウエイ及シユルチエ之ニ左袒シタリ。サミユレイ氏ハ責任ノ法律上ノ性質ト題スル一章ニ於テ大臣告訴事件ハ刑事ト其ノ性質ヲ異ニスルノ諸點ヲ枚擧シ憲法違反ノ事ハ未遂ト既遂トヲ區別シ難ク、主謀共犯ヲ區別シ難ク、憲法違反ノ各種ノ場合ヲ列擧シテ之ニ一定ノ罰ヲ科シ難ク、其ノ他凡ソ刑事ニ附屬スル性質ハ悉ク缺ケタルヲ理由トシ、又假令憲法違反ノ處分タリトモ之ニ因リ國家ヲ利シタルトキハ責問ヲ解クカ如キハ刑事ニ於テ有ル可カラサルコトタルヲ理由トシテ大臣訴訟ハ刑事ニ非ス、懲戒事件ナリ、即チ其ノ目的ハ罪惡ヲ罰スルニ在ルニ非スシテ官吏ヲシテ能ク其ノ職分ヲ盡サシムルニ在リト言ヘリ。此、主義ハ米國憲法ノ取ル所ニシテ其ノ他各國ノ法制中ニ責問ノ結果ヲ免職又ハ任官禁止ノミニ止ムルモノハ多ク此ノ主義ヲ取レリ、ボルンハックヽ曰獨乙諸邦ノ制度ハ懲戒主義ト刑罰主義トノ間ニ躊躇セリト。然レモゲルベル、ハウチ等ノ學者ハ此ノ說ヲ駁シテ取ラス、其ノ故ハ懲戒トハ上官ノ下官ニ對シテ行フ所ノ秩序上ノ罰ナルモ、大臣ニ上官アラス、君主ヲ上官トスルハ君主ヲ無責任ノ地位ニ置ク所以ニ反シ之ヲシテ懲戒ヲ誤ラサルノ責ニ任セシムルニ至ルヘク、又議會ヲシテ懲戒者タラシムルハ行政權ノ獨立ニ違ヘハナリ。且、故意ヲ以テ憲法ノ條項ニ戾リテ或ハ召集スヘキ議會ヲ召集セス、或ハ法ニ依ラス課稅スル如キ重大ノ事件ニ至リテハ之ヲ單純ナル懲戒事件ト看做スコト事ノ性質ニ於テ穩當ナラサルハ各人ノ感スル所ナリ。之ヲ要スルニ責任事件ハ懲戒ノ性質ニ出スヘキモノ全ク無キニ非ストイヘモ、大体ニ於テハ之ヲ一種特別ノモノト爲サヽルヲ得サルナリ。

(三)大凡訴訟ヲ以テ刑事ノ一種ト看做スノ論ハ最モ廣ク行ハルヽモノニシテモール、ツアハリヤ、ヘルド、ヨーン、ビシヨフ、ジツテルマイエル、ツオエツプル、ハウケ皆之ニ同意セリ、又各國ノ成法中ニ於テモ此ノ見解ヲ取ルモノ最モ多ク、墺國憲法委員ノ報告ニ於テハ之ヲ明言セリ。ハウケニ依ルニ刑法ニ二種ノ元素アリ、即チ行爲ノ或ル種類ニ屬スルモノハ本來ノ性質ニ於テ惡意ヨリ出ツルカ故ニ社會ノ爲ニ其ノ惡意ヲ罰スルモノト行爲ノ本來ノ性質如何ニ拘ラス、社會國家ノ爲ニ不利有害ナルカ故ニ法律ヲ以テ之ヲ指定シテ特ニ罰スヘシト爲スモノト是レナリ。詐僞偷盗ノ如キハ本來不良ノ行爲タルカ故ニ罰スルモノナリ、治安妨害朝憲紊亂ハ法律ノ指示ヲ以テ殊サラ罪過ト爲ス所ナリ。不良行爲ヲ罰スルハ其ノ刑重ク、社會國家ニ對スル不利ヲ罰スルハ其ノ罪輕シ、即チ憲法違反ハ第二種ノ罪過ナリ、而シテ若明白ナル惡意ノ形跡ノ之ニ附隨スルヲ見ハ、即チ普通ノ刑事裁判ニ付スルヲ正當トスト。

之ヲ要スルニ大臣責任ヲ純然タル懲戒事件ト見ルモ純然タル刑事ト見ルモ共ニ正當ノ見解ニ非ス、是レ一種特別ノ制作ニシテ其ノ目的ノミ一定シ、之ヲ達スルノ方法ニ至リテハ各國ノ歷史ト現實ノ形勢トニ因ル所多ク、英國ニ於テハ初メ之ヲ刑事ノ最モ重キモノトシタルヨリ、合衆國憲法ニ於テ異例ヲ示シテ以來、刑事ハ則チ刑事ナルモ普通刑事ニ非ス、公法上ノ刑事トシテ公法上ノ處分即チ免職及任官權ノ剝奪ニ止マリ、常犯ハ之ヲ普通裁判ニ移スノ方向ニ進ムモノナリ。

第三節　ボルンハツクノ新說

伯林ニボルンハツクナル國法學者アリ、グナイストノ門人ニシテ現今ニ至リ其ノ名頓ニ著ハル、一昨年ヲ以テ世ニ公ニスル所ノ普國々法論ニ

大臣責任ニ關スル一新論說ヲ載ス、其ノ政事上ノ責任ニ關スルモノハ既ニ前ニ譯出セリ而シテ又法律上ノ責任ノ國法上ノ性質ヲ論究スル甚タ詳細ナレハ左ニ其ノ大要ヲ譯出セン。

「元首ハ國家ト其ノ體ヲ一ニスルモノニシテ、其ノ意志ハ即チ國家ノ意志ナリ、然レ𪜈此ノ意志ヲ表白スルハ必ス憲法上ニ於テ定マレル合法ノ形式ヲ以テセサル可カラス、此ノ憲法上ノ形式ハ國家ノ意志ヲ表白スルニ於テ甚タ緊要ニシテ若之ニ依ラサル𪜈ハ其ノ意志ハ曾テ効力ヲ得ルコト無シ、即チ元首ニシテ若此ノ形式ニ依ラサルトキハ其ノ處爲ヤ既ニ元首ノ處爲ニ非ス、唯一私人ノ處爲ナリ、即チ其ノ國家ト體ヲ一ニセル元首トシテノ意志ハ全ク表白ニ至ラサルナリ、斯ク此ノ形式ヲ重スルノ目的ハ國法タルヘキモノヲ純粹ノ人間ニ外ナラサル元首ノ一已ノ意見ヨリ區別シテ其ノ合法ノ發達進榮ヲ期スルニ在リ（中略）此ノ形式ハ大臣ヲシテ元首ノ統治上ノ處爲ニ副署セシムル是レナリ、而シテ副署ノ法律上ノ結果ハ其ノ大臣ニ於テ責任ヲ取ルニ在リ（中略）。

「國王ハ不正ヲ爲ス能ハス」ト云フ英法ノ原則ハ之ヲ今日ノ普國國法上ヨリ見レハ稍異ナル解釋ニ依ラサルヲ得ス、抑國王ハ一人ニシテ二人ノ性質ヲ合スルモノナリ、曰國法上ノ資格曰私法上ノ資格是レナリ、其ノ國法上ノ資格ニ於テハ國王（即チ元首）ハ國家ト同一ナリ、國王ガ國法上ニ定メラレタル形式ニ依リ爲セル意志ノ表白ハ國家ノ意志表白ナリ、然ルニ國家ハ一切正義ノ本源ナレバ德義上不正ヲ爲スコトアリ𪜈、法理上不正ヲ爲スヘキ理ナシ、而シテ國法上ノ所謂不正ハ唯タ法理上ノ不正ヲ指スノミ、即チ國家ノ表意ハ法律上必ス正ニシテ不正ナルヲ得ス、故ニ國法上ニ於テ國王ハ不正ヲ爲ス能ハスト云

フハ假定ニ非スシテ爭フ可カラサル法律上ノ事實ナリ、國家及其ノ代表者タル國王ハ事實ニ於テ不正ヲ爲ス能ハサルノ地位ニ在リ、何トナレハ國家ノ決定スル所ハ即チ是レ正義タレハナリ中略。

然ルニ國王ノ表意ニシテ果シテ法律上ノ正義ニ合センニハ當ニ大臣ノ副署ヲ要スルノミナラス又其ノ一種ノ處爲ニ關シ法律上依ル可キノ規程ニ依ラサル可カラス、若之ニ依ラスシテ其ノ事件ニ關スル法律上ノ制限ヲ破ルコトアラハ其ノ處爲ハ大臣ノ副署アルニモ拘ラス、違法ノ處爲タルニ至レリ、即チ此ニ於テモ國王ハ國王ノ資格ヲ以テ發令スルニ非スシテ一私人トシテ發令セルモノナリ、然ルニ大臣ハ唯タ國法上ノ資格ニ於ケル國王ニ對シ順從ノ義務アルノミ、其ノ違法ノ發令ニ副署セルハ是レ國王ノ國王トシテノ命令ニ順從シタルモノニ非スシテ一私人ノ違法ノ處爲ニ加担シタルモノナリ、

而シテ此ノ處爲ニ副署シテ之ヲ國家ニ行ヒ又ハ行ハントシタルハ、一ニ大臣ノ過犯ナレハ彼レ即チ其ノ責ニ任セサルヲ得サルナリ」ト。

今此ノ說ヲ約言セハ元首ハ憲法ノ條規ニ依リ統治權ヲ行フ場合ニ於テノミ國法上眞ニ元首タル資格ヲ以テ處爲スルモノナレハ、若憲法ノ條規ニ依ラス或ハ之ニ違戻セルノ發令アレハ是レ元首ノ發令ニ非ス、シテ一私人ノ發令ナリ、即チ國家ノ上ニ行フ可カラサルモノナリ、然ルニ之ニ副署シテ國家ノ上ニ行フニ至リテハ副署シタル者ニ於テ其ノ權力ヲ誤用シタルノ責ニ任セサル可カラスト云フニ在リ、是レ明確ノ論ナリトス。

第三部　大臣責任ノ訴訟法規

第一章　責任訴訟ノ被告

大臣責任ヲ以テ果シテ裁判上ノ事件タリ得可キモノナリトシテ第一ニ究定スヘキハ其ノ被告タル地位ニ立ツ者ハ誰ゾ、是レ果シテ本官大臣ノミニ止マルヘキヤ、將タ兼官及代理ニモ及フヘキヤト云フ事幷ニ一旦大臣タリシ者ハ退官ノ後モ在職中ノ事件ニ對シ責ニ任スヘキヤト云フ事是レナリ。

抑々大臣ナル字ノ意義ハ元首ノ補弼ト云フニ在ルヲ以テ責任ノ及フ所ハ元來ハ總理大臣ト各省大臣トニ止マルヘキモノトス。總理大臣ハ往時各國ニ在リシ無任所大臣（ミニストル、ヴヌ、ポルトフヲイユ）ノ後ニシテ内閣ノ統一ヲ計ルヲ務トスル者ナリ。各省大臣ハ一方ニ於テ政府一部ノ事務ヲ專任セラレ他ノ一方ニ於テ政府全部ノ一員タルカ故ニ其ノ責任ハ二重ナリトス即チ全体ノ政略ニ對スル責任及一省ノ事務ニ對スル責仕是レナリ。

責任ノ連帶タルヘキト否トハ事務ノ種類ノミニ依ルニ非ス、平生一定ノ規約ニ依ルニ非ス、多ク時勢ニ依ルモノトス。然レモ責任訴訟ニ關シテハ副署シタル一大臣又ハ數大臣ニ於テ正面ニ被告ノ地位ニ立ツヘキモノト見テ可ナリ。

又本官ノ大臣ニ非サル官吏ニ關シテハ其ノ大臣ニ代リ處分スル所ニ就テモ違法ノ責任ナシトスル片ハ、大臣ニ於テ違法ニ渉ルノ恐レアル場合ハ之ヲ他ノ官吏ニ兼行セシメテ其ノ責任ヲ逃レントスルノ弊アルカ爲ニ墺國ニ於テハ大臣責任法ノ第四條ヲ以テ「凡ソ獨立シテ一省ノ事務ヲ統理スルノ任ニ在ル官吏ハ責任ニ關シ之ヲ大臣同樣ニ扱フトノ旨ヲ確定シ巴威里ニ於テハ責任法第六條ニ於テ「各省大臣及臨時」

一省ノ統理ニ當リタル者」ト云ヒ其ノ他各國ノ制度ニ於テ「大臣又ハ大臣同樣ノ地位ニ在ル者」ト云ヒ又ハ「大臣及一部ノ長官」ト云フカ如キ語法ヲ取レリ。

又一旦責問セラルヘキ地位ニ立至リタル大臣(及大臣同格ノ他ノ官吏)ハ假令其ノ官職ヲ辭スル𪜈責問ノ結果ヲ免ルヽヿヲ得ストスルハ獨乙ノ諸州ニ見エタル規程ナリ(ヘスセン公國千八百二十一年法律第二條バイエルン千八百四十八年六月四日法律第八條索遜王國憲法第百五十一條等)。墺太利責任法第二十條ノ二項ニ曰「大臣ノ既ニ辭職シ或ハ全ク官ヲ退キタルノ事實ハ之ニ對シテ國務裁判所ニ起訴スルヿヲ妨ケズト」。若此ノ如キ規程無キ𪜈ハ會國務裁判所ニ於テ責任ノ結果トシテ終身公務ニ就クノ權ヲ剝奪セントスルモ、豫メ職ヲ辭シテ此ノ災厄ヲ避クルヿヲ得ルカ爲ニ折角ノ責問モ書餅ニ屬スルナリ。即チ敗衍シテ之ヲ言ヘハ一旦責任ノ原則ヲ立ツル以上ハ退養シ或ハ休職非職ノ地位ニ在リ、或ハ他職ニ轉シ或ハ全ク官職ヲ辭シタル大臣トイヘ𪜈其ノ在職ノ時ニ於ケル處分ニ對シ責ニ任セサル可カラズ。

蓋シ獨乙ノ或ル諸州ニ於テハ更ニ國會ノ告訴權ヲ敷衍シテ或ハ高等ノ諸官ニ及フモノトシ或ハ官吏全体ニ及フモノトセリ(但シ其ノ官吏ニ對スル國務裁判上ノ告訴ハ尋常請願手續ノ効力ヲ見サル場合ニ限ル)。

此ノ制ヲ取ルノ諸國ヲ言ヘハサクセンマイニンゲン憲法第八十八條ニ「議會ハ憲法違反、職權濫用、不忠ニ關シ國家ノ官吏ニ對シ正式ノ告訴ヲ起スコトヲ得、但高等官吏ニ在テハ先ツ其ノ省ニ對シ訴願ヲ提起シ、訴願無効ナルノ後告訴ニ及フヘシ」ト云ヒ、ブラウンシワイビ州法第百〇八條第二項、ヘスセン公國憲法第百〇九條、コブルク、ゴタ根本法第百三十二條第百六十九條ニモ同樣ノ規程アリ。之ニ反シテ索遜王國(憲

法第百十條末項)ハ大臣及其ノ代理者ノ外ニ及ホサヽルノ制ヲ取レリ。又墺太利ニ於テハ大臣又ハ大臣同樣ノ地位ニ於テ一省ノ行政ヲ監督スル官吏ニ對シテノ外ハ國會ノ告訴スルヲ許サス、自餘ノ官吏ハ皆只タ之ヲ監督スル上給ノ官吏ニ對シ其ノ責ニ任セシムルノ制ヲ取レリ。即チ行政權ニ關スル千八百六十七年十二月廿一日根本法第十二條ニ一切ノ官吏ハ其ノ職權ヲ行フニ當リ國ノ根本法幷國及諸州ノ法律ヲ遵奉スルノ責ニ任スヘキヲ規定シ、又千八百六十八年五月十九日ノ法律第八條ヲ以テ州ノ行政長官ハ自己幷ニ其ノ部下ノ行政事務ニ關シ自ラ其ノ責ニ任スヘキヲ規定スト雖、是レ皆其ノ此等ノ官吏ヲ懲戒スルノ權ヲ有スル上等官廳ニ對スル責問ヲ云フモノナル「行政權ニ關スル根本法第十二條第二項ニ依テ明ナリ。サレハ上官ニ於テ加フ可キノ懲戒ヲ加ヘサル場合ニ於テ始メテ國會ハ該當ノ大臣ニ對シ國務上ノ告訴ヲ起スヿヲ得ヘキナリ。

又國務上ノ裁判ノ結果ヲ大臣ト共謀シテ不當ヲ爲シタル他ノ一個人ノ上ニ及ホスモ時ニ他國ノ法律ニ見ル所ナリト雖(オルデンブルグ根本法第二百〇二條)普通ノ制ハ國務裁判所カ裁判スルノ權ヲ有スル所ハ只タ大臣又ハ曾テ大臣タリシ者及大臣同格ノ官吏ノミニ限レリ、而シテ共謀者ノ如キハ只タ一般刑法ヲ以テ之ヲ罰スルヲ正當トスルナリ、(ハウク)

次ニ國會ハ責任ノ範圍ニ入ルヤ否ヤト云フニ至リテハ、夫ノ解散ヲ以テ責罰ノ一種ト看做スハ格別ナレド、其ノ外ニ一ノ團体トシテ他ヨリ責問ヲ受クルノ數ヲ生セズ、唯タ其ノ格段ナル一個ノ議員ヲ責問スルノ場合アルヘキノミ。サテ一個ノ議員カ犯スヘキ罪ハ又之ヲ國務上ノ犯罰ト刑法上ノ犯罪トニ區別スヘシト雖國務上ノ罪ハ行政ニ與ル

者ノ外ハ犯ス能ハサル所ナルヲ以テ國會ノ議員トシテ之ヲ犯スニ由シ無ク、又刑法上ノ責任ノ如キモ國會議員ノ資格ヲ以テ犯ス者ハ言論ニ關スル過犯ノ外無シ、而シテ議場ノ言論ハ自由ナリト云フヿ憲法ノ許ス所ナルカ故ニ其ノ結果ハ議場整頓ノ爲ニ設クル議事規則ニ對シテノ外全ク責任ヲ有セスト言ハサルヲ得サルナリ。

第二章　責任訴訟ノ事件

大臣ヲシテ責ニ任セシムヘキノ事件ハ一種ニシテ足ラスト雖其ノ法文ニ明言スヿヲ得可キ者ハ憲法及法律違犯ニ在ルヿ言ヲ俟タス。蓋シ憲法違犯ト云フヿニ關シテ二樣ノ意義アリ。曰形式上ノ意義曰實体上ノ意義是レナリ。形式上ヨリ之ヲ言ヘハ憲法トハ只タ憲法ノ明文ヲ指スノミ即チ「コンスチチューション」「フェルファッスング」「グルンドゲセッツ」等ノ名稱ヲ以テ公布セラレタルモノ是レナリ。然ルニ實体上ヨリ之ヲ見ルトキハ英國ノ如ク憲法ヲ有セサル國ニ在テモ只タ其ノ形式ヲ有セサルノミ實体ハ必ス存スヘキ理ナレハ他ノ國ニ於テモ形式上ノ憲法ノ外ニ猶ホ實体上ノ憲法ト指ス可キ者存スルヿ非スヤト云フヿ一ノ問題ト成レリ。モールハ大臣責任論第四百八十二項ニ於テ憲法ト云フ中ニハ國家ノ根本ノ性質ヲ確定シ主治者ト被治者トノ關係ヲ

劃明シ此等ノ關係ヲ實際ニ顯シ來タルノ手續ヲ枚擧スル一切ノ規程ヲ含ムト曰ヘリ、而シテ又左ノ四種ノ事目ヲ擧ケテ實体上憲法ト曰フニ屬ス可キモノトセリ。

(一)國家ノ基本及目的ヲ定ムル者

(二)國家ノ權力及此ノ權力ヲ掌握スル者ニ於テ第一項ノ基本及目的ヲ實施スルニ必要ナリトシテ有スル所ノ權利

(三)國家ノ臣民並ニ國民會議ニ與ヘラレタル權利

(四)憲法ニ規定シタル關係ヲ保持スル爲ニ設ケタル官廳ノ職權(例ヘハ國事裁判所外國ニ對シ主權ヲ保チ條約ヲ結フヿヲ掌ル官廳等)。

モールノ意見ノ正否ハ暫ク措テ問ハザルモ憲法ノ明文外ニ於テ猶ホ之ヲ犯スヤハ恰モ其ノ明文ニ見エタルモノヲ犯シタルト同樣ニ重大ナル結果ヲ生スヘキ規程ノ存スルハ各國免レサル所トス。何トナレハ之ヲ憲法ノ明文ニ載スルトハ必スシモ事ノ輕重ニ因ルニ非ス重大ハ即チ重大ナリト雖其ノ事猶ホ試驗中ニ屬スルヲ以テ他日多少ノ變更ヲ必要トスルニ臨ミ不便ヲ避ケンカ爲ニ業ト單行法律ヲ以テ發布スルモノ無シトセス例ヘハ我邦ノ議院法裁判所構成法ノ如キ是レナリ。是等ハ形式上ヨリ言ヘハ法律ナリト雖實体上ヨリ言ヘハ憲法ノ一部ナルヲ以テ憲法違犯ト云フ中ニ此等ニ對スル違犯ヲモ含蓄セシムルヲ正當トス、故ニ單ニ憲法違反ト曰ズシテ憲法及法律違反ト云フノ却テ正當ナルヲ知ルナリ。

憲法違反ニ關シ猶ホ一言スヘキハ全体ノ違反ヲ指スヤ將タ又其ノ一部ノ違反ヲモ指スヤト云フノ問題是レナリ。大臣責任ノ目的ハ憲法ノ全カランヿヲ保スルニ在リト雖其ノ全体ハ其ノ各部ニ依テ立ツモノナルヲ以テ全部ノ違反ノミニ限ルハ不當ナリトス蓋シ其ノ一部ニ

違反スレハ爲ニ其ノ全部ノ關係ハ全キヲ得サルナリ。又憲法違反ノ行爲ノ中ニ輕重ノ區別ヲ立テント云フモ理論上幷ニ實際上ニ於テ取リ難キ論トス、何トナレハ格段ナル場合ニ就テ其ノ輕重ヲ辨別スルハ甚タ難キヿタルノミナラズ均シク憲法ノ一部タル以上ハ何レモ同樣ニ重大ナルモノトスルノ外無ケレバナリ、モール之ヲ論シテ曰政府ノ憲法違反ノ處分ハ其ノ事件ノイカニ小細ナル者トイヘトモ係ル所既ニ重大ナリ、何トナレハ小細ナル者ノ安全ナル境界ニ於テ始メテ重大ナル者ハ安全ナレバナリ、一個々々ノ部分トイヘモ轉次違反スルトキハ遂ニ全体ニ及フコトヲ得ヘシ、而シテ一部々々ヨリ違反シテ全体ニ及ホスハ一舉シテ全体ニ違反スルヨリモ容易ナレバ是レ最モ警戒スベキ所ナリトスト。

猶ホ一ノ問題ハ憲法違反ト認ム可キ場合ヲ法律ヲ以テ歴記センカ或ハ一般概括的ニ、違反ト云フヲ以テ足レリトスルヤトノ問題是レナリ蓋シ憲法違反ヲ裁判スル裁判所ノ性質ヨリ言ヘハ違反ノ所爲ヲ豫メ指定シ置クニ如カスト雖亦憲法ニ違反スル所以ヲ前以テ列舉スルハ到底難ク且ツ列舉シタル違反ノ外ハ罰スル限リニ非ストスルノ誤解ヲ生スルノ恐アルヨリ言ヘハ却テ反對ノ意見ヲ取ラサルヲ得ス。既ニ事件ノ起リタル場合ニ於テ其ノ憲法ニ違反スルヤ否ヤヲ審定スルハ論理上易キコトナリト雖憲法違反ノ關係ヲ生セントスル一切ノ場合ヲ豫メ枚舉スルハ爲シ得ヘキ所ニ非ス。ツッフハリヤ等ノ論者ハ苟モ法律ニ罪名ヲ掲ケタル者ニ非サルヨリハ之ヲ處罰スル「法治國家ノ主義ニ於テ容レサル所ナリト言ヘト、モールハ十分ニ此ノ論ヲ反駁シタリ、即チ曰憲法違反ニ於テ罪狀ハ固ヨリ漠然ナレトモ其ノ漠然ナルニ從ヒ之ニ對スル處分モ亦漠然タル事ヲ考フヘシ、唯大体ノ處分ヲ

指定スルノミ其ノ範圍内ニ於テ罪ノ輕重ニ從ヒ自在ニ斟酌スルノ餘地ヲ殘スヿ責任法ノ如クナルハ他ノ刑律ニ於テ決シテ其ノ類ヲ見サル所ナリト。

蓋シ責任ノ事件タルヘキ場合ヲ一々列擧スルハ殆ト難キヿニシテ獨乙諸邦ノ上世ノ憲法ニ於テハ果シテ一般ニ憲法違反ト概言スルニ止マルト雖其ノ後ニ至リ法律ニ於テ凡ソ責任ノ事件トナルヘキモノヲ枚擧シタル場合モ無キニ非ス、其ノ多クハ前ニ載セタル千八百四十八年ノ獨乙國民議會大臣責任法ノ草案ニ見エタルモノニ依レリ

今獨乙諸邦ノ大臣責任ニ關スル法律ニ於テ大臣ニ對スル告訴ヲ起ス所以ノ事件トシテ枚擧スル所ノモノヲ集聚シ類ニ依リ之ヲ分ツトキハ即チ左ノ如シ

(一)故意ノ憲法違反　巴威里憲法(千八百十八年)第十章第六條○ハノーベル千八百四十八年九月五日法律第百○二條。憲法違反○オルデンブルグ原法第二百條第一節○ロイス原法第百十條○コブルグ、ゴダ原法第百六十五條○ワルデック憲法第六十六條○普魯西憲法第六十一條。バーデン憲法第六十七條ニハ「憲法又ハ憲法ニ準スト明知スヘキ權利ノ損害」トアリ原法ハ根本法ト譯スル者ト同一ナリ以下之ニ倣フ

(二)國憲ノ顚覆ヲ目的トスル所爲幷ニ憲法ノ格段ナル條規ニ違反シタルヿ。瓦典堡憲法第百九十五條○索遜王國憲法第百四十二條ニハ現在ノ場合ニ適用スベキヿヲ疑フヘカラザル原法ノ箇條ニ違反シタルヿトアリ。ブロンシュワイヒ州法第百○八條。

(三)故意ヲ以テ憲法ノ或ル明文ニ違反シタルヿ。クールベッセン千八百五十二年憲法第七十八條「憲法ニ違反セルヲ命令ヲ發シ又ハ之ニ副署シタル事」サクセンアルテンブルグ憲法第三十七條。故意ヲ以

テ憲法ヲ侵犯シタル事サクセンワイマル千八百五十年州法第四十九條。

右ノ外或ル諸邦ノ憲法ニ於テハ稍〻事ヲ精密ニシ且刑法上ノ範圍ヲ廣メンガ爲特ニ左ノ如キ事件ヲ掲ケテ大臣告訴ノ理由タルニ適シタルモノトセリ。

(一)違法ノ所爲(又ハ處分)ワイマル州原法第四十九條○マイニンゲン憲法第百四條○シユワルツブルグ、ルードルスダット千八百五十四年憲法第六條○リーヒテンスタイン千八百六十二年憲法第四十條○ヘッセン公國千八百二十一年七月五日法律第一條

(二)君主ノ命令ヲ執行セザル事。公國ヘッセン千八百二十一年法律第一條

(三)濫權不忠及收歛　ワイマル第四十九條○マイニンゲン第八十八條○オルデンブルグ第二百條第一節第二項。職務上ノ義務違反(シユワルブルグ、ゾンテルハウセン千八百五十七年憲法第六條○シユワルツブルグ、ルードルレダット第六條○ワイマル第四十九條

(四)官金ニ關シテ行ヒタル詐僞　ワイマル第四十九條

(五)法律ニ違反シテ司法權ヲ犯シ故意ヲ以テ行政事務ヲ怠リ又ハ故意ヲ以テ臣民ノ法律上ノ自由及名譽又ハ財産ヲ犯シタル事。ワイマル第四十九條。法律ニ違犯シテ捕縛ヲ命シタル事(オルデンブルグ原法第二百條第一節二項)。

(六)賄賂　普魯西憲法第六十一條○オルデンブルグ第二百條第一節第二項○ワイマル第四十九條。千八百六十三年普魯西ノ憲法草案第三條ニ於テハ賄賂ノ範圍ヲ定メントシタリ、即チ同案ニ依レハ(一)刑法第三百○九條ヨリ第三百一條マテニ該當スル場合(二)大臣外國ノ政